

『雑草軍団からラグビー日本一を目指し続けた軌跡』

本木 毅

第一部～ 雑草軍団 本郷高校ラグビー部 P 5 - P 2 2

- 運命の出会い P5
- 初の楯円球と仲間達
- ライバルに惜敗
- チャレンジ
- 花園予選への作戦 P10
- 花園切符を賭けた東京決戦
- 大浦監督との約束の大舞台
- 花園初勝利の後の波乱 P14
- 完全アウェイの死闘
- 優勝最多回数の北の古豪との初対戦 P16
- 激闘の後半戦
- 伝統の力
- 無情の結末 P20
- 本郷高校のリベンジと悲願達成へ P22

第二部～ 大学選手権初代王者で日本一へ挑戦 P 2 3 - P 8 0

- 大学入学と新しい仲間達 P25
- 法政大学体育会ラグビー部
- 法大元住吉ラグビー部寮での生活
- 1年生の仕事
- 対抗戦との力の差
- 離脱
- 神聖なる行事
- 転機
- 緊急事態
- 初めての渡航 P32
- 初の南半球のラグビー王国 ニュージーランド
- NZ最初の対戦相手
- 8月 8日 月曜日
- 出会いと別れ
- 8月 10日 第二戦
- 8月 11日は休日？
- 8月 12日

■8月 14日第 3 戦	P37
■8月 17日第 4 戦	
■NZ 第 5 戦	
■空路シドニーへ	
■8月 20日 テストマッチ	
■気分転換	
■最後の試合準備でサプライズ	
■伝統の国立シドニー大学	
■大事件	P43
■時間との戦い	
■一路東京へ	
■1983 年シーズン	
■関東大学リーグ戦開幕試合 VS 関東学院大学	
■80 年代当時のラグビーのレギュレーション（規則）	
■法政大学ウイングプレイヤーの鉄則	
■関東大学リーグ戦 第 2 戦 VS 国士舘大学	P48
■レギュラージャージ	
■秩父宮ラグビー場で大学初試合 VS 中央大学 ライバル対面の西選手	
■優勝を賭けた専修大学戦でもう一人のライバルと激突	
■外国人戦力強化の大東文化大学戦	P53
■交流試合で初の帝京大学戦	
■昭和 59 年（1984 年）シーズン	
■ルーツ校慶応義塾大学	
■初の本郷高校の後輩が加入	
■夏合宿でライバルとの対決・そして怪事件	P59
■日大戦	
■2 連覇達成へ	
■釜石合宿	
■レジェンド達の直接指導	
■2 年連続帝京との交流試合	P65
■交流試合ハーフタイム	
■リーグ戦選抜チーム	
■法政大学ラグビー部に激震	
■島崎新体制	

■YCAC JAPAN 7人制大会で金星	P72
■最終学年の春シーズン	
■リクルート活動	
■リクルート活動②	
■リコー本社訪問	P77
■リーグ戦の敗戦	
■引退試合V S 中央大学	

第三部～ 和製オールブラックスでの挑戦 P 8 0－P 9 5

■春の東日本大会	
■リコーラグビー部の歴史	P83
■入部1年目の活動	
■駒澤大学の電話ボックスで事件	
■昭和 62 年度（1987 年）ニュースター誕生	
■石塚さんの去就	
■1986 年から 95 年度までのラグビー勢力図と全国初タイトル奪取	
■母校法政大学 ラグビー大学選手権初代王者復活への歩み	
■あとがき	P95

■ 第 1 部～雑草軍団 本郷高校ラグビー部

時は今から 39 年前の昭和 54 年（1979 年）、私の人生を大きく変えた運命の出会いがあった。この話は、その出会いから、ラグビー日本一を目指して歩んだ 14 年間の記録である。

私は、練馬区の公立校、開進第 4 中学校に通っていた。この学校は当時軟式野球部が非常に強く、過去 2 回の全国制覇を達成した事のある公立中学であったが、私はその中で剣道部に所属。剣道部を練馬区で初の優勝に導き、個人では武道館の全国中学校錬成大会でベスト 16 に入った東京チャンピオンで、練馬区にある古豪東松館道場で、部活以外にも日々精進していた、ちょっとした少年剣士であった。

本郷高校に入学したのは、昭和 54 年 4 月（1979 年）の事であった。巷では、インベーダーゲームの大流行、自動車電話サービスの開始、ドラえもんが放送開始した年である。私は高校受験に失敗し、大学の付属高校、第一志望であった都立校に相次いで不合格。合格したのが本郷高校だけだった。受験に失敗した事もあって、私自身の高校生活は決して明るいスタートでは無かった。

高校に入学すると、既に私の実績が剣道部に伝わって居て、すぐに勧誘を受けることになる。元々部活はやるつもりであったので、剣道部にはすぐに入部するのだが、入ってすぐに後悔する事に。今でこそ、本郷の剣道部はかなり頑張っていると耳にしたことがあるが、当時の剣道部はひどく弱い集団だった。2 年生、3 年生で私に敵う相手が一人も居ないのだ。私は、団体戦では常に大将を任せられたが、団体戦で私の所まで 2 勝以上で回って来た事は皆無であった。唯一活躍できたのは個人戦。豊島区の高校剣道大会で、1 年生ながら優勝を飾る事ができた。これが高校時代の剣道部での唯一の勲章である。

【運命の出会い】

そんな悶々とした高校生活を送っていたのだが、唯一の楽しみがあった。幼少期から音楽（ピアノ）に親しんでいた事もあり、中学時代に音楽素人の友達を誘ってバンドを結成。そのバンド仲間と週末には自宅で練習し、3 月に御茶ノ水にある楽器店のホールで、単独ライブを行う事を目標に頑張っていた。洋楽ではディープ・パープル、サンタナ、邦楽ではツイストとか、プリズム、日野皓正など幅広く演奏する楽しいバンドだった。高校から加わったメンバーの中に、3 人のクラスメートも居た。現在プロのトランペット奏者である、吹奏楽部の藤井陽一。大手部品メーカーで活躍する、陸上部のキーボード奏者遠矢工。そして、卒業後『遙かなるニューヨーク』で潮賞を小説部門で受賞した、リードギターの橋本康司郎の 3 名である。

2 学期のある日曜日に剣道部の練習で、いつものように銀杏並木をジャージ姿で歩いて部室に向かおうとしていた時、右前方にある体育教官室から、担任の西川路先生が叫んでいる。

『おーい本木 ちょっと教官室に来て！』なんだろうと思いつつ行ってみると、そこには陸上部顧問の西川路先生と、あの強面の大浦先生が座っていた。

西川路先生『大浦先生、こいつがうちのクラスの本木です。足はクラスで一番早いです。』

大浦先生『いや～、今窓から校門の方を見ていたら、おまえさんが入って来てな、西川路先生に、あの大学生は誰だ？と聞いたのだよ。そうしたら、内のクラスの本木ですよ。

と言うじゃないか。それで、呼んでもらったのだ。』

私『はい……』

大浦先生『単刀直入に言うと、おまえラグビー部に入らないか？』

私『え？ラグビー部ですか？自分は今剣道部に所属していますので、無理です。』

大浦先生『剣道部の顧問には俺からきちんと話すから、心配するな。お前がもし来てくれたら、本郷高校ラグビー部も全国の花園大会に間違いなく行ける！』

この全国の二文字が、当時悶々としていた私の心に響いた。だが、ラグビー部の練習は並みじゃないと聞いていたし、もし今入ったら、単独ライブに向けての練習が出来なくなってしまふ。私はバンドマスターだったので、いまこの段階で脱落する事は、他の仲間を裏切る事になるので無理だった。

私『ちょっと考えさせて下さい。』

として、親とも相談したいと、その場での回答は避け、持ち帰らせてもらう事にした。しかし、この時の全国の舞台に行けると言う、恐らく大浦先生のなんの根拠も無い勘だけの言葉に誘われ、信じてやってみようという気になった。単独ライブの日程が 3 月 20 日だったので、4 月 1 日からの入部で良ければという条件で、入部する事になった。これがラグビーとの出会い、いや、私の人生を変えた大浦先生との出会いだった。

【初の楯円球と仲間たち】

当時のラグビー部は、各学年 25 名前後でトータル 75 名位の所帯の部活動で、昭和 53 年度（1978 年）全国高校サッカー選手権 3 位のサッカー部に次ぐ、大所帯の部活動であった。サッカー部とはグラウンドを半分ずつに分けて、サッカー部は正門側、ラグビー部は体育教官室側を使用した。サッカー部は名将阿出川先生が、竹の棒で部員のケツを叩きながらの指導をしていた。『ほらほら、リズムリズム、リズムが悪いぞ～！』と、ブラジル体操をする部員たちに元気よく声を掛けている。

大浦先生は、練習中あまり声を出したりはしない。ただじっくりと練習を腕組んだ仁王立ちで見ている印象が強い。でも選手の一挙手一投足を細かく観察していたのだと思う。あの威圧感は、今でも体が覚えている。私の当時のポジションはセンター。背番号でいうと 12 番 13 番がそうである。当時の三年生のセンターは、大木先輩と石田バイスキャプテンの二人。私の相棒となるもう一人のセンターは、サッカー部に入部しようと体育教官室に行き、留

守だった阿出川先生の代わりに、大浦先生に強引に勧誘された千葉（帝京大）だった。この3人と一緒に、切磋琢磨する日々が続いた。大木先輩は同じ12番となるので、

2年生の新入部員の私に、とても親切に指導してくれて、あっと言う間にパスも、当たりもできるようになった事をよく覚えている。その時のパスの特練に付き合ってくれたのが、同級生のスタンドオフ小林（明大）HB池澤（帝京・東芝）WTB清水（東洋大）千葉である。私もやる以上は真剣だった。一日でも早く、遅れを取り戻さないといけないという思いで、厳しい練習にも食らいついていく事が出来た。同級生でありながら、部の先輩でもあるという気持ちで接し、とにかく素直に吸収する事だけを考えて、毎日を送った最初の春シーズンだった。

【ライバルに惜敗】

全国大会の経験は無いというものの、当時の本郷高校は、東京で常にベスト4以上に食い込む実力は持って居た。3年生の高橋キャプテンの代は順調に勝ち進み、昨年の優勝校である目黒高校の優勝枠があった為、東京第二代表枠を大東文化一高と争う事になり、外苑前のラグビーの聖地、秩父宮ラグビー場での決戦に駒を進める事になった。当時の大東文化一高も全国はたしか未経験で、本郷とどちらが先に行くか切磋琢磨する間柄であった。

（全国大会での最後の東京決戦のカードでもある）ただ、試合の結果は、高校日本代表であった、大東の葛西キャプテン（No8で、のちの日本体育大学・サントリー・日本代表）の活躍に押され、17-10で惜敗した。高橋キャプテン・石田バイスキャプテンの悔し涙を見て、目頭が熱くなった。スポーツで泣ける事なんて、今まではあまり経験が無かった。やはりそれは、多くの仲間と苦しい練習を乗り越えてきた者だけが感じる連帯感なのだろう。この事をきっかけにして、ラグビーに対する姿勢も変わり、打倒、目黒、久我山、大東文化一高の思いが強まったのも良く覚えている。

【チャレンジ】

この敗戦をきっかけにして、大浦先生の花園への想いも、より一層強くなったものと思う。2年生の2学期の11月に、東京都の決勝での敗戦後、3年生は引退し、我々2年生の代が最高学年になった。同じ年の寒い冬から、大浦先生と我々のS56年組のチャレンジが始まった。

梅木恒明氏 目黒高校ラグビー部監督。当時のラグビー界では知らぬ人が居ないほどの名将であり、昭和55年度までに全国優勝5回、準優勝4回の実績と、強豪ひしめく東京都で14年連続花園出場を成し遂げていた、我々本郷高校にとっては、不動の壁と言っても良い存在であった。梅木監督は法政大学を卒業した後日本体育大学で教職課程をとり、目黒高校の教員になった。目黒のラグビー部を率いるようになって、たちまち全国にその存在を

轟かし、スパルタ特訓でのその存在感は異質の物があつた。大浦先生は、日体大繋がりをつかって、この巨頭の胸を借り、何とか全国の仲間入りを果たす事を目標に、八幡山の明大グラウンドで土日にしのぎを削る目黒・国学院久我山の門を叩いたのだ。

久我山の中村誠監督も、日本体育大学 OB。梅木監督も中村監督も快く胸を貸してくれることになった。しかし、最初はなかなか試合すら、させてもらえず、たまに 2 軍の選手と試合をさせて貰える程度であったが、我々本郷はたとえ目黒・久我山であろうが、2 軍が相手を出来るレベルではない事はすぐに証明され、やがて 1 軍のチームと試合をさせて貰えるようになった。毎週土日の八幡山の三つ巴は壮絶極まりないバトルの連続で、試合が終わって、着替えて帰ろうとしている相手に向かって、もう 1 本をお願いしに行く事もしばしばあつた。ここが大浦監督のしつこさが良く出ているエピソードである。もう 1 本お願いしに行った時の目黒のメンバーのいやそうな顔は、今でも鮮明に覚えている。時が進むにつれ、我々がそのもう一本をお願いされる側にだんだんとなって行ったのが、我々の代が 3 年生になった頃である。

東京都の春季大会が始まった。当時は現在とは違い、ラグビーの人気は意外と高く、東京都にラグビー部のある高校は 120 校以上存在していたのだ。その頂点を決める大会である。新人戦で全勝の好成績を上げた我々は、4 強の一角を占めるシード校になった。順調に進めば、もう一つの全国優勝経験のある強豪、国学院久我山と決勝で当たる事になる。1-2 回戦はシード権で試合なし、3 回戦の都立田園調布戦の初戦から始まり、都立武蔵、都立富士と準々決勝まで大勝で勝ち上がり、準決勝では、のちの明治大学のフッカー中村紀夫（現サントリーサンゴリアス中村駿太選手の父）が居る城北高校と激突。21-6 で退け、ついに東京都の頂上決戦に辿り着いた。相手は第一シードの国学院久我山である。この頃、我々ボックスの戦略を主に考えて居たのが、控え HB の山崎である。ボックスコーチが居なかった当時の本郷にとって、彼の他校分析などは非常に大きな存在であつた。

準決勝で 6 失点し、厳しい指導を受ける。その最中も目黒を分析する山崎（右から二人目）



大雨の後の成蹊大学グラウンドでの国学院久我山との試合は、予想通り死闘となった。明大八幡山グラウンドでの戦いは、勝つこともあれば、負ける事もあるというほぼ互角の戦いになって来ていたので、公式戦全勝同士の戦いはどうなるのか、注目の試合となった。結果 14-8 の 1トライ 1ゴール差で本郷が勝利を収め、東京チャンピオンの初タイトルを取ったのである。※当時の得点はトライが 4点ゴール 2点

東京都総合体育大会 初優勝記念写真 松平頼明校長とデザイン科の前で



【花園予選への作戦】

本郷高校は、全国屈指の強豪校国学院久我山を都大会の決勝で破った事により、高校ラグビー界でいきなり注目されることになった。過去になかったような取材攻勢に合う。プレイボーイやプチセブンと言った女子高生向け雑誌などに、写真入りで掲載された。いちばん戸惑っていたのは大浦先生ではないだろうか？そんな事で浮かれない様にと、先生からは選手に口酸っぱく申し渡された。春の都大会のあと、我々は関東大会のAブロックへの出場を果たし、これまた全国大会上位常連の熊谷工業と対戦。15-0の完封で、熊谷工業をも下し、本郷の評価は鰻上りに上昇した。そんな中、大浦先生が取った作戦は、八幡山詣での中止であ

る。目黒・久我山、特に常勝目黒高校が、花園予選決勝の相手にほぼ決まったことにより、手の内をこれ以上見せない為の判断だった。

それ以降は、当時の神奈川の雄、相模台工業（松沢監督は大浦先生の日本体育大学の後輩）に遠征をしたりして、全国区の高校との対戦を所々で入れてもらい、夏合宿では、通常の中湖合宿以外に、初の菅平二次合宿を敢行し力試しをしていった。本郷は全国常連の高校に対しても連戦連勝の破竹の進撃を見せ続け、ついに 10 月 21 日に外苑前の聖地秩父宮ラグビー場で決戦の日を迎えたのである。

【花園切符を賭けた東京決戦】

ついにその日が来た。はやる気持ちを抑える意味も含めて、大浦先生と選手全員で神社にお参りに行き、必勝を祈願した。当時の学園長であった、高松松平家 13 代当主松平頼明先生ゆかりの金刀比羅宮へお参りしたのである。

夢にまで見た舞台。秩父宮の東京決戦は、まず、第一試合で国学院久我山と城北高校が合いまみれていた。サブグラウンドに入っていくと、久しぶりに顔を合わせる、褐色に日焼けした目黒高校の面々が、既に入場していた。梅木監督の実家のある九州大分での合宿で走りまわってきた様子が手に取るように分かる威圧感であった。エンジ色のジャージと肌の色が一体化したあの感じは、見た者全てに強い印象を与える。

この日は、第一地区・第二地区共に各高校全校応援を実施したため、秩父宮はほぼ満席の凄い熱気であった。本郷高校の応援席には、この時に OB 会が新調してくれた、今では伝統となっている『燃えろ！本郷フィフティーン！』のブルーの横断幕がバックスタンドに掲げられている。おのずと気合も入る。負ける気はしなかった。本郷の生徒達も全員来てくれ、本郷の応援席のバックスタンドは黒い学生服で埋め尽くされた。第一試合の結果は、常勝国学院久我山が、城北高校を抑えて、東京第二地区代表の座を射止めた。さあ次は我々の出番である。午後 1 時、決戦の火蓋はレフェリーの甲高いホイッスルの音で切って落とされた。



開始早々、敵陣ゴール前で迎えたチャンスに本郷フォワード陣がボール素早く確保、左ラインにスクラムハーフの池澤から素早く展開され、スタンドオフ小林にボールが供給され、センター13番の千葉の所でゲインラインを突破。完全に余った状態で、左には私と、ウイングの清水がバックアップしていた。(上の写真)

ところが、千葉からウイング清水への飛ばしパスが珍しく前方にそれ、清水の手に渡らずグラウンドを転々としてしまった。そのボールをさっと拾い上げインゴールに飛び込んだのは、スタンドオフの小林であった。本当に頼りになる司令塔である。ゴールも難なく決めて6-0と先制することに成功した。固さでのミスは出たが、このトライで、我々の自信が確信に変わった事は間違いなかった。その後も攻撃の手を緩めず本郷は攻め続け、前後半合わせて5トライ4ゴール1ペナルティゴールの得点を上げ、31-0の完封劇で、14年連続花園出場の強豪目黒高校を下したのであった。



(秩父宮ラグビー場 東京都第一地区花園予選決勝 本郷 31-0 目黒 万歳する清水)

大浦先生は後の回顧録でこう綴っている。『目黒を破った瞬間、これは夢じゃないだろうなと何度も頬をつねってみた。』ノーサイドの瞬間。みんな駆け寄って抱き合って歓喜した。私はと言うと、残念ながらその試合の生の記憶が一切ない。プレーが切れた後に目黒の選手による後ろからの強烈なタックルを腰骨あたりに受け、脳震盪となり気絶したのであるが、そのまま継続してプレーしていたため、その前後の記憶が完全に飛んでしまっているのだ。

書き綴った内容は、後で見たテレビ放送の録画を見た記憶でしかないのが、とても残念である。今のルールだと脳震盪の選手は継続プレーが出来ないルールになっているが、当時は、やかんの水で目覚めた選手に、レフリーが声を掛け、簡単な質問に答えられれば、続行できるルールであった。つまり記憶が無くとも意識がハッキリしていれば OK であった。その時の質問は、『今日の日は？』『今どこ試合している？』の二つ。私は周りの状況を見て、頭を整理し、二つの質問に答えられた為、続行して良い事になった。脳震盪後は相棒の千葉にサインを何度も聞き返すなど迷惑を掛けた。今考えると少し怖い話である。



花園東京第一地区予選決勝メンバー 秩父宮ラグビー場

後列左から飯島、小田 中野 小林 千葉 清水 本木 阿久津 角バイスキャプテン前列左から白石、佐野、反町、原川キャプテン、生沼 池澤

【大浦監督との約束の大舞台】

一か月余りの準備期間のあと、いよいよ花園への出発のスケジュールが近付いてきた。本郷の関東での活躍の様子は、新聞や雑誌、ラグビーマガジン等であつと言う間に全国に轟いた。

シード校の発表では、西の優勝候補大工大高校と並ぶ評価を受け、本郷高校は初出場にも関わらず、第二シードの優勝候補に名を連ねた。我々にとっては、初出場であれ何であれ、日本一を目指して花園に行く、強豪ひしめく東京の第一代表であると言う自負と自信もあつたので、花園での目標は打倒大工大高と定められた。

新参者の我々にはなじみの旅館やホテルなど無い。大浦先生他が探してきてくれた宿泊先は、なんと京都であつた。東大阪の花園の会場から少し離れたところであるが、環境的には取材からも遠ざかり、静かに準備出来る環境であつた。

初戦の相手、宮之城高校は、花園に当時三度出場する鹿児島の高校であり、過去二回はいずれも初戦敗退。我々とは文字通り初対戦であつた。でもシード校として、初戦で負けるわけには行かない。サブグラウンドのアップ会場での事。大浦監督は初陣の前に自らを落ち着かせる意味と、皆の緊張をほぐす事を目的に、チーム随一の巨漢、反町光一（2年プロップ）に、群がる報道陣の前で側転をさせ、周囲を和ませた。＜反町光一（大東文化大・東芝府中）は 2017 年 10 月闘病の末他界。この場をお借りして心よりご冥福をお祈りいたします。＞

我々は、初戦開始直後から良い形をボックスで作り、FWのドライビングモールやスクラムなどで順調にトライを重ねて行った。フォワード攻撃の核になっていたのは、ナンバーエイトの生沼を中心に、原川キャプテン、中野の両フランカーの第 3 列の機動力を生かした攻撃と、ロック白石、飯島、プロップ小田、反町、フッカーの佐野の前 5 人を中心にしたスクラム・モールのパワープレーだ。大学の監督等も花園には大勢視察に来ており、話題となっていた我々の試合も例外では無かつた。後半の最後の最後に、ゴール前のチャンスで池澤から私に直接ボールが回って来た。目の前の対面を何とかすればゴールはすぐそこだ。私は迷わず相手目がけて突っ込み、外側にステップを踏みながらタックルに来る対面の肩を左手のハンドオフで落とし、ゴールに飛び込んだ。小林のゴールも決まり 30-0 で初戦突破だ。

完封は良かったのだが、初戦の戦いとしては不完全燃焼と言う、大浦先生の評価だったのであろうか、あまり満足した様子でもなく、プレスへの応対でもそのようなコメントを残していた事を覚えている。浮かれない為に『勝つて兜の緒を締める。』当時まだ 38 歳だった先生からすると、教科書通りの指揮官の振る舞いだったと思う。しかし、兜の緒は締まって居なかつたのだ。

(写真は 1 回戦対宮之城高校戦の筆者 右端はフルバックの角)



【花園初勝利の後の波乱】

12 月 30 日宮之城高校の試合に勝った晩の事である。花園で正月を迎えることが出来たという、第一関門突破の喜びで、我々選手の気持ちは少しだけ浮かれてしまっているのだと思う。宿舎での夕食。その後のミーティングでもう一度次戦の相手、これまた大阪第二代表で常連の興国高校との対戦について戦略を練った。戦略と言っても、見たことも対戦した事も無い相手。今の様に情報を取る事も容易な時代では無かったので、大浦先生からは、相手は地元大阪のチームである事で、雰囲気には飲まれないよう、自分たちのやってきたプレーに集中するように指示が出た。ミスしたほうが負けると言う事を肝に銘じろとの事である。

この日の消灯時間は 23 時となっていた。5 人程度の和室の相部屋の雑魚寝の宿舎で、昔ながらの 100 円入れて見るテレビが部屋に設置してあったので、キャプテンの原川と同部屋だった私たちの部屋では、消灯はしては居るものの、100 円を入れて、当時流行っていた深夜番組、11PM を皆で見っていたのである。その時、大浦先生の突然の見回りが入った。

バタン！と急に部屋のドアが開くと、ドアの真ん前に座っていた私の顔面に、大浦先生の足裏が飛んできた。『お前ら！ 何をやっているのだ！！とっくに消灯時間過ぎているだろうが！』 『原川、全員すぐ食堂に集合させろ！！』大浦先生の逆鱗に触れてしまったのである。その後、学校の代表として来ている事への自覚、サポートしてくれる親、後援会、OB 会の皆さまの支援あつての我々なのだと言う事への感謝の気持ちについて、延々と夜中の 1 時過ぎまで説教が続いたのは言うまでもない。原川主将を中心に、ここで初めて兜の緒を締めて興国に立ち向かう事を誓ったのだ。

【完全アウェイの死闘】

昭和 57 年 1 月元旦 (1982 年)。東大阪花園ラグビー場で新年を迎えた本郷フィフティーンは、大阪の雄、第二代表の興国高校との対戦を、初のメインスタンドで迎えた。正月休みの花園ラグビー場は、地元大阪のチームの出場により満員御礼。東京から来ている我々にとっては、異様な雰囲気味わう事になる。目の肥えた大阪のファンのヤジはなかなか鋭い。ただ、大阪弁があまり耳慣れていなかったためか、さほど気にならなかったのは多少幸いしたと思う。それでも完全アウェイの雰囲気は、やはり特別なものであった。

この日の我々の試合は、メインスタンドの第 4 ゲーム。つまり二回戦のメインゲームであった。一進一退の攻防、アウェイの雰囲気に飲まれ気味の我々の攻撃も、今一つ精彩を欠き、両者無得点のまま前半を終了。ハーフタイムで、大浦先生の話が選手たちに向けられた。

『どうだ？これが花園だよ。思うようにゲームさせて貰えないだろう。地元の興国は我々とは応援の規模も違うし、必死だよ。お前らがいい加減な気持ちでやって勝てるような相手じゃないって事だ。』

『いいか。後半彼らはもっと必死になって、新参者の本郷を潰しに来る。お前らがそれ以上に必死になって、自分たちのラグビーを見せてやれ！』という言葉に送られ、後半の 30 分に突入した。

後半。大浦先生の言う通り、彼らの目の色が変わり、さらに気合が入って来ている事をひしひしと感じる事が出来た。こういう時の応援は、やはり選手に力をくれる。我々には、3 万の観衆中 100 人未満の少ない応援。その声はフィールドにはほとんど届かない。円陣を組み原川主将から『よし！あと 30 分！絶対勝つぞ！おー！！』と全員気合が入り、ポジションに散って行った。この年の本郷高校は、攻撃力もさることながら、守備力も高く、ここまで与えたトライは春の決勝で久我山に与えた 2 本のみだった。平均失点も 3 点以下と言う驚異的数字を残していたのだ。なんとか点さえ入れれば、絶対に勝機はある。みんなそう信じて後半に臨んだのだが、なかなか敵陣深く攻め込む事が出来ない。相手の気合に押され、自陣での戦いを余儀なくされていた。ピンチが来るとスタンドオフ小林のロングキックで陣地を取り戻すのがやっとと言う試合展開になった。だが、そのキックの伸びを見て、後半の右斜め後方の生駒山おろしの風を、小林は見逃して居なかった。

後半の 20 分を経過した頃、敵陣の 22m ライン外側の左側メインスタンド寄りの場所でフリーキックを本郷が得た。フリーキックとは比較的程度の軽い相手の反則時に与えられるキックの権利であるが、直接ゴールを狙う事は出来ない。通常は、ハイパントなどで、相手陣深くに蹴り込み、落下点でボールを奪って攻撃に繋げる作戦を取るのが常套手段である。

スタンドオフ小林は、スクラムハーフ池澤にボールを渡しキックを指示した。「ちょん蹴りして真後ろの俺にパスをよこせ。」これで池澤は小林が何をしようとしているかを瞬時に理解した。言われた通りに池澤は、グラウンドに置いたボールを軽く足で蹴りリスタート、そのボールを真後ろに位置する小林に素早くパスした。相手はあつけにとられ、前への出足も鈍っていた。小林はゆったりとしたフォームで狙いを澄まし、ゴール目がけてドロップゴールを蹴り込んだのだ。ドロップゴールとは、一回地面にバウンドさせたボールを蹴ってゴールを狙う事で、成功すると3点が与えられる飛び道具である。小林はキックの名手である。後半に入っての右後方からの生駒山の風を活かすチャンスが必ず来ると、このチャンスを待っていたのだ。通常左斜めからのキックは、ゴールポストの間口が狭く見えるため、成功率は落ちる。小林の狙いは右ポスト目がけて真っ直ぐ強く蹴る事で、右後方からの生駒おろしの風に乗せて、ボールを巻くようにゴールする事であった。レフリーが高々と手を上げてホイッスルを吹く。後半20分。ドロップゴール成功。本郷3-0興国。残りの10分。花園ラグビー場のメインスタンドは、緊張と興奮で観客のボルテージも一気に上昇した。残り時間、興国高校の猛攻を受け続けたが、責められては必死のタックルで守って、キックで陣地挽回し、凌ぎ切った本郷が、今大会最小得点の3-0で勝利した。キックの名手小林晋一郎のドロップゴールと、本郷高校全員の鉄壁の守りで勝利を掴んだ、チーム力の勝利だった。

【優勝最多回数の北の古豪と初対戦】

正月3日。花園ラグビー場では、準々決勝ベストエイトの激突の日を迎える。本郷高校は午後1時過ぎの第二試合に、メインスタンドに登場した。準々決勝も全国屈指の高校ラグビーの激突とあって、非常に人気の高い日であり、4試合全てメインスタンドで行われる為に、会場は満席となる。立ち見も入れて約3万近いお客さんでひしめく、最も熱い日でもある。

本郷高校の相手は、42回目の花園出場。全国優勝最多13回の秋田工業高校。北の古豪である。本郷高校のメンバーは、予選からの不動のメンバーとなった。FW陣1番プロップ小田、2番フッカー佐野、3番プロップ反町(2年)、4番左ロック白石、5番右ロック飯島6番キャプテン左フランカー原川7番右フランカー中野、そして8番ナンバーエイト生沼。BKSハーフバック陣9番スクラムハーフ池澤10番スタンドオフ司令塔副主将の小林、スリークォーターバック陣11番左ウイング清水、12番左センター本木、13番右センター千葉、14番右ウイング阿久津(2年)15番フルバック角。興国高校との激戦から、一日おいてリフレッシュした我々は、万全の心技体で、この決戦に臨んだ。

前半、風上スタートの本郷は、積極的に攻めた。まずは先制する事が絶対必要だった。前半11分を過ぎたころ、敵陣深く攻め込む事に成功した本郷は、池澤のモールからの左サイドアタックで抜け出し、ゴール寸前まで迫った。インゴール目前まで攻められた秋田工業は、苦し紛れに逃げるタッチキックをインゴール内で試みるが、左フランカー原川キャプテンの猛

烈なチャージでキックをブロックする事ができ、インゴールに転々とするボールをそのまま原川が抑えてトライ。先制する事に成功した。ゴールは失敗に終わって 4-0。

(前半 11 分本郷高校HB池澤の突進を必死で止める秋田工業フランカー渡辺キャプテン)



秋田工業も反撃を試みて同じようにゴール前に迫った。ここで秋田SH村井（明大OB）がスクラムサイドを突いて抜け、そのままゴールに飛び込みトライ。ゴールも決まり 4-6 と逆転を許す。そのまま前半終了となって追う立場に変わった本郷であったが、ハーフタイムに大浦先生の喝が入った。『これが伝統校の力だよ。後半先に取り返さないと、厳しくなるぞ。思い切って行こう！』我々は、後半は思い切ってバックスの展開ラグビーで勝負する事にした。



(満員の花園メインスタンド。秋田工業戦の後半 11 番の清水にサインを伝える筆者)

【激闘の後半戦】

後半風下に入った本郷は、不利な状況になる。しかし平均得点力 40 点以上の爆発力を誇るボックスで勝負する事に迷いは無かった。センター付近の左サイドのマイボールラインアウトを得た本郷は、思い切って勝負に出た。司令塔小林から、ボールを回すよう HB 池澤に指示が出て我々はオープン攻撃での勝負に挑んだ。上手くラインアウトをキャッチした飯島から、池澤・小林とテンポよくボールが回された、私の所への小林からのパスが若干前に流れた、必死で右手を伸ばし奇跡的にシングルハンドキャッチする事が出来、千葉にパスを通した。この小林のパスのズレがラインに若干の溜めを作り、千葉が持った時には相手センターがすぐそこに来ていた。千葉は出来るだけ対面を引き付け、体を相手に当てながら横にとっさに入って来たフルバック角にボールをノールックで浮かしてパス。これは二人の間であうんの呼吸である。角の後ろからの声『浮かせ!』『離せ!』でパスの距離を微妙に調整していたのだ。するとぽっかり空いたセンターとウイングの間のスペースを角が切り裂き、防御ライン突破した。角の縦へのスピードは素晴らしく、少し外寄りに位置していた相手フルバックをも一気に抜き去り、ゴールポスト中央に目の覚めるようなトライ。ゴールも決まって、10-6 と再逆転に成功した。秋田工業も粘りを見せ、その後 1 トライを返され、10-10 の同点となる。同点にされた我々本郷は、攻め続けるしかなかった。

後半の中盤過ぎに、秋田工業陣内の深い位置で。マイボールラインアウトのチャンスを得る。この時、小林は風下であったが、距離もそれほど無かった事もあって、ドロップゴールで 3 点の勝ち越しを狙った。小林のドロップキックは、生駒山おろしの風を真正面から受け、風に流されてゴール手前に落下し、インフィールド 22m 内で転々と、楯円球独特の転がりをみせた。処理に戸惑う相手フルバックがボールを掴もうとした瞬間、本郷の 2 年生ウイング阿久津（日本体育大学・トヨタ自動車）のタックルがゴールライン寸前で炸裂。相手フルバックがボールをこぼした所に、右センターの千葉が素早く走り込み、そのこぼれ球をすくい上げ、そのまま 1m 先のゴールラインにダイビングトライを決めた。小林のドロップゴールが、生駒山の強風によって絶妙な攻撃的パントになったのだ。

14-10 と再び本郷がリードした。本郷の立て続けのトライに、古豪秋田工業も浮き足だつ。残り時間がだんだんと無くなってきた。本郷勝利の瞬間まで後 5 分と言う所まで時計の針は進んでいた。

【伝統の力】

秋田工業の中野監督から檄が飛ぶ。花園のメインスタンドは、繰り広げられる攻防に緊張感が漂って来た。新興勢力本郷がこのまま逃げ切るか、優勝経験のある古豪秋田工業が、逆転で勝利をもぎ取るのか？3 万の観衆の目は、グラウンドに釘付けとなった。

時間が無いところでの 4 点差。これはペナルティゴールの 3 点では追い越せない点差。秋田工業が勝利するには、トライとゴールを決めるしかなかった。本郷は追いつく秋田工業に必死のタックルで防御していたが、時計の針がさらに進んだ後半 29 分、その必死のプレーの中で、本郷が反則を犯してしまった。位置は自陣 22m ラインの内側のゴール前である。秋田工業は、伝統のプレーをここで出してきた。ドライビングモールである。秋田スクラムハーフ村井が小さくボール蹴ってリスタートし、ナンバーエイトの泉（新日鉄釜石 V7 メンバー）にボールを渡し、その周りを味方の FW でがっちり固めたモールを形成し、本郷 FW を一気に押し込んだ。強烈な押しに、ジリッジリッと本郷 FW が後退する。残りワンプレーと言う状況で、双方負けられない攻防であった。そのモールがゴールライン上に達するか達しないかと言う瞬間に、モールが崩れた。ボールの行方を覗き込むレフリー。一瞬の間を置き、レフリーの手が高々と上げられ、トライを知らせるホイッスルが鳴り響いた。茫然とする本郷フィフティーン。14-14 と同スコアに追いつかれてしまったのだ。左隅からのゴールが決まれば、逆転を許すことになるが、秋田工業を狙ったゴールは、生駒山からの風に流され、ボール左に僅かに外れ、そのままノーサイドとなった。

【無情の結末】

ラグビーに延長戦やPK合戦は存在しない。準決勝への出場権は、キャプテンによる抽選で決めるのである。秋田工業キャプテン渡辺と本郷高校キャプテン原川が、まずジャンケンで先に引くか後に引くかを決める。くじには、準決勝出場権ありの札が一枚だけ入っているという仕組みである。ノーサイドの後、選手一同はお互いに礼をしたあと、どちらが進むか決まっていない状態で、キャプテン以外はロッカールームに全員引き揚げる。その後で会場の一室で抽選が行われるのだ。壁に頭を打ちながら泣き叫ぶメンバー、床に座り込みうなだれるメンバー。勝ちを9分9厘手中にしていた最後の最後での反則から、自力勝利を逃してしまった悔しさが、我々のロッカーからは滲み出ている。待てども、待てども抽選の結果は我々には伝わって来なかった。大浦先生は知っていたが、泣きひしがれる我々にその結果を伝える事は出来なかったのだと思う。14-14 抽選で準決勝出場権無し。公式試合戦績 16戦 15勝 1分、総得点 634点、総失点 50点が、我々S56年組の最終戦績である。本郷高校ラグビー部の長い歴史の中、唯一公式戦無敗で花園出場の扉をこじ開けたこのチームの一員として、大浦先生と一緒に戦えたことを私は誇りに思うと共に、私の人生における大切な出会いに感謝している。



秋田工業に同点にされた直後の大浦監督



新聞記事の右側奥から、呆然とする小田、頭を抱え悔しがる千葉、全身が脱力状態の白石)
 ※ (春の高校総体決勝の国学院久我山戦勝利の初優勝メンバー)

後列左から、反町 (2年)、白石、飯島、小田、中野、斉藤、佐野、小林、本木前列左から、
 阿久津 (2年)、池澤、原川主将、大浦監督、角副主将、千葉、清水



2018年1月13日。本郷高校ラグビー部の同期会にて



前列左から、6番原川主将 8番生沼 13番千葉 12番本木 1番小田 9番池澤後列左から 5番飯島 15番角 7番中野 二人飛ばしてウイング畔上

36年ぶりのメンバーも居て夜中まで話は尽きなかった。

【本郷ラグビーのリベンジと悲願達成へ】

昭和 60 年度の全国高校ラグビーフットボール花園大会に、我々の4年後に出場した本郷高校フィフティーンは、準々決勝で因縁の相手秋田工業と対戦する事になる。新聞紙上では、56年度の死闘の末の引き分け抽選試合の因縁が紹介される。私も、それを知って花園ラグビー場に足を運んだ。かわいい後輩達の中に、私のバンド仲間の従弟である小倉選手が私の背負っていた背番号 12 番をつけて出場するというのも、見に行こうと思ったきっかけであった。この年の本郷は、小粒ながら粘り強いタックルで東京を再び制して、花園に乗り込んでいた。この試合で秋田工業を 14-3 のノートライに抑えての見事な勝利で、我々の無念を晴らしてくれた後、準決勝も相模台工業に 12-10 で勝利して、本郷の目標であった決勝の舞台へと進む。この年の花園の対戦は、最後の東京決戦として記録に残るが、対戦相手は大東文化一高。残念ながらこの戦いには 0-8 で破れてしまうが、最多優勝回数を誇る秋田工業に、真っ向勝負で完勝してくれたこの時の準々決勝は、胸のすく思いがした。何とか頂点に立って欲しかったが、それは、これからのちの世代に託せば良いとその時は思えた。

だが、本郷高校ラグビー部にとって、この時の戦績が頂点であり、その後これ以上の戦績を残せぬまま、最後に出場したのが 2010 年の第 90 回大会であるから、もう 7 年も花園の舞台から遠のいてしまっている。最後の花園の試合である、福岡高校との試合もロスタイムに現日本代表ウイングの福岡選手にタッチ際を走られて、逆サイドのウイングが必死に戻って止めたタックルがハイタックルと判定され認定トライとなって逆転負けを喫するという、これまた非常に悔しい終わり方で本郷ラグビーの最後の花園でのゲームになってしまっている。後輩たちに是非頑張ってもらい、何とか渡邊監督の花園初勝利の忘れものを、取りに帰ってほしいと願う。あくまで日本一を目指す明確な目標を持って、日々の練習をし、目の前の相手を一つずつ倒していく事。それ無しでは花園出場も無い。

学生である以上勉学最優先である事は、もちろん重要な事である。本郷高校には付属の本郷中学ラグビー部があり、この所力をつけてきており、東日本大会で準優勝するなど実績がついてきた。それだけの素材が上がってくるにも関わらず、その後高校で花園に行けないと言うのは、指導方針と、学生たちのマインドの問題だと考えている。それだけの素材が揃って入ってくる事など、我々寄せ集めの“雑草軍団”時代では考えられなかった。今の彼らは、“ラグビーエリート集団”なのである。

本郷高校の現在の偏差値は 70 の大台に乗り、一流進学校の仲間入りを果たした。それだけの知能とラグビーの基礎を持った選手達。明確な目標とそれを達成するための厳しい練習が出来さえすれば、間違いなく本郷ラグビーの復活の日は来るだろう。ラグビーで日本一を目指す事など、人生で何度も出来る事では無い。私は学生に是非人生で最も輝ける年代の時に、チームで勝ち取る日本一の頂きを目指して貰いたいと、切に願うのである。

■ 第二部～大学選手権初代王者で日本一へ挑戦

【花園第 61 回大会の結末から大学ラグビーへの挑戦へ】

全国高校ラグビー選手権、初出場の本郷のチャレンジは、儂くも引き分け抽選による、『出場権無し』と言う結果で終わった。秋田工業の準決勝の相手は、春の関東大会で本郷が 15-0 で破った相手、埼玉代表の熊谷工業であったが、秋田工業は本郷の分も戦うつもりで絶対に勝つと言う渡邊キャプテンの強い想いが選手全員に宿り 10-9 の 1 点差で勝利した。決勝は反対側のブロックで宮崎の高鍋高校の挑戦を 12-6 で退けた、第一シードの大工大高。古豪秋田工業との戦いは、大工大高 13-4 秋田工業で、4 年前の花園決勝での対戦に続き大工大高が勝利し幕を閉じた。

大きな、我々にとって歴史的な祭りが終わり、東京に戻った本郷フィフティーンの 3 年生は引退。即座に進路を決める為の受験体制を取らなくてはならない。ラグビーのスポーツ推薦

で大学進学するケースには、いくつかのパターンがあるが、全国区のチームについては、各大学からセレクション参加への招待があり、各高校の監督の推薦により選手がセレクションに送られる。その時期はまちまちであるが、全国高校ラグビー選手権などの大きな大会の前に既に行われるのが普通であり、有名校の選手達は大会の時には進路が既に決まっている選手も居るわけである。

この時の本郷はと言うと、有名校の枠には入っていない為、声が掛かりにくい状況だったと思うが、明治大学には、長い事お世話になって、当時の北島忠治監督の目にも留まった選手も居た事もあって、セレクションへの招待があった。本郷の同期からは、司令塔の小林と春の久我山戦でナンバー 8 をやっていた齋藤が参加し、見事に合格した。恐らく明治大学ラグビー部へ本郷高校ラグビー部の選手が入部したのは、これが初めてだったと思う。

私はと言うと、花園大会の 1 回戦終了時に、法政大学と中央大学の両監督が宿舎を訪れて、大浦監督に打診があったとの事であったが、大会中と言う事もあり、その話は大会後に、大浦監督より話を聞かされた。私は入学した時の成績こそ、学年で 18 位だったのだが、ラグビー部に入部後の成績ダウンは免れず、順位では 3 桁の域に達してしまっていたので、引退後は浪人する覚悟でずっとラグビーに打ち込んで来た。ラグビーも花園へのチャレンジで終了するつもりだった。ところが、全国制覇を達成する事無く、無情の抽選結果による引退と言う結末を受け、自分の心の中で『このままでは終われない。』と言う気持ちが強く芽生えていたのだ。そんな気持ちの中での二つの大学からのオファーに対し、大浦先生との相談により、結論を出さなければいけない時が迫った。

花園から帰った 1 月のある日、大浦先生から体育教官室に呼び出された。大浦先生『お前が知っているかどうか分からないが、法政大学も中央大学も、関東大学リーグ戦グループでは創世記からの古い大学で、特に法政大学は大学選手権でも優勝した事がある、旗頭的存在なのだよ。法政の石井監督は第一回大学選手権の優勝時からの古い監督で、法政は『ボックスの法政』として、早稲田大学と並んで展開ラグビーを得意とするチームだ。』

私『はい。良くは知りませんでした。リーグ戦では常に上位のチームだという事だけは知っていました。』

大浦先生『中央大学も良い大学だし、看板学部の法学部にも入れると言う事を言っているのだが、あとはお前さんの気持ち次第で決めれば良いと思う。法政大学の場合は、運動部の推薦であっても、試験の結果によって行ける学部と行けない学部が出てくるという話だぞ。法政大学へは、本郷高校ラグビー部からは、お前が行けば第一号だ。お前の成績だったら先生も自信を持って推薦できるよ。』

私『はい。分かりました。良く考えてどちらにするか決めたいと思います。』と教官室を後にした。ラグビーを続ける事の最大の目的としては、大学ラグビーにおいて、日本一を目指す大学である事。これが第一優先の選択項目であったので、厳しいと周りから聞かされてはいたが、東京6大学のラグビーの名門、法政大学ラグビー部の門を叩く事に心は決まっていた。一晩じっくり自分自身で考えて、大浦先生を通じ、法政大学に返事をする事にした。

【大学入学と新しい仲間達】

昭和 57 年 2 月に、私は法政大学で行きたい主要学部を 3 学部受験した。法学部・経済学部・社会学部の3つだったと記憶している。試験の結果体育推薦選手の合格レベルに達していなければ、不合格となってしまう。その場合夜間 2 部の試験をもう一度受けるチャンスがある訳だが、練習については、昼間の学校が終わった夕方からの練習になるので、2 部学生だと、授業がおろそかになる事は目に見えていた。なんとしても 1 部の学部合格を目指し、出来る限りの点数を取る必要があったので、自分なりに可能な限りの準備を行って試験に臨んだところ、受験した全学部合格。法政大学と言えば、やはり法学部が看板だったので、法学部への入学手続きを 3 月上旬に済ませ、本郷高校の卒業式の日を迎えた。

ラグビー部の同期の進学先もその頃にはほぼ全員決まっていた。明治大学、日本体育大学、日本大学、拓殖大学、東洋大学、専修大学、帝京大学、そして私の法政大学などの大学である。

皆からは『法政は練習きついらしいぜ！』とさんざ言われたが、私自身大学ラグビーにそれほど詳しいわけでも無かったので、あまりピンと来ていなかった。しかし、その言葉の真偽はすぐに分かる事になる。

【法政大学体育会ラグビー部】

川崎市中原区の東横線沿線に、元住吉と言う駅がある。慶応高校のある日吉から 1 個手前、渋谷よりの駅が元住吉である。そこに当時法政大学は、ラグビー部、陸上部、水泳部の 3 つの体育会の寮と、ラグビーグラウンド・スインミングプールを持っていた。3 月 20 日に集合日が設定されており、全国から新入部員がその日に元住吉ラグビー部寮に集合してきた。私はセレクションには参加していなかったので文字通りその時初めて同期の面々と顔を合わせる事になった。

同期の中に、因縁の相手が居た。秋田工業のフランカー、渡辺キャプテンである。通称アキナベ。広陵高校出身の同じくフランカーの渡邊も居たので、区別する為に同期の間でついたあだ名である。準決勝で大工大高に敗れた相手で、第 61 回花園大会の台風の目だった、宮崎高鍋高校のプロップ、高校ジャパンの林田城二（神戸製鋼 OB）。国体で我々東京代表と対戦した、オール広島の広島工業のロック上林。熊本工業で花園に出場したスタンドオフ村田

(マツダ自動車)。秋田工業と準決勝で戦った熊谷工業の左ウイング俊足の浅見。花園常連の兵庫報徳学園から、プロップ西条（現報徳学園ラグビー部監督）センターの黒谷など、みな全国レベルで活躍してきた選手ばかりである。早めに集合したのは、春シーズン前の基礎体力作りを、石井監督指導の下、1年生全員でスタートする為である。

石井監督は、顎鬚と口髭ともみ上げが全て繋がっているような風貌で、一見して普通の人では無いオーラを放っている有名監督である。右手の小指が外側に 90 度曲がっているのがもう一つの特徴でもあるが、とにかく凄くエネルギッシュな監督である事は、自他共に認める所であろう。その監督自ら、新人の体力強化に直接指導をすることになったのだ。まずは基本的な腕立て・腹筋・背筋・バービージャンプの4種目で全身を鍛えるトレーニングを、グラウンドの半分を四角く使って行う。各コーナーで種目を行い、グラウンドの1辺約50mをダッシュして次のコーナーに向かう。これを延々と行う。各種目は30回ずつとして、10周300回以上は行っているの、体中の筋肉がパンパンになる。私はこういう黙々と行うトレーニングは、どちらかと言うと嫌いでは無かったので、新人の中ではいつも先頭を切ってグラウンドを回っていた。中には『こんな練習やってられっかよ〜』とブツブツ小声で言いながら、列の後ろの方をマイペースで付いてくる選手もいたが、私は本郷で素直に言われた事をこなす習慣がついていたので、なんとかついて行ける範囲と自らに言い聞かせて、同期の仲間と歯を食いしばって頑張った。

【法大元住吉ラグビー部寮での生活】

東横線元住吉駅を下車し、駅前の『ランプ』と言う喫茶店側に出て、商店街を真っ直ぐ進み、横浜銀行元住吉支店を右に曲がると、我々が日頃度々お世話になった、食堂が並んでいた。『イチニのサンキチ』と言う定食屋と、中華料理店『ワンさん』である。練習が無い日は、寮の食事は出ないので、自分たちで食事は済ます事になっていた。私は、王さんの『から揚げ定食』がお気に入りであった。骨付きのチューリップスタイルの鳥の唐揚げが4個と、キャベツの千切り、そして定食の定番ナポリタンが添えられた一皿、それと餃子一人前、ライスは大盛りで食べるのが定番であった。それで1000円でおつりが来るのが嬉しかった。

日曜日の夕飯は、一年生の二人がコンビになって、朝から70人分の食事を準備する。体育会ラグビー部の食事量は凄い量である。業務用の4升炊きのガス炊飯器3台分のお米を炊き、寮生70人前の味噌汁に、おかずが三品と決まっていた。私は熊本工業出身のスタンドオブ村田と当番の時に、『ワンさん』の唐揚げ定食と餃子を再現してみた。約500個近い餃子の仕込みと、ナポリタン、後は鳥の唐揚げの3品のメニューである。朝買出しに行き一日掛かりでの仕込み、調理になるので、その日の練習には、食事当番は出なくて

良い事になっていた。言ってみれば忙しいけど休日のような、楽しいイベントの一つではあった。先輩からの評判も良く、この日の食事は綺麗に全部無くなった。この時の経験により、餃子の皮巻きに関してはプロ並みに早く、きれいに巻ける自信があるが、今はそのスキルを活かせる場面が無く残念である。

【一年生の仕事】

1年生には、部の仕事がそれぞれに与えられる。グラウンド係、ジャージ係等であるが、グラウンド係はグラウンド整備と、練習前のライン引きがその役割である。私はグラウンド係に任命された。どの係にも今で考えたら全く論理的で無い決まり事が存在し、それを守れなかったり、不手際があると、2年生からの絞りが待っている。当時の法政大学ラグビー部は、今考えると低迷期の出口を探し出せずにいた時期ではないだろうか？かつて早法時代と呼ばれた昭和39年度から昭和42年度の4シーズンがあつて、法政が音頭を取って創設された、関東大学ラグビー・リーグ戦グループと早稲田、慶応、明治が中心となる、関東大学ラグビー・対抗戦グループに分離して、初めて行われるようになった、全国ラグビー大学選手権の第一回大会の覇者が当時の鈴木秀丸監督と我々の石井徳昌監督率いた法政大学だったのである。その4年間で第1回と第4回の優勝を勝ち取った以降、優勝から遠ざかっていたのだ。最後に優勝してから既に14年の月日が経過していた。10年ひと昔と言うのだから、すでにこの段階で過去の栄光になってしまった時代と言っても良いかもしれない。そんな環境下で古い部のしきたりだけは引き継がれて、伝統のランニングラグビーは完全に影を潜めてしまっていたのである。

【対抗戦との力の差】

当時の大学ラグビーは、早稲田大学の司令塔、本城和彦氏(サントリーOB、全日本)、明治大学の司令塔、砂村光信氏(リコーOB、全日本)等のスタープレイヤーが存在した時代で、関東大学対抗戦グループが最も注目を集めるリーグであった。この二人が出る早明戦は国立競技場を6万人以上の観客で埋め尽くす人気カードで、ラグビー人気が最高潮の時代である。社会人ラグビーでは、松尾雄二氏(目黒・明治OB)率いる新日鉄釜石がちょうど7連覇の途中の頃であった。

大学選手権に出場する第一関門としては、関東では自校の所属するリーグのリーグ戦において、上位4チームの成績を残す事が、当時の第一の関門であり、その後で、対抗戦グループの1位~4位と、リーグ戦グループの1位~4位が、タスキ掛けで対戦する関東大学ラグビー交流試合に勝利して、初めて大学選手権出場への道が開けるという仕組になっていた。私が入学した年の昭和57年度(1982年)の法政はリーグ3位と低迷し、対抗戦2位の慶応義塾大学と交流試合で対戦し、接戦ながらも敗れ、大学選手権出場を逃してしまった。そんな低迷期の悪しき習慣の一つとして、学校にろくに行かない先輩たちは、留年

しても 5 年目 6 年目と部に残り、選手としてやり続けるような事を許していた為、若手が育たないという悪循環も引き起こしていたのでは無いかと考える。当時の大学ラグビーの規則では、選手登録（試合に出る可能性があるメンバーを日本ラグビー協会に申請する制度）が最初にされた年度から 4 年間は、選手として試合に出場出来る事になっていたのが、それが、この習慣を引き起こしていたに違いない。

【離脱】

低迷するチームを、何とか強くしたいと言う監督の想いが、スパルタ特訓と言う形として、当時の法政大学の選手達の育成方法に取られていた。これは石井監督流のやり方であるが、特に 1 年生がまだまだ大学生レベルのスキルや体になっていないという事もあり、徹底的にしごかれた。私が良く受けたシゴキの中に、何人かのFWの大きい選手を正面から当たって来させ、その選手を仰向けに倒すまで、連続してタックルを行う、相撲で言うぶつかり稽古のようなしごきがあった。私はボックスでは大きい方であったが、20kg 近くも体重が違うFWの選手たちを正面からタックルに行き仰向けに倒す事は、たやすい事ではない。仰向けに倒すまで延々としごきは続くので、早い段階で決めてしまわないと、自分の体力とメンタルが続かなくなり、結局何十本もタックルを連続で繰り返す事になる。このしごきだけは、本当に辛く、もうついて行けないと考えた事が何度もあった。肩の皮もケロイド状態になってしまう。でも、本郷高校から法政に入った第 1 号の私が、そんなに簡単に逃げてしまったら、本郷から法政へのルートは今後一切断たれてしまう。それを考えて歯を食いしばって、泣きながら相手を仰向けに倒すまで、やり切った日々が続いた。

このしごきは、当時巷の報道で、虐待が問題になっていた、『戸塚ヨットスクール』をもじって、『元住吉タックルスクール』と我々の間では揶揄していたが、春シーズンも終わりに近づいたころ、ついに 1 年生の中から脱落者がでた。このようなしごきが、彼が辞める本当の原因だったかについては分からないが、退部を申し出た人物は、あの秋田工業主将のアキナベだった。同期の間に衝撃が走ったが、彼は大学も退学し秋田に帰って秋田市役所のラグビー部に入ったとその後聞いている。その他にも 2 年生を含む数人が夜逃げをする事もあった。それほど上下関係も含め厳しい世界であった。

【神聖なる行事】

1 年生の間は、私はラグビーでは 3 本目でセンターをやっていた。3 本目とはトップチームから数えて三番目のチームと言う事で、ラグビー界では、それを 1 本目、2 本目、3 本目と言うように表現する。つまり、3 本目はトップの控え選手でも無く、公式戦には出る事の無い、未登録の選手と言う事になる。通常ラグビー協会に選手登録する選手は、2 本目までの選手と言う事になる。2 本目の選手には、関東大学ジュニアリーグと言うのがあ

り、その公式戦に出場するチャンスがある。ジュニアの試合で着るジャージは、法政はセカンドジャージと決まっており、法政大学の場合は、ゴールド一色か、ブルー一色のジャージが、ジュニア戦には使用されていた。あくまで 1 本目が着る、ゴールドとブルーの段柄ジャージは、神聖な物として扱われるのである。公式戦で使用されたジャージは、その日のうちに 1 年生によって洗濯が施されるわけであるが、これも伝統のやり方と言うのが当時あって、一般の人にはなかなか理解しがたい事が行われていた。公式戦が終わった後、集められたラグビージャージ一式は、ジャージ係により、夜 10 時頃 1 年生に配られる。洗い場は、元住吉グラウンドに隣接されている、水泳部のプールサイドである。プールの水とタワシだけで、全てのシミを落とさなければならない。ご存知の通り、ラグビーのシーズンは 9 月から 1 月までの 5 ヶ月間。冬も深まれば、プールの水温もかなり下がり、冬場のジャージ洗いは厳しいものがある。ジャージは全部で 21 枚。ラグビーの試合人数は 15 人であり、当時は怪我による交代しか許されなかった事もあり、基本的には 15 枚のジャージが特に汚れが激しい。公式戦も当時は何試合か法政の元住吉グラウンドで行われた事もあり、土のグラウンドでのジャージの汚れは尋常では無かった。それをシミ一つ無く、タワシと水だけで落とす事がどれだけ大変か、これはやったことがある人でないと分からないであろう。特に密集戦が主になるフォワードのジャージ 1 番から 8 番までは汚れが激しく、だれがどのジャージを洗うのかは、当日ジャージ係の仕切りによって行われるジャンケンで決められるのだ。

林田 『そろそろ、全員集まったな？じゃ、番号決めるじゃんけんや！』林田はジャージ係の責任者である。

『ジャンケンポイ！！』20 人で行われる気合の入ったジャンケン。負けると延々夜中まで仕上げられず睡眠時間を削らないといけなくなってしまう。皆必死である。最初のジャンケンで勝った者同士でさらに順位が細かく設定され、一番勝った者から順々に、洗うジャージを選んでいける。もちろん、リザーブの綺麗なジャージから選ばれていく事は言うまでもない。

『よっしゃ！』一番勝った者は一番きれいな物を選ぶ。ただ人数が足りないので、一番きれいな物から 2 枚を担当する。一度フォワードの物凄く汚れた物を担当する事になってしまった事があったが、綺麗に仕上げ終わるまで 2 時間以上を要した事があった。洗い終わった後は、ジャージ係によるチェックが行われる。『本木。この襟の所、あかん。アゲンや！』すると、指摘された箇所をもう一度やり直し、落ちるまで洗い続ける。最悪どうしても落ちない場合は、針で布を削るようにして汚れを落とすのだ。なぜ、このような場所で、水とタワシだけの洗濯方法で洗うのか？不思議に思われるだろう。先輩から聞かされた話では、まず、神聖なるジャージを洗っている所を、先輩に見られてはいけない。と言うのが理由だそうである。では洗剤を使ってはいけない事に関しては、明確かつ論理的な説明は聞いたことが無いが、ジャージは神聖なものであり、洗剤のようなもので逆に汚し

てはいけないと言った、精神論で説明された気がする。だが、法政のジャージはゴールドと言う特別色とブルーの段柄で、綿素材の襟とフェルト素材の背番号には白が使われている。特にゴールドの部分と襟と背番号の部分は、どうしても落ちない汚れが出て来てしまう。そういう時はジャージ係と相談して、匂いの少ない固形石鹸を内緒で使用して、何とか落として来た。今考えると凄い事やっていたなと思う。試合の前日に監督によるジャージ配りがあるのだが、ラグビーの場合塩で清められてから、メンバーに一人一人配られる。その時に一つのシミでも発見されようなら、1年生は連帯責任でたいへんなシボリが待っている。

グラウンド整備にも同じようなしきたりがあった。土のグラウンドの整備は、非常に手間が掛かる。グラウンド整備が要求される時は決まっていて、雨が降ってぐちゃぐちゃになってしまった後の整備は必須である。足形がついたままで翌日が晴天だったりすると、そのままの状態で固まってしまい、練習場として使用する事が不可能になってしまう。整備は雨の使用の後の翌朝 4時からスタートする。これについても『先輩に整備されている姿を見られてはいけない。』という理由から時間が設定されていた。グラウンド係だった私は、まず自分が寝坊しないように朝起きる所から始まり、他の係の人間と一緒に、各部屋を回って歩き、起きていない 1年生を起こして集合させるのである。グラウンドに全員が集合すると、二人一組で 1本のレイキを使い、一人が棒を引っ張り、もう一人が幅 40cm程度の熊手の金具部分を地面に押さえつけ、グラウンドの縦方向に整列しながら全面にレイキをかけて行く。ガチガチに固まる寸前の状態で表面 5センチ位の土を掘り起こすイメージである。1回目のレイキかけで表面を崩し、その後は土の塊を細かく崩す作業。そして最後に細かくした土を平らにならす作業で完了である。20人でやって大体 2時間から 3時間の作業である。このグラウンド整備での注意事項は、土の塊を残さない事。これが最重要項目となる。翌日の練習で一つでも土の塊が 2年生に発見されようものなら、同じように連帯責任でシボリが待っているのだ。

【転機】

1年生の間、私も様々なシゴキ・シボリを経験し、何度か辞めたいと思った事もあったが、なんとか 1年間をやり過ごし、ラグビー部員のまま、2年生に進級する事が出来た。2年生になれば、少しは環境が変わるであろう事を期待して、3月のシーズオフを過ごしていたところ、石井監督に監督室に呼び出された。監督室と言っても、寮の部屋の一室を改造した質素な部屋である。

石井監督『本木。先輩も一人も居ない環境で、良く頑張ってきたな。お前の恵まれた体格からすれば、もっと上でやれるはずだ。2年になってラグビーにも集中できるだろうし、もっと頑張ってみろ。それから、今年新人をいつもより沢山取れる事になって、実は寮の

部屋が足りないので、4月からお前は通い部員になってくれ。いいな!』なんと、家からの通いを命じられた。せつかく少し楽になると思った矢先だったが、寮生活からの解放は少し嬉しいニュースであった。

昭和 57 年度の高校ラグビーで、目黒高校は再び 62 回花園大会で全国大会に復帰し、国学院久我山と目黒で決勝を争った。その時の目黒準優勝メンバーから 5 人のホープが法政大学に入部してきた。プロップの橋本、フランカーの松本、スタンドオフの大草（東京三洋 OB）、センターの高橋、ウイングの伊藤の 5 人である。5 人とも八幡山グラウンドでの付き合いから、良く知った仲だった。自分の高校の後輩では無かったが、同じ土を毎週踏んでいた仲間として、私にとっては特別な 5 人だったし、特に大草は同じボックスで、私を慕って来たので、仲良くしていた。大草達目黒の準優勝メンバーの肩書は伊達じゃなく、その中でもスター選手だった大草はみるみる頭角を現し、1 年生ながらジュニア戦に出場する 2 本目レベルにすぐ昇格した。我々同期の中でも、ボックスではスタンドオフの村田、センターの黒谷（報徳学園）が 2 本目に昇格し、FWでは実力のあるプロップの西条・林田が 1 本目に昇格し、ジュニア戦への出場を果たす者も出てきた。そんな中、まだ 3 本目の私は、明らかに遅れを取った一人だったと言えるだろう。通いとなるという事は、一回一回の練習の中でいかに集中して自分をアピールできるかが、非常に重要になる。練習時間も寮生よりは限られるからである。それが 2 年生として上を狙っていく為には不可欠であった。我々が 2 年生になった年は、法政大学ラグビー部にとって、特別な年でもあった。創部 60 周年記念を 1983 年に迎えたのである。その記念行事として夏の菅平合宿の代わりに、ニュージーランド・オーストラリア遠征を行う事が春に発表された。そしてそのメンバーも同時に発表されたのだが、メンバーは 1 本目 2 本目に入っている部員に限られ、私はそのメンバーから漏れていた。

【緊急事態】

春シーズンも終盤に差し掛かった 7 月上旬。1 部に昇格したばかりの関東学院と練習試合が組まれた。春口監督率いる関東学院も、その頃はまだまだ発展途上。法政にとっては恐れる存在ではまだなかった。法政のセンターは、3 年生の早坂先輩（保善高校）時崎先輩（村野工業）桜井先輩（美幌高校）の 3 人でレギュラーポジションが争われていた。この試合には桜井先輩が、早坂先輩と一緒に起用された。梅雨時の足元はぬかるんだ状態の悪条件の試合で、パス回しより、ランで前進するプレーが有効なコンディションだった。ステップの得意な早坂さんと、縦の攻撃が得意な桜井さんのコンビは機能していた。後半、法政大学の攻撃でラインブレイクを試みた桜井さんが、タッチライン寄りの狭いスペースを突進したところ、関東学院フランカーの低いタックルにあった。倒された桜井さんは、フォワードにボールを渡したが、グラウンドに尻餅をついた状態で足首を抑えて立ち上がれない。プレーが中断した所で救護班が急行するが、どうやら自分では立ち上がれないよう

だ。1年生の肩を借りフィールドから退場した。試合は時崎さんが投入され継続し、リードを保ったまま勝つことができた。

桜井さんは、足首の骨折であった。気の毒なことに1か月後の遠征合宿には行けなくなってしまったのだ。翌々日の練習前に石井監督に呼び出された私は監督室に行った。

石井監督『本木。桜井が遠征に行けなくなったので、その欠員に前島コーチとも話をしてお前を連れて行くことにした。都合が良いことにお前は東京に住民票があるので、誰よりも早くパスポートが取れる。明日すぐにパスポートを取りに行ってくれ。』

『はい。わかりました。』桜井さんには申し訳ないが、お蔭で2本目のセンターに昇格し、ニュージーランド・オーストラリアの3週間の遠征合宿に行ける事になったのだ。これは天から舞い降りたチャンスに違いない。このチャンスを活かさなければと心に誓った。

【初めての渡航】

昭和58年(1983年)8月4日。まだ真新しい成田空港発のカンタス航空 QF22 便シドニー行きに、総勢38名の法政大学ラグビー部の選手団が乗り込んだ。団長はのちの法学部長の金子征史教授、監督は石井徳昌監督。選手団には、目黒高校からのホープ、1年生スタンドオフの大草、センターの高橋、フランカーの松本のルーキー三人も選出されていた。2年生からは、プロップの林田と西条、ロックの宮古高校の森、フランカーの鈴木と坂井。バックからはウイングの広陵高校の木村、スタンドオフ村田、センターの報徳学園黒谷、マネージャー兼フルバックで甲府西の小林などが選出されていた。私も晴れてメンバーの仲間入りを果たした。石井監督が言っていたように、パスポートが一番早く取れるという事も、選出の大きな理由だったようだが、このチャンスを活かさない手は無い。堂々とメンバーの一員として遠征に参加する事にした。

シドニー空港行きの飛行機は、日本時間の夜20時30分に成田を出発し、翌日の朝5日8時40分にシドニー空港に到着する。飛行機に乗るのはこれが初めてで、さすがに離陸の時は緊張した。変な手汗を少しだけかいた。ボーイング747の巨大なボディが、空を飛ぶこと自体不思議に思えたが、飛行自体は順調で、大きな揺れも無く、約11時間のフライトは快適なものだった。初めての機内食もすべて完食し、チームメイトと共に、これから起きるであろう、素晴らしい体験に胸を膨らませながらのフライトだった。

シドニーが私にとって初めて降り立つ異国であったが、滞在時間はわずか2時間弱。そのまま別の飛行機に乗り換え最初の目的地である、ニュージーランドのオークランドへ向かう。空港のターミナルからバスに乗り、これから乗り込むカンタス航空のQF51便の前に行った。乗り換える飛行機はB747と比べると小型の飛行機であり、しかもプロペラ機だった。一抹の不安が的中。オークランドへの飛行は、乱気流により、乱高下する不安定な飛行となり、少々飛行機酔いする者も出るほどで、エアポケットに入った時などは、『ああ、

落ちる・・・』とってしまうほど落下し、今度は肘掛にしっかりしがみ付き、まるでレールの無いジェットコースターに乗っているような感覚で、脂汗をかいたものだった。今でこそ、仕事で地球を何十周も回るほど飛行機に乗る機会が多いのであるが、この時は全てが初めての体験であり、その興奮はなかなか覚めなかった。

【初の南半球のラグビー王国 ニュージーランド】

我々のツアーは、オークランドを皮切りに、モーリンズビル、トコロア、ロトルア、パパロアとニュージーランド北島の都市をバスで3日おきに移動しながら、各地でクラブチームと試合を行う。最初の宿泊地はオークランドのホテル。翌6日にモーリンズビルに移動し、初のホームステイとなった。ホストファミリーはローリーさん。最初のホームステイ先に同行したのは、同じセンターの早坂先輩（神戸製鋼V7メンバー）だった。

ローリーさんは、元ラグビー選手で、しかもオールブラックスのキャップホルダーだった。右ハンドルの白いジャガーで、約束の時間に少し遅れて我々を迎えに来てくれた。その胸板の厚さはさすがと思えるほど分厚く、二の腕の筋肉の太さは半端じゃなかった。

ローリー家はモーリンズビルの郊外にある、牧場経営の家だった。広大な敷地の牧場が家に隣接しており、羊・牛などが沢山いる。庭にはジャグジーもあり、外国ならではの暮らしは、我々にとっては全く新鮮な体験で、大きな家にも驚きを隠せなかった。ファミリーは14歳と12歳になるメイガンとステイシィの可愛い姉妹と3才の弟の3人兄弟。子供達も我々にすぐに慣れてくれて、夜には地下室にある卓球台で遊んだりして、英語でコミュニケーションを取ってすぐに仲良くなることが出来た。

【NZ最初の対戦相手】

8月7日 最初の法政大学の対戦相手は、モーリンズビルRFC。地元のラグビークラブである。NZは日本のラグビー環境とは全く違い、実業団ラグビー部と言う存在は無い。市町村が運営するクラブチームでラグビーをするのが、社会人のラグビースタイルである。つまり、NZ代表のオールブラックスに選抜される選手も、全てどこかのクラブチーム所属の選手である。

各クラブは天然芝のラグビーフィールドと、大小はあるが、クラブハウスを持っているのがごく普通のスタイルである。クラブハウスには、各クラブの戦績を示すトロフィーや、対戦した相手のジャージなどを額に入れて飾ったり、各年代のメンバーの集合写真などが綺麗に飾られている。また、その場所ですぐにアフターファンクションが行えるように、ビールサーバーが設置してあるところもある。

本場のクラブとの初戦。真夏の日本から、真冬のシーズン真っ只中のNZに移動しての試合は我々にとって厳しい戦いとなった。NZでは、日本のように大学進学率は高くないので、高校を卒業して働きながら、クラブでラグビーを続ける選手も多い為、チームの年齢層は、大学チームより幅広い。モーリンズビルはそれほど強豪チームでは無いはずだが、さすがは本場のチーム。中には才能ある選手も見受けられる。非常にクロスゲームとなったが、初戦の結果は17-14の3点差で落とした。これがこれから3週間に及ぶ長いロードの苦戦の始まりだった。

【8月8日曜日】

初戦を終え、この日はチームとしての練習を行い、後はホストファミリーとの時間になるが、南半球ではこの頃は夏休みではなく、子供たちは学校に行っていた。次女のステイシィの誕生日が明日の8月9日で、我々はその日に次の遠征先に移動する日となるので、早坂さんと二人で考えて、ステイシィになにかプレゼントを用意したいとお母さんに申し出たところ、本人が学校に行っている間に一緒に街にでて買い物をさせてもらうことになった。モーリンズビルの町並みは、高層ビルなど一切なく、とてもシンプルだ。その中で12歳の女の子が気に入りそうな物を二人で探した。可愛いインテリアショップが目についたので、早坂さんとそこに入ってみる事にした。このツアーでの初めての買い物だ。二人が見つけたのは、ベッドサイドに置く用の可愛い傘のついたランプ。私が『これどうですかね?』と早坂さんに確認すると、『良いんじゃない!』と同意を貰えたので、それを二人で買って家に戻った。実は私の誕生日も同じ8月の10日。この日はお母さんが私とステイシィの為にハンドメイドのケーキを作ってくれて、晩御飯は小さな誕生日パーティーとなった。海外で節目の20歳の誕生日を祝ってもらえるなんて、これももちろん初体験。食事の後で、ステイシィに用意して置いたランプを、早坂さんから本人にサプライズで渡して貰った。ステイシィはとても喜んでくれ、サプライズプレゼントは大成功。食後にはファミリーと一緒に、庭のジャグジーに水着を着て一緒に入って、星空を見ながら話をして、本当に楽しいひと時を過ごさせてもらった。風呂上りの姉妹との卓球バトルも深夜まで盛り上がった。



左から私、ミセスローリー、メイガン、ミスターローリー

【出会いと別れ】

最初のホームステイ先が、本当に良いファミリーで、私と早坂さんは大満足だったが、仲良くなりすぎて、その別れはセンチメンタルなものになった。出発の日、8月9日は火曜日で学校がある日。お父さんに集合場所まで送ってもらい、チームメンバーと合流するのだが、メイガンとステイシィは両親に直訴し、学校の許可を貰って、我々の出発場所まで見送りに来てくれたのだ。チームメイトは既にバスに乗り込んでいたが、私たちは姉妹とお別れのハグ&キス。姉妹の目には涙。私と早坂さんもぐっと来るものがあったが、こらえて笑顔でお別れをした。お父さんと姉妹は、バスが見えなくなるまで、手を振って見送ってくれた。後日談ではあるが、メイガンの誕生日が、その一か月後の9月だったため、早坂さんと私で、当時世界で爆発的にヒットしていたウォークマンを日本から送ってあげた。しばらく手紙を交わしたりしていたが、今は二人ともお母さんになって、息子はラグビー選手になっているかもしれない。



左からミセスローリー、ステイシィ、私、メイガン、ミスターローリー、早坂先輩

【8月10日 第二戦】

専用バスでトコロアへ移動した翌日のゲームでも、法政は善戦するものの、またも僅差での敗戦。ラグビー王国のクラブチームのレベルの高さを思い知らされる。まあ、日本で言う社

会人中心のチームであるので、ラグビーのキャリアでは、我々とは相当の差がある。ラグビーが国技であるNZでは、幼少期から楯円球に親しんで、ラグビーを子供の時からプレーしており、20年近いラグビーキャリアの選手が殆ど。我々とは言えば、ほとんどの選手が高校からスタートしている為、最高に長くても6年から7年の間。キャリアで言えば半分にも達していない。私が感じた大きなギャップは、ボールのハンドリングの違いである。タックルされ倒されかけても、バックフリップパス等を起用に使い、ボールを味方に渡しターンオーバーを簡単に許さない。それが大きな違いだった。

【8月11日は休日？】

NZに来て1週間で二試合を行った。トコロアでのホストファミリーは、ヘザレイさん。ヘザレイさんに今日の予定を確認したところ、今日の練習は休みだと言う。ヘザレイさんが、我々を観光に連れて行ってくれると言うので、ホームステイでこの時一緒だった、同期の木村と、ナンバーエイトの能条先輩と3人で、トコロアの博物館に連れて行ってもらった。NZの歴史が良くわかる博物館を楽しんだ後、家に帰ると、電話が入った。石井監督からであった。電話を切ったヘザレイさんが、『I am sorry... There was misunderstanding. You had practice today....』と。なんと我々が博物館に行っている間に他のメンバーは練習場にすでに集合していたのだ。石井監督から選手を早く連れてきてくれ！と言う電話だった。我々は大急ぎでスタイルし、ヘザレイさんの車で練習場へ急行した。グラウンドにつくと、柔軟体操が既におわり、ウォームアップがスタートしていた。ものすごく気まずい雰囲気の中で、グラウンドに入っていくと、『お前ら博物館に行っている場合じゃないぞ！罰として腕立て・腹筋・背筋を100回ずつ！』と石井監督に命じられた。するとグラウンドの他のメンバーは爆笑。その場の雰囲気がそれほど緊迫したものでなくて安心した。今回の失敗は我々に責任は無いはず。と思いながらも、不安だったが、3年生の能条さんも一緒だった事が幸いした。これが木村と二人だけだったらと考えると背筋が凍る。

【8月12日】

トコロアのスケジュールも全て終了し、再び専用バスで一路オークランドへ向かった。その日は正真正銘の完全オフの移動日となった。オークランドにつくと市内のレストランで昼食。今までのホームステイでの食事が連日ラムステーキとジャガイモがメインの食事の連続だったので、違う物が食べられて良かった。NZで肉と言えばラム肉が一番庶民的な肉らしい。当時のNZの人口は320万人と言われていたが、羊の数はと言うと、1億2800万頭。羊毛を取るだけでなく、食用に最もポピュラーであるのも頷ける数である。

12日はオークランド市内のホテルバーリーコートに泊まり、翌13日はマオリ・オールブラックスVSトンガの試合を見学した。マオリ・オールブラックスとは、先住民マオリ族のラ

ラグビープレイヤーのみで構成された代表チームで、本当のオールブラックスを脅かす事もあると言われる、NZ代表の別枠のカテゴリーになる。我々にとって、本場のプレーを生で見える機会などそうある物では無いので、とても良い勉強になった。一步でも半歩でも前に出て、味方にボールを繋ぐ、ひた向きのプレーが印象に残る試合だった。後はハンドリングの素晴らしさ。これは小さいころからやはりラグビーボールに親しんで来た、キャリアの違いだと痛感させられた。とにかくはじめて見たマオリ族によるハカ（戦いの前の踊りの儀式）と迫力のプレーに我々は大興奮。試合は大差でマオリ・オールブラックスが勝利した。

【8月14日 第3戦】

オークランドに戻った我々の次なる対戦相手は、名門ポンソンビーRFCだった。ポンソンビーの歴代代表選手には、オールブラックスの名フルバック、ブライアン・ウィリアムス（1970-1978 NZ代表）選手がいる。恥ずかしながら、海外ラグビー事情通では無かったので、ウィリアムス選手の事は現地に行ってから知ったのだが、このチームはNZで最もオールブラックスメンバーを排出しているチームであり、常時複数の代表選手が存在していた。大学生相手に現役代表選手は出ては来ないが、このブライアン・ウィリアムス選手が我々の為に試合に参加してくれ、試合を盛り上げてくれた。本当にありがたい話である。ポンソンビーのジャージは黒と紺色の段柄で、胸には王冠をしたライオンをかたどったエンブレムがある。当時石井監督は14番のポンソンビージャージを良く愛用されていたが、伝統を感じる憧れのジャージであった。

ポンソンビー側の試合メンバーは、若手選手を中心にした選手であるが、経験豊富な選手がそろっている。ラグビースキルもそれなりに高い選手ばかりである。試合自体は我々法政大学がかなり善戦しワントライ・ワンゴール差まで迫ったが敗北。NZのクラブチーム対戦成績を3戦3敗とした。どの試合も点差が一桁しか無く、あと一步の所まで迫っている試合ばかりで、非常にもったいない結果が続いた。何とか成果を出して日本に帰らなければという思いが、団長・監督も含め我々メンバーにも重くのし掛かった。

【8月17日 第4戦】

第4戦。いよいよ尻に火が付いた状態で迎えた第14日目の対戦相手は、同じ大学生のオークランド大学である。1983年までの歴史上9名のオールブラックスメンバーを輩出した事のある、ラグビーの名門大学である。同じ大学生と言う事もあり、相手もちろん1本目の選手を出して勝ちに来ている。日本から来ている大学に彼らも負けられないプライドがある訳だ。我々も必死で勝ちに行くが、どうしても体格で劣る法政は、FW戦で不利になる。法政も早坂さん、時崎さんの両センターでかき回し、意地のトライで反撃するも、やはり最終的に1点差届かず敗戦。いい試合ではあったが、勝つことは出来なかった。最後のオークランド滞在のホームステイは、ワットさんと言う貿易会社勤務のお宅にお世話

になっていた。今回のパートナーは、あのスクールウォーズのモデルとなった伏見工業初優勝のメンバーで、平尾誠二氏（同志社・神戸製鋼V 7メンバー・日本代表・日本代表監督）の同期である、有澤先輩（ウイング 3年）だった。有澤さんは、あの花園大会の大工大高との決勝戦、今までレギュラーで出ていたのに、骨折の為決勝だけ出場しなかった。その代わりに出場した選手が、あのロスタイムの決勝トライを決めたという、悲運の持ち主である。ワットさんのお宅は、当時まだ小さい男の子一人と言う家庭環境であったが、オークランド市の海に近い所に家があり、景色が最高のロケーションだった。ワットさんは、ポンソンビーの後援会に入っているとので、ポンソンビーの試合にも応援に駆け付けてくれたりして、とても親切にしてくれた。オークランドは、比較的都会ではあるが、少し郊外に出ると、少しアップダウンのある街であり、その中に『One tree hill』と言う1本の大木が岡のてっぺんに立っている特徴的な岡があった。そこに小さい坊やと一緒に連れて行ってくれた。夕暮れに映える1本の大木は、とても印象に残っているが、地域には太古の火山の跡が多数残っており、岡に上るとオークランド港や、火山の火口などを見渡すことが出来る、標高182mの市民の憩いの場である。残念な事に木は最近撤去されたと聞いた。木の代わりに現在はモニュメントが岡の頂上に立てられているようである。

【NZ 第5戦】

泣いても笑ってもNZでの試合は残り1試合。相手は中堅チームのパパクラ・クラブである。こう言う中堅クラブの場合、海外の大学が試合に来たとなれば、ベストメンバーで揃えてくるのが常である。予想通り、1本目のメンバーを如何にも揃えて来ましたと言う気合の入り方だ。我々法政大学のボックスのメンバーを紹介すると。1本目のHB陣、スクラムハーフ9番齋藤次男（目黒高校OB 高校日本一メンバー）司令塔10番石井力（NEC）センター12番早坂正治・13番時崎正浩、ウイング11番亀山賢一・14番井上徳重、そしてフルバックは15番井上晋一と言う上級生中心のメンバーであった。FW陣プロップ1番西条裕朗（2年）3番池田智則 フッカー2番川口勝弘、ロックキャプテン5番藤本昌伸（本田技研鈴鹿）、4番鈴木昌春、フランカー6番駒井孝行（ヤクルト・法政大学監督）7番本郷秀実そしてナンバーエイト8番秋山敦と言うフィフティーンであった。唯一同期の西条だけが2年生で一本目に食い込んでいた。必勝態勢で臨んだパパロARFC戦であったが、大接戦の末、1トライの4点差で敗れ、NZツアーの戦績は、5戦0勝5敗とラグビー王国の洗礼をたっぷり受けた大変厳しい結果に終わってしまった。

【空路シドニーへ】

ワットさんファミリーとお別れし、8月19日オークランド空港を飛び立ち、一路シドニーへ。夕方16時30分発の飛行機は、飛行時間1時間20分でシドニー空港に到着する。その日は移動のみで、宿泊先のホテルへ直行し、その日の夕食は、日本クラブにご招待さ

れ、オージービーフの一人前 500 g のジャンボステーキをご馳走になった。500 g のステーキと言うと、ちょうど 30 cm 級のビーチサンダル程の大きさで厚さも 2 cm 程度はあったと記憶しているが、果敢にもステーキおかわりに挑んだ者が居た。プロップ同期の林田だ。FWでしかもプロップなので、力も使うスクラムでの消耗も激しいので、分からなくもないが、我々ボックスには 1 枚で充分の量であった。林田は大汗をかきながら、ペロッと 2 枚目も平らげた。

このクラブにはスロットマシンが設置してあって、食後には成人している者に限り、チャレンジしても良いと言う石井監督のお達しだったので、9 日前に成人していた私も、20 ドルだけやってみようと、同期の者たちとカジノフロアに乗り込んだ。25 セントのマシンを選んで、オーストラリアドルを投入し、いざレバーオン。全くの初体験だったので、良く分からないままにレバーを倒していた所、10 回転ほど回した時に、ジャックポットに入って、25 セント硬貨がジャラジャラと受け皿に出続けた。全くのビギナーズラックであったが、大量の 25 セント硬貨はもちろん財布には入らないので、仕方なくシューズケースに入れて持ちかえる事に。ホテルでお札に変えてもらい大量の小銭の処分方法については事なきを得た。

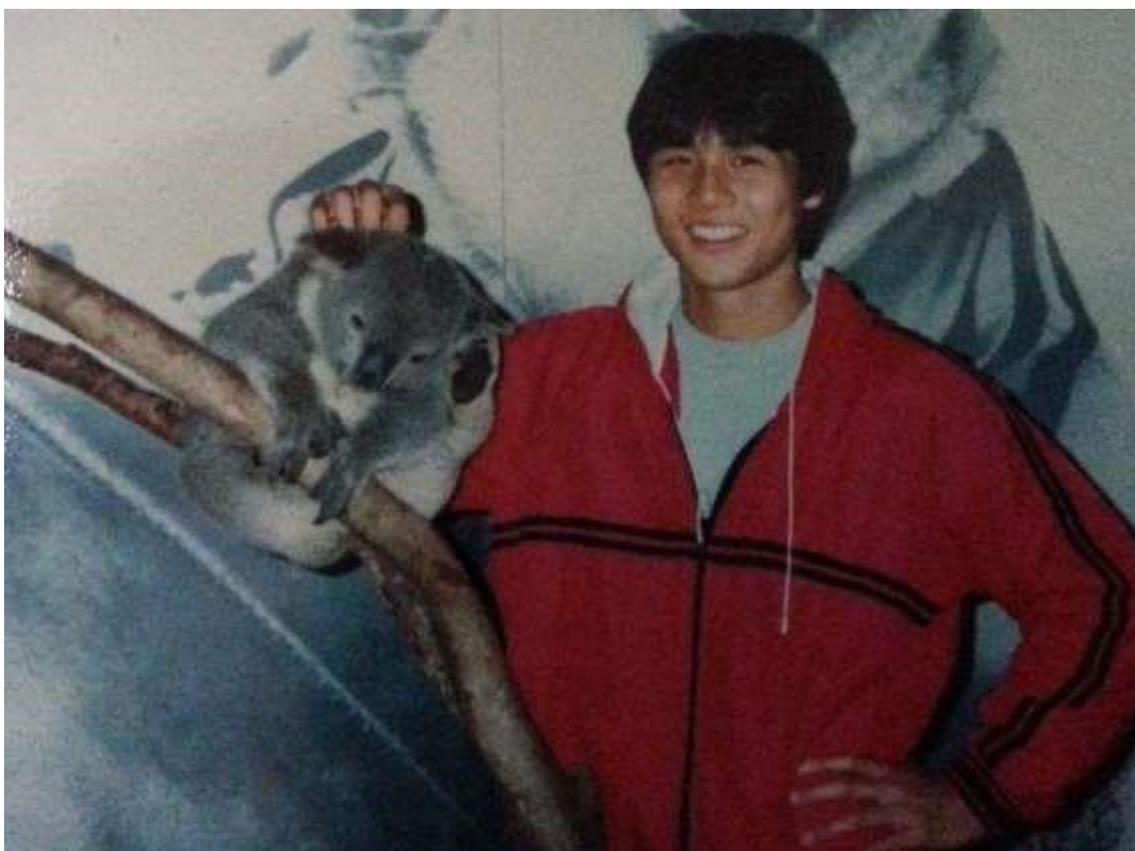
【8月20日テストマッチ】

一夜明け、シドニー二日目の土曜日は試合観戦。しかもその試合は All Blacks vs Wallabies. ニュージーランド代表とオーストラリア代表のテストマッチをシドニー・クリケット・グラウンドで観戦した。1983 年には、まだラグビーのワールドカップは始まっていなかったもので、この組み合わせの試合を生で見るとは、現地に行くしか方法は無かった。それを考えると希少な経験をさせてもらえたと有難く思う。第 75 回目のこの対戦の結果は、18 : 8 でニュージーランド代表、All Blacks が勝利した。

シドニーに入って、ホテルの滞在に変わり、試合観戦の翌日の練習はオペラハウスそばの芝生の公園で行い、残りの 2 戦の試合の準備をした。真冬であったが、晴れた日の練習は浜からの潮風もあいまって、壮大な景色を見ながら気持ちよく走ることが出来た。残りの 2 試合は、我々法政大学ラグビー部のこの 3 週間のツアーの集大成。相手も同じ大学生であることから、大きな試金石となる 2 試合となるわけだ。シドニー滞在 4 日目の 8 月 22 日月曜日。ニューサウスウェールズ州立大学との対戦は、気温の下がるナイトゲーム。照明をつけながらのゲームは、厳しい試合となった。こちらに来てから 3 週間目とは言え、真夏の東京から来ている我々にとって、この気温のギャップはかなり影響があった。大学との対戦時は 1 本目 2 本目共に試合をさせてもらったが、両試合共に僅差ながら敗戦。今回のツアーで 6 戦目も敗戦で 6 戦 0 勝 6 敗と後が無くなった。

【気分転換】

ここまで負けが込むと、指導者としてはいろいろ考える所もあったと思う。日本を離れて19日間で5試合を戦った。慣れない海外での生活、食事の違い、ホームステイでの精神的負担等も考え、石井監督が下した判断は、8月23日予定していたグラウンドでの練習を中止し、ニューサウスウェールズ郊外のブルーマウンテン登山に切り替えられた。ブルーマウンテンでは、観光地である『Three Sisters』と言う岩があり、そこを見学した後、コアラの見られる国立自然公園に行き、初のコアラとご対面。物凄く可愛いのだが、ユーカリの草を主食とするコアラの糞が臭すぎてびっくり。自然公園では、コアラを抱かせてくれるのだが、コアラを抱いての記念撮影は思っていたものとは違い、匂いを我慢する忍耐力が必要だった。ただ、石井監督の判断は間違っていなかった。体も楽になったし、何より選手たちに笑顔が戻った。



【最後の試合準備でサプライズ】

8月24日（Day21）シドニー・オペラハウス前での練習で石井監督から明日のシドニー大学戦のメンバー発表が行われ、私にとってのサプライズがあった。それは、2本目の試合で私のポジションが12番から11番のウイングにコンバートされたのだ。私のラグビーキャリアはたった3年少しではあったが、この日まで経験あるポジションは12番の左センターのみ。ウイングと言うポジションは一度もプレーした経験が無かった。そして、同期

のスタンドオフ村田もフルバックにコンバート。その村田と入れ替える形で、1年生ホープの大草がフルバックからスタンドオフにポジションチェンジが行われた。

シドニー大学戦前の最後の練習で。本郷高校の練習試合用のジャージが懐かしい



【伝統の国立シドニー大学】

オーストラリアで一番優秀な大学とされるシドニー大学。ラグビーの試合を初めて行ったのは 1863 年。私が生まれた時には既にそれから 100 年経っていたので、我々が訪れたこの年 1983 年には既に 120 年経っていた事になる。法政大学ラグビー部の倍の歴史である。2018 年現在では創立 155 年の歴史があるという事になる。これはイギリス以外の国では最も古いラグビーの歴史である。

シドニー大学の重厚な石造りの校舎の前に、美しい芝生のフィールドが横たわる。シドニー大学のホームジャージの色はなんと法政大学と同じ、ゴールドと青のボーダーカラーだった。当時法政は紺のパンツであったが、パンツも同じ色だったため、シドニー大学側で、パンツもジャージと同じカラーのボーダーパンツにして、我々を出迎えてくれた。パンツまでボーダーにすると、囚人服みたいになって滑稽だったが、お互いにファーストジャージで戦う為の工夫と言う事で、有難く歓迎の証と受け止めた。

第 1 試合は 2 本目の我々のチームからとなった。初のウイングへのコンバートであるが、このツアー最後の試合になるので、第 1 試合となる 2 本目の試合で弾みをつけたいと思った。とにかく思い切って自分のプレーをする事を心がけるようにした。ここまで 2 本目の試合がセットされた試合数は少なかったので、大した活躍も出来ていなかったのも、せっかく参加できたこのツアーの集大成のゲームで、石井監督の期待に答えたかった。

シドニー大学の芝生は素晴らしく、走りやすかった。冬シーズンなのだが、秩父宮の芝のように枯れた色にはなっておらず、緑鮮やかな芝生である。スタンドオフに入ったホープ大草のプレーに冴えがあった。シドニー大学のバックスは、体のサイズは法政より一回りは大きかった。ディフェンスのプレッシャーも早く、圧力を掛けてくる。大草はセンタープレーヤーのつっかけに目をつけていた。そのままセンターに回せばセンターの所でタックルに合ってしまう、潰される。シドニー大学ゴール前のチャンスで大草は左ラインにポジショニング。黒谷にプレッシャーをかけてくるシドニー大センターの動きを見て、自分も対面に対しつっかけて、相手ラインの裏を取った。鋭いスクリーンパスで大草から相手センターの背中越しに直接のパスを受け取った私は、半ズレの対面をステップで振り切ってインゴールへ飛び込み、自身この遠征初のトライを決めた。大草とのホットラインは、その後にもう 1 本の決定的なトライを生み、この遠征初の勝利をシドニー大学との最初のゲームで納める事が出来た。チームの雰囲気もこれで一気に良くなって、1 本目にも気合が入って来た。

第 2 試合。1 本目の試合でも、FWが善戦し、バック스에素早くボールを供給。早坂さん時崎さんのセンターコンビのプレーが冴え、早坂さんのトライ、FWのスクラムサイドのトライなどで、優勢に試合を進め、僅差ではあったものの見事に勝利。日本の単独大学として、シドニー大学からの史上初の勝利を勝ち取った。2 本目に続き 1 本目も気持ち良く勝利して、このツアーの有終の美を飾ることが出来た事は我々にとって大きな収穫である。試合終了後のクラブハウスでのアフターファンクションは、大いに盛り上がり、オーストラリアのビールで皆気持ち良く、勝利の美酒に酔った。



ルーキーの大草とシドニー大学にて、勝利の後の最高の笑顔

【大事件】

シドニー大学でお互いにエールの交換を行い。アフターファンクションも無事終了し、上機嫌の石井監督、金子団長は大いにビールを楽しみ、程よく酔いが回った頃、お開きとなった。大学側にタクシーを10台呼んでもらい、我々はそれに分乗して宿舎のホテルに戻る。私は1年生3人と一緒に、試合で使ったジャージ2セットが入ったバッグを荷台に乗せ、最後のタクシーに乗り込んだ。英語が辛うじて話せるのが私だけだったので、私は前に乗って運転手に行き先を告げ、タクシーは走り出す。シドニー大学からホテルまでは15分くらいの距離で、程なくホテルのフロント前に到着、私は運転手に料金を聞き支払いを済ませ、車を降りた。3人の1年生大草、高橋、松本の目黒高校トリオは既に降りて、3人で話をしながら私の支払いが済むのを待っていた。

『Thank you!』と言って助手席のドアをバタンと閉めると、タクシーは勢いよくその場を去って行った。振り返り大草達の方を見たときに、私は異変に気が付く。

私『おい！お前たち、ジャージ袋は？』

大草『やべっ！！』後ろの荷台から、ファーストジャージとセカンドジャージの公式戦ジャージ2セット42枚を降ろし忘れていたのである。既に走り始めて50m以上先に行ってしまったタクシーを、全員全力で追いかけるが、追いつくはずもなく、我々の100m前方で右

折して、そのタクシーは視界から消えてしまった。シドニー大学戦勝利の美酒の酔いも、一気に覚め、4人で頭を抱えてしまった。公式戦ジャージは神聖な物であり、それを2セットも無くしたとなるとただでは済まない事は明白。この場のメンバーでは上級生になる私は、つまりは責任者であり、即座に石井監督の部屋に行って顛末の報告を行う必要があった。これこそ『青天の霹靂』最悪の事態である。

監督室のドアをノックした。

石井監督『Yes?』

私『本木です。ちょっと宜しいですか?』石井監督がドアを開けた。

石井監督『おお、どうした?』

私『実は1年と最後のタクシーで戻ってきたのですが、タクシーのトランクにジャージ42枚置き忘れてしまいまして、直ぐに追いかけたのですがそのタクシーを見失ってしまいました。』見る見るうちに石井監督の表情が、鬼の形相に変わっていくのが見て取れた。

『なに?明日日本に帰るのだぞ?明日の出発までに見つけ出せなかったら、お前ら日本に帰れないな。見つけ出せるまで滞在を延長して探してもらおうぞ!今すぐ探して来い!』

【時間との戦い】

シドニー大学戦がツアー最終戦であったので、翌日の夜の便で帰国する事になっていた。フライトの時間はシドニー空港発22時00分のカンタス航空QF21便であった。この飛行機に乗る為には、遅くとも18時頃までにはホテルを出発し、空港に向かわなければならない。現時点でのタイムリミットは24時間である。24時間以内にあの運転手を見つけ出し、ホテルまで届けてもらう必要があるわけだ。まずタクシー会社がいくつかあるのだが、どんなタクシーだったか、手掛かりになりそうな事を整理する事にした。ロビーでポテトチップスをつまみながら、1年生3人との作戦会議が始まった。

私『タクシーの特徴とか、ナンバーとか覚えてないか?』

大草『まあ、黄色主体の車体だったよね。』

松本『そりゃ、どのタクシーも黄色主体だろ...』

高橋『.....』高橋はこの三人の中では寡黙な方で、あまり発言などはしないタイプである。

私『マネージャーから預かったタクシー代で支払ったから、領収書も無いし、会社を特定できる手がかりが無い以上、残る方法は聞き込みしかないな。』『キングス・クロス周辺で客待ちのタクシーに、片端から声を掛けて、今日の午後4時頃シドニー大学からキングス・クロスまで学生を乗せたタクシードライバーを探している。と聞いて回ろう。』と全員に指示した。英文はメモに書かせて、それを読んで聞かせる作戦だ。10台も呼んだのだから、そのうちのどれかに当たれば、手掛かりにぐっと近づくはずである。何度聞き込みを

しても、いたずらに時計の針はどんどん進み、手掛かりらしき情報は得られない。既に夜もかなり深い時間に差し掛かっていた。シドニーのキングス・クロスと言えば、夜の繁華街で一番栄えていた通りである。客待ちのタクシーはいたるところに停車していたので、声を掛ける回数はどんどん増えて行った。

3時間ほど聞き込みを継続していた時、我々はある事に気がついた。タクシー会社の種類が、ほぼ4社位に限られている事である。

大草が言った『俺、このドアの所にグリーンステッカーが貼ってあるタクシーに見覚えがある気がするんだよね。』

松本『たしかにそうだな。』時計の針はそろそろ夜中の12時に差し掛かろうとしていた。次の作戦に移る事にした。その大草が見覚えのあると言ったタクシーに狙いを絞って、全車両に無線で聞いてもらう事にしたのだ。

私『すみません。我々は日本から来たラグビーチームなのですが、今日シドニー大学で試合をして、4時頃大学からキングス・クロスまで乗せてくれた運転手さんを探しているのですが、無線で我々を乗せた運転手を探してもらう事は可能ですか?』と英語で尋ねた所、運転手『Sure! I will check with our dispatcher. Please wait for a while.』(もちろん!配車係にチェックするから、ちょっと待って。)と無線を使って連絡してくれると言う。希望が湧いてきた。待つ事数分。この車の無線に配車係から連絡が入った。大学から最後の4人を乗せた運転手が見つかったとの連絡。今日のシフトが未明の午前3時に終わるので、それが終わったら、ホテルに届けてくれるという段取りになった。石井監督に即座に搜索結果を報告し、ようやく帰り支度に入る事が出来、全員胸を撫でおろした。

【一路東京へ】

3週間と3日に渡る、長くエキサイティングだったロードが終了する。飛行機の中で最後の一日の疲れがどっと出て、熟睡していたら直ぐに日本についてしまった。初の渡航、初のホームステイ、初の海外試合勝利そしてジャージ紛失。初物ばかりの体験だったが、私にとっては実りの多い遠征だったと思う。その日のサンケイスポーツのラグビー欄に、法政大学ラグビー部・シドニー大学に日本の単独大学として初勝利!の小さい記事の見出しがあった。これから迎えるシーズンに視界良好の法政大学ラグビー部であった。

【1983年シーズンイン】

帰国した後の練習で、菅平で合宿してきた他の部員たちと初めて合流したが、冬の南半球で過ごしてきた遠征組と、菅平組では、顔色が全然違っていた。夏合宿をこなしてきたメンバーは、何となく強そうに見える。怪我の桜井さんもギブスが取れ練習には復帰していた。

9月にリーグ戦が始まる訳だが、帰国後の練習でも私のポジションはウイングのまま、練習では、通常は2本目のウイングに入り、時折石井監督の指示で、1本目の14番に入った。

【関東大学リーグ戦開幕試合 VS 関東学院大学】

9月いよいよ1983年度のシーズンインの開幕戦である、関東学院戦の前日となった。当時の法政大学は、試合前日練習の日にメンバーの発表を寮の食堂で行うのが通例であった。テーブルの上にずらっと並べられた、シドニーで紛失し掛けたファーストジャージ。石井監督によって塩で清められ、1番からメンバーが発表される。

『1番西条！頼んだぞ。』開幕戦同期の西条がデビューを飾る事になった。『2番川口FWを纏めてくれ。』と言うように一人一人に石井監督から声を掛けながらジャージが手渡されていく。センターは遠征組の早坂さん・時崎さんの3年生コンビで決まり、ウイングは4年生の亀山先輩、井上徳重先輩。フルバックは井上晋一先輩で決まった。16番以降はリザーブの選手。大体フォワードとバックスで3名ずつが選出される。『20番村田』同期の村田がスタンドオフ・フルバックのリザーブで選出された。そして、『21番本木』最後の21番で、私の名前が石井監督から呼ばれた。CTB/WTBのリザーブとして選出されたのである。7月には3本目に居た私がリザーブに選ばれた事は、たった2カ月間の期間から考えると、大抜擢に相当する。食堂にいる先輩たちの間から『おう〜！』と言うどよめきが漏れた。怪我で遠征に行けなかった桜井先輩から『本木、出るチャンスがあったら頑張れよ！』と声を掛けて頂き、『はい、頑張ります！』と元気よく答えた。初のファーストジャージに袖を通す日が、自分が思っていたよりも早く訪れた。

関東学院大学、言わずと知れたラグビーの強豪チームであるが、30年以上も遡ると、まだまだ今の強豪のイメージには至っておらず、発展途上のチームだったと言える。春口監督の指導によって、2部から1部への昇格を果たした。その中には光る存在の選手も居た。それがのちのリコーを代表するフルバックとなった桜井勝則氏だ。桜井さんは、まだ2部に居る関東学院の頃に、法政の石井監督に高く評価され、リーグ戦選抜やオール関東、日本選抜まで上り詰めた名選手である。身長187cmの長身でストライドが長く、ゆっくりに見えて一度抜かれるとなかなか追いつけない、厄介な選手だった。

リーグ戦では、前年の成績によって、その年に当たる順番が変わってくる仕組みになっており、シーズンの前半は、昨年上位のチーム対、下位のチームと言う構図になっている。上位のチームとは対抗戦との交流試合に進んだ4位までのチームを指す。法政は3位だったので、それに相当する。つまり、リーグ戦の序盤で星を落とす事は、法政には絶対にあってはならないのである。

初のベンチ入りした私は、リザーブと言う立場で試合を見ること自体、自分のラグビーキャリアで初の体験だった。それだけに緊張の度合いも高めで、戦況を見つめながら体も固くなる。時折ストレッチなどを意識して入れて、体がこわばるのを防いでいた。試合は法政が有利に試合を進め、ダブルスコア以上で勝利。大きな怪我人も出ず。この日の出番は無かった。

【80年代当時のラグビーのレギュレーション（規則）】

出番が無かった事について、現在のラグビーしか知らない方に説明しよう。30年以上前のレギュレーションでは、スターティングメンバーの選手交代は、怪我による交代以外は認められなかった。今は監督の戦略的な采配がより活かせるように、戦略的選手交代が可能になっている。より試合を面白くするための工夫である。

ラグビーのレギュレーションは、結構変わる事が多い。我々の学生時代と現在とでの大きな違いを参考までに示すと、まず一番大きな違いは、以前に書いた得点である。当時トライは4点、トライ後のコンバートが2点、ペナルティゴールが3点であったが、現在はトライが5点になっている。これはラグビーの醍醐味であるトライの減少が問題視された時期があり、ペナルティキック合戦のような試合が増えてしまって、危機感を感じたラグビーユニオンが、トライの点数を重くして、よりトライを狙うように改善したのである。それに伴い、タッチキックのルールも改良された。通常タッチキックをけり出すと、相手ボールのラインアウト（サイドラインの外側から、二列に並んだ敵味方の間にボールを投げ入れ、リスタートするプレー）になって居たのであるが、ペナルティキックが与えられた場合、自分達のチームがタッチに蹴りだしたとしても、マイボールのラインアウトでリスタート出来るようにルールが変更された。つまり、前進した上にマイボールで始められる為、よりトライが取りやすくなる訳である。このラインアウトでのレギュレーションの変更もある。以前はロックと言うポジション（チームで一番背が高いプレーヤー）の選手が、自分でジャンプして、ラインアウトのスローワーのボールをキャッチしていた。現在では、以前禁止されていたリフティング（ジャンパーを前後の選手が持ちあげてより高い位置でボールをキャッチさせるプレー）が許されるようになった。これによりマイボールの獲得の確立がさらに上がり、ペナルティを犯した側に非常に不利な状況が作られるようになり、反則プレーの抑制効果も期待されての変更を行ったのである。

【法政大学ウイングプレーヤーの鉄則】

関東学院戦以降、石井監督の中で、今シーズンの選手起用をどうしようかと言う模索が行われて居た。前述の通り、当時のレギュレーションだと、先発起用メンバーが、一試合闘い通さなければいけない時代だったので、今と違い先発メンバーの選定は、より慎重に行う必要があったのだ。関東学院戦後、石井監督の指示で、1・2本目のボックスの組み合わせ

せを何度も変えて、じっくり来る組み合わせを探しているようだった。私も練習中のアタック&ディフェンス（攻撃と守りに分かれて、実践的にプレーする練習）で、半分くらい1本目に入るようになった。1本目に入ると緊張度が増す。ボールをノックオン（ボールを前方に落としてしまう反則）する事など許されるはずが無い。ボックスの法政と言われる以上、フィニッシャーであるウイングはハンドリングミスを絶対に犯せないのが、我々の常識である。『手で触れるボールは必ずキャッチしろ！』これが法政ウイングプレーヤーの鉄則だった。練習中にノックオンなどすると、ポジション別練習時にしごかれる事になるのだ。

【関東大学リーグ戦 第2戦 VS 国士舘大学】

第二戦の前日練習の日がやってきた。練習前に食堂に集合し、ジャージ授与の儀式が行われる。『1番西条・・・』『2番川口・・・』いつもの様に石井監督からファーストジャージ式が配られる。『12番早坂・・・』『13番時崎・・・』『14番本木・・・』

私 『はい！』なんと先発メンバーとして石井監督に呼ばれたのだ。

石井監督 『本木！思い切ってやってみろ！』

私 『はい！ありがとうございます。』

国士舘大学戦は、法政が当番校だったため、やりなれた法政大学元住吉グラウンドで行われる事になっていた。ただ心配なのは空模様である。秋雨前線の影響で雨が続けているので、明日のコンディションも重馬場状態は免れない状況であった。しかし、14番のジャージを受け取った以上、どんな状況でもやるしかなかった。80分間をこの瞬間に任された事になるのだから、その責任は重いのである。



一夜明け、大雨は上がったが、グラウンドは水溜りが残った状態で試合当日を迎えた。国士舘大学には、目黒高校の1つ後輩に当たる、第62回花園準優勝のキャプテン、桜井三久（リコー・常総学院教員）が居る。石井監督に非常に近いキャラクターで強面の二ッ森監督率いる国士舘は、一種独特の雰囲気のあるチームであった。

正午キックオフの対国士舘大学のホームゲーム。水溜りが出来ぬかるんだグラウンドコンディションは、ボックス展開が得意なチームにとって、マイナス面が大きい。まず、ボール

が濡れてしまうと、皮ボールの特性として非常に滑りやすい状態になってしまうので、ノックオンなどの反則がどうしても増えてしまう。ボールの跳ね具合に、微妙な変化が起きる可能性が高く、パント攻撃を受けた場合、ボールの処理が難しく危険が一気に高まる等のリスクが増加するのである。法政大学の当時の雨の日の試合では、軍手の指の部分を持ち落とした物が選手に配られ、ボールの滑りを抑える効果を期待して着用する事があったが、手の甲の冷えを防止する効果はあっても、滑り止めの効果はさほど期待できなかった。

チャンスで右ラインにボールが供給され、第一センターの早坂さんから、絶妙な飛ばしパスが右ウイングの私の所に来た。パスが通ればビッグゲイン間違いなしのパスだったが、それがファーストタッチだった私は胸を使ってボールを取りに行ってしまう、ボールを掴みに行った両腕の間を滑り落ちるように、落球してしまった。翌日のスポーツ新聞に『デビュー戦の本木、大雨の後の悪コンディションで思わず落球』の説明入りで落球写真が掲載されてしまった。証拠写真有では言い逃れは出来ない。試合はロースコアながら法政が勝利して開幕 2 連勝を飾ったのだが、翌日の練習で、ハンドリングのシゴキの洗礼を受けた。『ゆさぶり』と言う独特の特訓で、先輩が全力で走り込んでくる私にギリギリ取れるか取れないかの所にボールを浮かせ、そのボールをキャッチする。それを 10 本繰り返し、最後に高々と上げたハイパントを追いかけてキャッチすれば終了と言うものであるが、2-3 時間の練習終了後に行われるので、そう簡単には成功しない。失敗すれば『アゲイン!』の声が掛かり、最初からやり直しである。一発で終わらせる事に集中してやらないと、乳酸が足に溜まって来て、足が思うように前に運べなくなり、延々にやらされる事になるので、気合を入れて集中した。なんとかかんとか 1 発終了でき、グラウンドに大の字に倒れ込んだ。

デビュー戦当日に戻るが、私にとって悲しい出来事が家で起きていた。私が 8 歳の時に近所の家からもらって来た、秋田犬の『くま』が危篤だったのだが、家族から余計な心配をしない様にと、その事を伝えられず、国士館戦当日に天国に行ってしまった。試合から帰宅するとくまが庭の小屋の中で横たわり冷たくなっていた。くまに試合の報告をした。『今日ちょっと失敗しちゃったけど、ようやく大学の公式戦に出られたぞ! これから厳しい試合が続くと思うけど、天国から見守ってくれな。』涙が止まらなかった。

【レギュラージャージ】

各大学にはお揃いの上下ジャージがある。石井監督時代の法政大学には、ある決まりがあり、公式戦に出場した選手には、一般のジャージとは違う明るいブルーのエンブレム入りジャージが支給される。エンブレムの下には、公式戦に出場した年の西暦が刺繍で書き込まれる。国士館戦を終えたあと、3 日後位に、前島コーチの経営する前島スポーツから、私用の

ジャージが届いた。このジャージを持つ事は、法政大学ラグビー部員としては、一つの目標であり、誇りでもある。私自身は嫌いじゃなかったが、通いの私としては、着るチャンスは殆ど無く、もっぱらタンスの肥やしとなっていた。寮生は、ほとんどの選手が、一般支給品のジャージかレギュラージャージのどちらかを、普段の生活で着ているので、すぐに見分けがつく。

前島コーチは、FWコーチであり、石井監督の教え子でもある。この年の法政大学は、フォワードとバックスのバランスが良く、2年の西条・林田（高校ジャパン）の両プロップの加入によって、スクラムの強化に期待が持たれた。特に林田は、ランニングラグビーで旋風を巻き起こした宮崎高鍋高校の出身。同志社大学に高鍋高校から進んで大学選手権 3連覇に貢献した、同じく高校ジャパンのスクラムハーフ児玉耕樹らと、花園ベスト4の実績を上げたチーム出身だけあって、スクラムだけでなく、ランの方でも大いに力を発揮できる実力を持っていた。

前島コーチが特に力を入れていたのが、スクラムの強化であり、恐らく重戦車軍団明治にも負けないくらいの練習を積み重ねていたと思う。練習で暗くなると元住吉グランドには良いナイター設備が整っていたので、夜遅くまで練習できるのであるが、日頃の練習においても、フォワード・バックスに分かれた後は、移動スクラムと言う練習で延々とスクラムを組み続ける様子を見てきた。700kg以上の肉の塊同志がぶつかり合うスクラムの迫力は、真近で見ると大迫力である。骨と骨がぶつかり合う音が凄い。

全体練習が終わった後、前島コーチによる居残りスクラム特訓をやる場合も多い。

前島コーチ『裕朗！もっと背中を伸ばせ。姿勢保て！』『城二も頭下げるな！』厳しい前島コーチの指導の音が、夜遅くまで祇園町の閑静な住宅街に響いた。移動スクラムの居残り練習は1時間以上も続き、夜の8時過ぎまで続く事もあった。

【秩父宮ラグビー場で大学初試合 VS 中央大学 ライバル対面の西選手】

法政大学の1本目デビューを果たしたあと、聖地秩父宮ラグビー場に高校決勝以来登場したのが中央大学戦である。初めて親が観戦に来た試合がこの試合で、偶々両親の前で抜けた瞬間を親がとらえた写真が残っている。新聞に載る写真は当時ほとんどが白黒だったので、貴重なカラーの試合の写真である。

写真左から法政センター時崎先輩（NEC）、中央西さん（リコー）早坂先輩（神戸製鋼）
ボールを持ってディフェンスラインを突破した筆者 右が中央のセンター同期の石原



この時は全く意識していなかったが、この中央の西浩一郎さんとは、のちにリコーと一緒にプレーする事になる。西さんは元祖ウナギステップで有名で 100mも 10 秒台後半の俊足だった。リコーでは西さんが一番早く、その次は私で、100mを一緒に走ると 1mほどいつも離される。この写真の状況は第一センターの早坂さんから直接ロングパスをもらって敵の防御ラインの裏に出て、西さんもちょうどかわした場面である。

リコー時代は、この西浩一郎と佐藤龍の二枚看板が、リコーの 1 本目のウイングの布陣だった。つまり社会人になってもずっと私にとってはライバルだった事になる。西さんは 30 歳のシーズンで引退し、自分の実家の稼業である保険代理店をやる事になり、ラグビーからアメフトへの転向を図った。アサヒビールシルバースターズに行き、有名なQB 東海選手と一緒に、少しの間プレーをした。

【優勝を賭けた専修大学戦でもう一人のライバルと激突】

この年のリーグは、上位三つ巴の様相を呈してきた。リーグ最終戦前の専修大学対法政大学の対戦結果次第で、日本大学との間のこの三校の中から優勝が絞られる。法政は日大に不覚をとり一敗で専修大学戦を迎えた。専修はここまで全勝をキープしていた。法政が勝てば日大の結果如何で逆転優勝を飾れる。

専修大学は、強い FW と決定力のあるバックスで勢いのあるチームだった。中でも注目を浴びていた選手が、私と同じ 14 番の二年生ウイング、佐藤 龍だった。彼の特徴は、足を高く上げてタックルを蹴散らせながら前進するその独特の走法と、パワーだった。同じ 14 番でトイメンでは無かったが、意識するようにはなっていた。

法政は前半の探り合いの後チャンスを迎えた。敵陣に入ったマイボールラインアウトで、キャプテンでロックの藤本主将（本田技研 OB）がきれいにキャッチして、良いボールがバックスに供給された。右オープンに展開した法政は、第一センターの早坂さんが、軽快なステップワークで相手をずらして、ラインの裏で右ウイングの私にパスを飛ばした。

がっちりを受け取った私は、スワープでマークを外し大きくゲイン、フルバックも振り切りトライ！と思った次の瞬間、低い姿勢で獲物を狙うような専修の選手が突如として、眼前に現れたのだ。佐藤龍だった。

ゴール前 5 メートルまで来ていたが、完全に内側からコースを押さえられていたため、私の選択肢としては、当たり飛ばしてそのまま飛び込むしか無かった。

渾身の力を込めて、佐藤龍にぶち当たりに行った！ドスンと鈍い音とともに二人はぶち当たったのだが、その時の感覚は、何かの壁に当たっている様な感覚だった。トップスピードで当たった私を低い姿勢で完全に受け止められ、当たり飛ばすことは出来なかったので、ポイントになり、フォローの FW にボールを渡した。法政大学の FW 陣の素早い集散で今度は良い形で左に連続攻撃を仕掛け先制のトライを決めた。

しかしなんというプレーヤーなのだろう。逆サイドからのフォローディフェンスであそこまでカバーしてくる走力と、あのパワーは、信じられないものがあった。先制出来た法政は、この試合常に有利に進めることができ、優勝が懸かった試合で勝利を物にした。

翌日の毎日新聞のスポーツ欄にこの試合で逆転優勝に前進した法政の記事が載った。見出しは、「法大逆転優勝に大きく前進！」差し込まれた写真は、佐藤龍と私がぶち当たった瞬間の写真。これがトライの写真だったら良かったのだが、またしてもあんまり格好良くない写真が採用されてしまった。その写真は毎日新聞社から額装されて私の手元に届き、今でも鮮明に残る佐藤龍の凄さの記憶と共に、大事に取ってある。

この写真が毎日新聞に掲載された佐藤龍と私の激突の瞬間



【外国人戦力強化の大東文化大学戦】

全勝の専修大学を破った法政は、最終節で勝利すれば、リーグ戦自力優勝となる。大東文化大学との一戦は、11月の終わりに秩父宮で行われた。このときのリーグ戦では唯一の外国人選手の居た大東文化大学戦に勝てば、リーグ戦の覇権は取り戻せる。

当時の外国人選手は、ウイングのノホムリ選手とエイトのホポイ選手。体の大きさや、天性のバネは日本人には無いものがあり脅威であった。後から知った事であるが、この二人は我々よりだいぶ年上で、社会人の中堅の域に達するような年齢だったという。

前半戦、大東文化の攻撃。そのノホムリ選手にボールが回り突破を許すと、ディフェンスラインの裏に出られた。逆サイドからバックアップしていた私は、コーナーフラグ目がけ全力で走り、彼のコースを塞ぎにかかった。なんとか追い付いたとき、私を見たノホムリは鋭いカットインで内側に入ろうとした。「うっ！」私の体は止まらない！そうはさせるかと、カットインしたノホムリ選手の左足を、私の右手一本で必死にタップして引っ掛けたところ、バランスを失ったノホムリ選手は前のめりになってつまずいた！そこに後続のフランカー陣が襲い掛かり、ラックとなりピンチは脱することができた。危なかった。



真っすぐ走られていたら、スピードに乗らせてしまい、インゴールに飛び込まれていただろう。やはり、バックアップは重要なウイングの役割だ。前節自ら体験した専修大学の佐藤龍のバックアップディフェンスが参考になっていた。

今度は法政の番と言わんばかりに、法政が攻撃を仕掛ける。早坂さん時崎さんの三年生センターの華麗なステップで、大東文化のディフェンスラインを崩し、中央突破だ。大東文化のゴール前に猛然と襲い掛かる法政フォワード、遂に最終ラインを割ってトライ。均衡を破って法政が先制した。

その後は、フォワード戦で優位に立った法政が、リードを保ったまま試合を進めることができ、この試合を物にした。完全優勝では無かったが、逆転での優勝はそれなりに嬉しかった。さあ次は12月に行われる交流試合。相手は、対抗戦4位帝京大学に決った。

【交流試合で初の帝京大学戦】

11月末のリーグ最終戦を終え、法政大学は茨城県にある石岡研修所に行き、交流戦前の合宿を行った。主に走りこみと、アタック&ディフェンス、コンビネーションが中心の調整&フィジカルアップの合宿である。これは毎年恒例なのだが、研修所の周りには何も無く、たった一軒の駄菓子屋さんのような店があるだけ。社会との接点は全く無くなる。練習に集中するしかないし、外部からの偵察の目からも逃れられる。交流試合は外苑前の秩父宮ラグビー場で毎年試合が行われるので、芝生のコンディションに足を慣れさせる目的もあり、一応芝生のグラウンドの石岡研修所を例年秘密特訓の場として、石井監督は選んでいた。サインプレー確認とアタック&ディフェンスでの実践練習、FWのスクラム強化などを入念に行い、2泊3日のミニ合宿の石岡から、元住吉のホームグラウンドに戻り、最後の調整をし、交流試合に臨んだ。

12月14日 場所は聖地秩父宮ラグビー場。天気は良かったが、気温は低く、冬らしい天気であった。芝生の色はあせて、枯草のような色になっている。帝京大学はこの年調子がよく、対抗戦で早稲田を破って、4位に食い込み、交流戦に出てきた。いわゆる赤い旋風の1年目の話である。当時は伝統校の中には、新興チームとの対戦がないカードがあり、その当時慶応義塾は帝京とは対戦が無かった。

法政は、ゲームの主導権を握って、終始ゲームをリードして展開したが、この年の帝京は、後にトヨタに行った田村選手を中心としたバックス陣、同じくトヨタに行った塚本選手や我々の代の日本一、大工大高の田中良選手（東芝）などによる強力FWに威力があり、モール・ラックのボールの奪い合いもかなりしつこく、ターンオーバーされる場面も時々合った。なかなかトライに結びつけることは出来なかった。

ロースコアのまま後半に入り、このまま行けば今年目標の大学選手権に行けるという雰囲気法政に流れ始めていた。残りの時間は、掲示板の時計ではあと2分ほどだった。しかし点差は4点、トライ・ゴールで逆転されてしまう。法政も油断は出来ない。左ウイングの鬼沢選手がこの時怪我をして、帝京はリザーブの坂上と言う選手を投入。帝京大の最後の反撃が始まった。

センターライン付近に帝京がハイパントを上げて、フォワードをラッシュさせる攻撃を仕掛けてきた。この時、帝京のスクラムハーフだった私の本郷の同期池澤は、『時間が無いって言うのになんで蹴るんだ？』と疑問に思ったそうだが、法政のフォワードがそのパントに対

し、派手にノックオン。敵ボールのスクラムになると思った瞬間、ノックオンしたボールが、その池澤（本郷OB）の手にすっぽりと転がり入った。その時一瞬の油断が法政選手の中に起きていた。レフリーの笛が鳴っていなかったのだ。レフェリーはアドバンテージを取っていてプレーオンの状態だった。帝京はそのボールを池澤が左ラインに即座に展開し外へ外へと回していく。法政は油断した分、ラインが整っておらず、完全に余ってしまった。

私はその時オープンサイドにおり、抜け出してきたセンターの相澤（久我山日本一メンバーの1年生・現NECグリーンロケッツ監督）とFB浅見（本郷高先輩・NEC）と変わったばかりのWTB坂上の3人が目の前に迫ってくる。中央突破はまずいと判断し、私はセンターの相澤にタックルに行った。しっかりパックも入り相澤は倒すことが出来た。しかし顔を上げて後方を振り返ると、タッチライン際を走る21番の背番号が、フランカーの駒井先輩を抜き去ってゴールに走りこむ姿が見えた。万事休す。相澤はタックルを受けながら味方バックスにパスを出していたのだ。

リザーブの坂上を回り込ませないようにフォローした法政選手の手前で、坂上選手は静かにボールをタッチダウンした。この時点ですでに帝京が逆転し法政10-11帝京。法政メンバーはインゴールに戻り、ボールをセットする帝京スタンドオフの前に立ち、プレッシャーを掛ける準備をする。私も必死になって、プレッシャーを掛けに行く準備をした。まだ1点差であれば、PG1本でも再逆転出来る可能性があるからだ。

スタンドオフが1歩踏み出した瞬間に、ほとんど全員の選手がプレッシャーを掛けに行った。しかし、必死のチャージは及ばず。ボールはHポールの中に吸い込まれていった。ゴールのホイッスルの直後に、ノーサイドの笛が秩父宮に鳴り響いた。怒号のような大歓声が帝京応援団から上がり、我々はその場でグラウンドに倒れこんだ。法政の大学選手権出場が、赤い旋風の帝京大学に阻まれ、帝京が大学選手権初出場を決めた、その瞬間だった。最終スコア 法政 10-13 帝京 藤本キャプテンの代のシーズンが終わった。

【昭和59年（1984年）シーズン】

昭和58年度シーズンは、平尾さん大八木さん、林さんのいる同志社の大学選手権2連覇で終了した。

悔しい思いをした、このシーズン。我々は気持ちを新たに、早坂新キャプテンの元、もう一度チャレンジし直しの年が始まった。この当時のシーズンは、皆さんオールドファンはご存知の通り、1月15日の日本選手権でシーズンの幕が降りる。同志社 VS 新日鉄釜石 それは二年続けてのカードになった。釜石にとっては、日本選手権5連覇が掛かった年であった。

松尾さん、森さん、洞口さん千田さんと、全日本メンバーを持つ新日鉄釜石は、同志社の挑戦を力で跳ね除け、5連覇を達成。まさに日本ラグビー史に偉大なる足跡を残している真っ最中であった。その当時の新日鉄の監督が、法政OBの中西監督だったので、法政はたびたび釜石を訪れ、日本一メンバーと一緒に練習し、指導を受けた。

そんな新日鉄釜石と法政大学の関係から、気仙沼での親善試合が開催される事になって、春シーズンに日本一のメンバーと対戦することになったのだ。私が三年になったときの春シーズンのことである。単独大学で親善試合にせよ、日本一の社会人チームと対戦し、その強さを肌で感じられる経験は貴重な経験となった。

結果は当然のことながら、釜石の勝利。でも法政も2トライは返すことが出来き、45-12。レジェンド達と対戦できたことは本当にいい経験だった。その中で釜石と言うチームの底力を感じたプレーが私の中に鮮明に残っているのでここで紹介したいと思う。

後半のプレーのなかで、法政がチャンスを迎え右に展開し、第二センターの横に入ったフルバックのところ、釜石に止められた。そこでポイントになって、いい球が10mライン付近で法政に出てきた。右サイドにまだ走れるスペースがあったので、左から移動してきた法政スタンドオフ村田から、フリーでボールを受け取ることが出来た私は、サイドを守っていた釜石のフランカーを振り切り右サイドタッチラインギリギリにゲイン突破することが出来た。そのまま突っ走りあと5メートルでトライと言う所まで来たとき、見えない角度から私に襲い掛かるタックルの手が伸びた。次の瞬間タッチの外にそのタックラーと共に飛び出してしまった。

タックラーは日本代表ナンバーエイト千田選手だった。我々学生相手に、一切手を抜かない、全日本の選手の全力プレー。本当に凄いと思った瞬間だった。

【ルーツ校慶応義塾大学】

一本目ウイングとして定着目指した、昭和59年度。春シーズンでは、普段戦わない相手と試合をするが、その中の相手に慶応義塾大学がある。後に公式戦でいちもつポロリをフォーカスされ有名人になってしまった、村井選手や、キャプテンの全日本松永選手がいた代である。

当時の法政は、合宿所が元住吉だったので、日吉の慶応とは隣り合わせ。日程が合えば、定期的にゲームを行った。慶応義塾大学のその頃は、フォワードが強く、徹底したアップアンドアンダーでフォワードをラッシュさせる戦法が多かった。

私はこのシーズンから、右から左ウイングへコンバートされ、11番を背負う事になった。右ウイングには、目黒高校の準優勝メンバー、伊藤が入るようになった。左ウイングは、左足でのパントを、各種マスターする必要がある、練習もプラスアルファが必要だったが、なんとか定着できていた。

この時の試合は、法政のキャプテンでセンターの早坂さんと慶應のキャプテンでセンターの松永さんのキレの良いステップが目立った試合で、ほぼ互角の展開。大学選手権出場チームとも、十分に戦える事を証明できた試合だった。残念ながら試合結果のデータは無いが、良い試合内容で引き上げたのを覚えている。

松永さんは、私のことなど当時知らなかったが、2009年にドイツから私が帰国した後に、私の当時の会社に松永さんが訪問する事がわかり、和歌山のオフィスでお会いした。当時のスリムな感じとは違い、貫禄の出たビジネスマンになられていたが、共通の知人も多く、短い時間であったが、ラグビーの話をさせて頂き、同じ時を過ごしたラガーとして楽しく話をさせて頂いた。こういうところが、ラグビーの良いところである。

【初の本郷高校の後輩が加入】

私が3年生に進級した年、法政大学に入学してきたルーキーの中に、第63回花園大会に東京の代表として再び出場を果たした本郷高校の後輩が二人入って来た。ロックの園部（高校日本代表）とスクラムハーフ飯野である。

彼らは1本目で試合に出ていた私を見て、進学先としての法政を見る事が出来ていたのは、私の時とは全く違う環境であり、彼らの立場で考えれば、直接一緒に高校でやっていた先輩が上級生に居るという事だけで、親しみも少しは感じられてくれたかなと、今までの苦労が少しは報われた気がした。

園部は本郷高校のロックとしては、今までで一番大きい体格の持ち主だったろう。身長も185cmほどあり、体重も90kg近くに達していた。法政に入って来ても直ぐにジュニア戦に出るようになって将来を期待される選手になった。飯野も園部と共に、日本選手権の前座試合、高校生の東西対抗戦の東日本代表に選ばれた選手で、将来が期待された。私としても、自分の直の後輩の入部は素直に嬉しかったし、これがまたその後の後輩に繋がって行けばと願ったものである。

元住吉で撮影された 1984 年度の 1 本目メンバー。園部は秋には 1 本目に昇格した。後列右が園部でその隣が筆者。園部の右が主務の小林。園部と私の間に居るのが大草（目黒）写真の一番左が、石井監督（当時 48 歳）



【夏合宿でライバルとの対決・そして怪事件】

夏場のラグビーのメッカと呼ばれる長野県菅平高原。私にとっては三度目の菅平合宿であった。法政大学は山喜荘と言う歴史のあるホテルに泊まっていた。練習グラウンドまでは、ボロボロのバスに乗って、3kmほど離れたグラウンドに行く。朝は軽く牛乳とバナナを摂取し、すぐに朝練習に向かう。朝 8 時から 11 時までの 3 時間、みっちり走りこむ。体中の水分が抜けてしまうかと思うほど走る。走る。練習が終わると、決まってすぐ脇に流れている小川で冷やしたスイカを食べて水分を補給する。これがうまい事うまい事。一回の合宿でのスイカの摂取量は、物凄い量である。

この年の夏合宿で、前の年優勝争いをした、専修大学との練習マッチが行われた。この年 11 番の左ウイングに変わった私は、秩父宮で対戦したときにゴール前でぶち当たった、あの佐藤龍と対面になる。ところが試合の途中にアクシデントが起きた。ハイパントをキャッチしようとした佐藤 龍が空中戦で法政の選手と激突して落下。顎の骨を砕く大怪我をしてしまったのだ。これで佐藤はこの年のシーズンの半分近くを棒に振ることになってしまった。

ラグビーにケガは付き物。その為に筋肉の鎧を身につけ、ケガから自身を守っていかなければならない。佐藤は物凄い体の持ち主。上体及び下半身の筋肉は、大学生としては並外れた物を持っていたが、顎だけは筋肉で鍛えることは出来ない。担架で運び出される佐藤を見て、気の毒に思った。

実は、この年の夏合宿前の春シーズンで、私も練習マッチではじめて骨を折る怪我をして戦列を離れた時があった。試合中に相手のハイタックルで相手の頭が私の頬に当たったのだ。頬骨の陥没骨折だった。手術でその陥没を補正しようとする、整形外科の先生の話だと上唇の内側から顔の皮を持ち上げ、陥没した部分にシリコンを詰める手術を行えば、きれいに直ると説明を受けた。聞いただけで気持ちが悪くなるような手術だったし、更に詳しく聞くと、頬の皮が自然に陥没した骨を引っ張り上げて、段差は出来るけどくっつくと言う説明があったので、私はその自然治癒を選択。ちょうど合宿前の短いシーズンオフの間に完治させることが出来た。

夏合宿で、我々は昨年の無念を晴らすために、厳しい練習を課せられた、ランパスではスピードが落ちると、何処から拾ってきたか、バットほどの太さの木の枝を持った石井監督から、容赦ない愛のムチが背中に入ってくる。全員がトップスピードでゴールを駆け抜けないと、ラストが掛かっている『アゲイン』になる。1年生2年生には物凄くきつい合宿だったと思う。

この年の合宿は、2次合宿が富士山の麓の湖の近くでも行われた。それはシーズン直前の仕上げの合宿であった。グラウンドの周りには、限りなく続く青木ヶ原樹海が広がっている場所だった。スタンドオフの村田がタッチキックを蹴ると、ロングキッカーの彼のボールは、樹海の中深くと入り込んでしまう事がある。そんな時ボールを捜しに行く役目は、そのキャッチを反対側でしている、1-2年生のウイングの役割だった。

この二次合宿も、まだ暑さの残る9月の上旬の話。涼しい富士山の近くの話とは言っても、走り込みのきつさは半端では無かった。午後の練習が終わり、いつものように、スタンドオフ村田のキックの練習が始まる。1-2本目のウイングは、アタック・ディフェンスで対面を抜き去る練習をしたりするが、SO 村田のボール拾いには1-2年生のウイングがこの日の練習でも付いていた。日も傾き始め、アフター練習も一段落したときに、村田が異変に気が付く。

村田 『おい！もっくん(私のあだ名)、伊東知らねえか？』

伊東とは、昭和57年度花園準優勝した時の目黒のウイングの選手である。

私 『あれ？ボール拾いやってなかった？』

村田 『いや、さっき中に入っちゃって取りに行っちゃあ。それから見てないんだよね。』

私 『え？？』と言って、村田が指差す方向を見た。大きくそびえ立つ富士山とその手前に続く、巨大な青木ヶ原樹海。二人は目を見合わせて、青ざめた。

二人で伊東の名前を大声で呼んだが、返ってくる返事は無かった。

樹海にボールを探しに行ったまま、姿が見えなくなってしまった二年生ウイングの伊東を、村田と私は呼び続けた。

『伊東～！出口はこっちだぞ～！』回りに居た部員も声を上げるが、返事はない。先に宿舎に引き上げていた監督に状況を報告し、暫らく様子を見ることにした。間もなく日もとっぷりと沈み、部員の心配もつのが、伊東は結局宿舎のホテルに帰ってこなかった。

翌日、“搜索願い”が出される中、伊東の安否はまだ掴めない。彼の居た部屋には、彼の荷物がそのまま置いてある。伊東の行方が分からなくなった翌日の練習も、予定どおり行われた。村田のタッチキックのキャッチング相手に名乗り出た私は、実際に樹海に蹴り込まれたボールを拾いに行った。樹海に足を踏み入れて、10メートルほど入りボールを探していると、たしかに自分がどちらを向いているか分からなくなる。頼りは、グラウンドでまだ練習している部員の声だけだ。声の聞こえる方向に行けば、グラウンド方向に脱出出来る。

そこで私には、ある疑惑の念が湧いてきた。グラウンドに響く声を聞いて方角を確認する事さえ出来れば、グラウンドから、宿舎のホテルに繋がる200メートル程の距離を、誰にも見られることなく、樹海の中で進むことが出来るのではないか？と言う疑問である。つまりこれは、樹海での遭難を装った、逃走なのでは無いか？

しかし、そうだとすると、近くに施設も、交通手段もない、この地域から東京に戻るのには簡単では無いはずである。宿舎から離れば離れるほど、本当に遭難してしまいかねない。

様々な憶測が頭をよぎる。二日目の夜を迎えた。

伊東が消えて二日目の夜。遭難ではなく、脱走の可能性もあると言うことで、石井監督から伊東の家族に連絡し確認を取ることになり、自宅の電話番号を調べて連絡してみるようになった。

連絡を取ってみると、翌日東京の自宅に帰宅していた事がわかった。無事だったのだ。練習の厳しさに負け、ボール拾いをしているときにふと思い付いた脱走計画であったようだ。

しかし、家に帰るまで、どうやってたどり着いたのであろうか？考えようによっては、そっちらのほうがかきつかったのでは？と思えるところも合った。今でもその部分についての詳細は謎である。あの目黒高校の準優勝メンバーが逃げ出そうと思うほどの厳しい練習。経験の無

い人には想像もつかないと思う。とにかく走りこみの凄さは、法政ボックスには避けられないものであり、練習後には血尿がでたりするほど、体には負担が掛かるのだ。

しかし、皆が練習中に脱走を図った、伊東の決断とその大胆な計画の実行力。それは花園で決勝まで登り詰めたプレイヤーの持っている大きな器だったのかもしれない。彼は大学卒業後実家の洋菓子屋をついで、今では複数の店舗を大田区に持つオーナーとして頑張っている。

【日大戦】

関東大学リーグ戦グループ1部が9月に開幕。ディフェンディング・チャンピオンとして迎えるこのシーズンは、連覇を掛けて戦う年として、前のシーズンとは違う立場で迎えるシーズンとなった。他の大学も戦力を補強して、リーグ内では法政戦に皆照準を合わせて倒しに掛かってくる。より一層油断できないシーズンとなるのは必至だった。

その時のリーグ戦1部は、専修大学、日本大学、大東文化大学、中央大学、拓殖大学、関東学院大学、国土舘大学、東海大学、そして法政大学の9チームで構成されていた。対抗戦グループとの違いは、下部リーグがあった事。関東大学リーグ戦グループの2部以下6部までには、正確にはわからないが、少なくとも数十チームと言う大学が控えていた。実力が落ちれば、当然2部以下への降格もある。

このシーズン法政大学は2連覇に向けて、好調な発進をした。昨年度優勝チームは、下位のチームから順に対戦していく。記憶では上に書いた順番が上位からの順番だった気がするが、正確には覚えていない。法政は当時、リーグ戦の旗頭として、毎年必ずNHK総合テレビでの中継が1試合は必ずあった。この年のNHKの生放送では、日本大学戦がそれに当たった。法政は日本大学戦まで全勝。二連覇に向かって進んでいた。

秩父宮での決戦の日、この試合に勝てば最終戦を待たずに優勝が決まる大事な試合は、秩父宮ラグビー場で行われた。昨年、この日本大学に敗れた事で、優勝までの道のりは最終戦までもつれた。同じ事は繰り返したくない。みんな気合が入っていた。しかし、日大も昨年法政を破って優勝のチャンスを掴んだのに逃してしまった。

その悔しさを、この試合にぶつけて来るに違いない。油断は出来なかった。

14:00 キックオフ。日大には本郷から行った同期のフランカー中野とロックの白石、後のリコーで同期のSH 畠山などが居て、フォワードに機動力のある良いチームだった。法政は主導権を日大に握られ苦戦。追いかける展開となり、厳しい戦況となった。日大にセーフティ・リードを許してしまった後半30分過ぎに、法政にチャンスが訪れる。スクラムから左

ボックスに展開し、フルバックが参加してゲイン突破し、ポイントになった。そこで法政は良い形でボールを素早く出すことが出来、法政スタンドオフ村田がフリーの形で順目にボールを受け取った。

村田は、FWのタックルをステップで交わし、私は直ぐ横をフォロー。タッチラインから5メートルライン内の狭いスペースを完全に二人で裏に抜ける。ボックスのカバーが来たところで、村田は相手を引き付け私にボールを預けた。もう一人逆サイドウイングが私めがけて来ているのが、右45度に見えた。22mラインあたりが接点となりそうだったが、自分を信じてとにかく真っ直ぐにゴールを目指した。相手が間合いに入ってくるところで、もう1段ギアをシフトアップして、ライン際ギリギリで振り切った。眼前にもう誰も居ないインゴールがパッと開けた。左ウイングで初めての秩父宮でのトライだった。

ゴールも村田がしっかりと決め、ワントライで逆転できる所まで日大を追い詰めた。法政は残りの数分間で、敵陣に攻め込み、フォワードのパワープレーで何とかトライをもぎ取ろうと攻め続け、法政の時間帯が続いたが、時既に遅し。ディフェンスの堅い日大フォワードの壁を崩すことは出来ず、ノーサイド。この試合での自力優勝を逃すことになってしまった。

【2連覇達成へ】

最終戦。相手は昨年優勝争いをした、専修大学であった。専修大学には、佐藤龍と言うパワープレーの14番と、11番には技巧派で、相手を振り切るスピードの持ち主である、長岡選手（本田技研鈴鹿 全日本）が居た。長岡選手とは同じ11番だったので、対面では無かったが、お互いディフェンスの場面で接点があった。一度は法政スタンドオフ村田のライン裏へのパントを自陣ゴール前寸前で拾い上げ、なんとかタッチに逃れようとした長岡選手にタックルに行き何とか足首に入って倒す事が出来き、法政のトライチャンスに繋ぐことが出来たプレーである。

法政はこの日もフォワードの活躍もありトライを重ね、セーフティ・リードに広げて居た終盤、長岡選手が自陣で良い形でボールを受け取りライン裏に抜け出して来た。私は逆サイドのウイングの位置からバックアップディフェンスに入っていたので、長岡選手に狙いを定めてタックルに行こうとした時、内側に当たりに来ると見せかけた長岡選手の体は、大きく外側に切るステップを踏み、私は完全に逆を取られる形で振り切られてしまった。私とは全く別のタイプの技巧派のステップは見事としか言いようが無かった。長岡選手は、その後二人ほどのタックラーをタッチ際で振り切って、インゴールに飛び込みトライ。ゴールも自分で蹴って決めたが、この試合は法政がリードを固く守って勝利し、関東大学リーグ戦グループで久しぶりの2連覇を飾った。

【釜石合宿】

リーグ戦の最終戦。優勝をかけての専修大学との試合に勝利した我々は、リーグ戦グループの二連覇を達成し、前年度逃してしまった大学選手権に向けての挑戦が始まった。

例年の如く、王者新日鉄の胸をかりに、釜石合宿に行く事になった。この頃には、松尾さんの後継者として、明治大学で活躍した小林日出夫さんが入社して、新しい顔触れが増えていた。

12月の釜石は当然寒い。昼間は我々だけで練習するが、昼間仕事をしている釜石メンバーとは、夕方の練習から合流する。朝の時間帯は、ゆっくり体を起こすため、軽いウォーキングで、散歩がてら宿舎から釜石漁港まで行き、柔軟体操で体をほぐす。

すると、漁港のおじさんが近寄ってきて、話し掛けられた。

「おはよう！この前日大戦見たよ。良いトライだったけど、おぞかったねあ！」この前のNHKの日大戦の試合を見たというのだ。

私「はい・・・どうも・・・」近くに石井監督が居て、

石井監督「あの試合で決めなきやいかんですな！また、釜石の胸借りて、仕上げ直しです。」どうやら、漁港の責任者の方らしく、毎年来ている石井監督とは顔見知りのようだった。しかし、こんな所で「見たよ！」なんて言われると思っていなかったのだから、改めて全国放送って東北でもちゃんと流れているのだと、知らされた瞬間だった。下手なプレーをすれば、全国のファンは結構しっかり見ているのだと教訓になった。

【レジェンド達の直接指導】

夜の練習。この頃の釜石はスター軍団である。誰もが一度はテレビで見たであろう選手が、目白押しだ。その中でも、松尾雄治さんの存在は、そのカリスマ性から一際目立っている。その松尾さんから、直接アドバイスを受けられる事は、本当に有り難い話だった。

この日のアドバイスの中では、バックスの判断について、色々とお話頂いた。

松尾氏「バックスはいかにして、フォワードを前進させてあげるかを、その時のベストの方法でやらないとダメだ。いいか？例えば、スタンドオフがボールを受けたとき、もしくは第一センターでもいいや、サインではウイング直のゲイン突破のサインが出ていたとしよう。でも、相手のウイングが、回すことを警戒して、上がってきていたら、スクラムだったらスタンドから、ラインアウトだったら、センターから、そのウイングの頭の後ろにキックして、全員でプレッシャーをかけたほうが、ゲイン出来てしかもチャンスが広がる可能性が上

がるだろ？常に状況をよく見てプレーし、ベストなプレーを選択する事が大事。分かるな？」

と言った具合に、丁寧に教えてくれる。松尾さんだけじゃない。プロップの洞口さんやナンバーエイトの千田さんも同じように、スクラムやモールの練習で、懇切丁寧に指導してくれていた。本当に偉大な方々だった。決しておごりは無く、大学生相手に分かりやすく指導してくれる。

練習にも段々と熱がこもってきて、アタック・ディフェンスの相手をしてもらう頃には、そこにいる全員の体から湯気が上がっていた。

【2年連続帝京との交流試合】

因縁の対決の決戦の時がきた。

昭和 59 年度、交流試合の対戦相手は、前のシーズンと全く同じ、対抗戦グループ四位の帝京大学に決まり、いよいよ法政大学がリベンジを果たす時が来た。

12 月の中旬の秩父宮ラグビー場は例年通り快晴ながら冷たい風が吹く日だった。法政は今年こそは帝京にリベンジを果たし、4 年ぶりとなる大学選手権出場を果たしたかった。序盤は探りを入れるような展開で、一進一退の攻防を繰り返していたが、まずは法政が前半の中盤で先制トライを決め 6 - 0 とリード。その後法政は帝京フォワードの縦攻撃を受けて、突破を許すと、連続攻撃であつという間にゴール前に迫られた。帝京フォワードの威力もたしかにあったが、ここまで脆く防御が崩されてしまうとは、思ってもみなかった。

【交流試合ハーフタイム】

石井監督「攻撃が単調すぎて、相手に読まれているぞ。敵陣に入ったら、アップ&アンダーを使って揺さぶりを掛ける！」と攻撃に変化をつけるよう指示が入った。

後半キックオフ。反撃を起こすはずの法政が、逆に勢いに押され、自陣に釘づけにされる。なかなかついている隙を帝京は見せなかった。それどころか、フォワード戦で有利と見るや、徹底的にフォワードで仕掛けてきて、我々の陣地でチャンスをうかがっていた。この反撃により法政はワントライ・ワンゴールを失い 6 - 6 の同点となった。

後半 10 分。相手のノックオンで得たマイボールスクラムで、この試合スタンドオフに抜擢された 2 年の大草から、サインが出た。ハイパントのサインである。私は大草の背後に立ち、ブラインドからライン参加するようなふりをして、オンサイドを掛ける準備をした。落下点で相手ウイングにドンピシャでタックルに入るためである。(オンサイドとはボール

を蹴った本人の代わりに前方のプレーヤーを追い越して、キック・オフサイドの 10mサークルを解除する事)

大草のハイパントは、高く正確な距離感で、ターゲットの帝京ウイングに向かう。私はオンサイドを掛けて、トップスピードで落下点に向かった。帝京ウイング 14 番の清水（ゼンリンデータコム）は、22 メートルライン内側で、フェアキャッチの体勢に入っている。私の目にはウイング清水の腰の位置がロックオンされた。ボールの落下速度と私の走るスピードを考えるとこのままのトップスピードで行けばキャッチした瞬間にドンピシャでタックルできると瞬時に計算した。

帝京ウイングの清水が「マーク！」とフェアキャッチのコールを言い終わる前に、その体が宙に舞った。

帝京大学の清水は、まるでタックルマシンのように、体をくの字にし、バックしている私もろとも後方に一回転した。恐らく交通事故級の衝撃だったと思うが、ボールを離さない帝京清水も流石である。このプレーは石井監督の指示により、準備されていたプレーで、練習ではターゲットに正確に落とすハイパントを大草に要求していた。我々TBの選手が、その落下点にあるタックルマシンをタイミング良く倒す練習を繰り返し行ってきたのである。

帝京大清水のフェアキャッチはレフリーに認められずに、ボールをキャッチ後に落としたのだが、それを上手く帝京FWのロック塚本さん（トヨタ自動車）がボールを拾い上げ、帝京のSH池澤（本郷高同期・東芝）がタッチに逃げた。しかし、帝京ウイング清水は、まだ起き上がれない。芝生の上で腹を押さえてもんどり打っている。腹の溝に入ったらしく、味方に腹を伸ばしてもらい、やっと立ち上がって、グラウンドに勢いよく唾を吐きつけた。どうやら闘志に火をつけてしまったようである。

法政ボールのラインアウト。敵陣 22 メートルの内側で試合再開だ。良い位置のマイボールラインアウトを得た法政大学も、やっと反撃に入り、しばらく法政の時間帯が続く。

しかし、帝京スタンドオフ渡部監祥の切れのある攻撃で、一度受け身のディフェンスをしようとして、下がりながらのディフェンスを強いられ、味方をラック・モールに巻き込まれながらどんどん後退してしまうと言う最悪のパターンに陥った。帝京フォワードの威力もたしかにあったが、ここまで脆く防御が崩されてしまうとは、思ってもみなかった。この一連のパワープレーで簡単にトライを与えてしまう。帝京は次のトライで逆転し法政 6-12 帝京となりリードを許す事になった。

法政も、バックで巻き返し、1 トライを返し法政 12-12 帝京としたが、ここで帝京司令塔渡部の個人技で、ゲインライン突破からの攻撃により、防御ラインをずたずたにされた法政は、渡部からウイング清水のコンビネーションで、さらに連続2 トライを許してしまい、法政 12-24 帝京と逆にセーフティ・リードを許してしまったのだ。なかなか決定機を迎え

られない法政だったが相手の反則で得た PG を法政が攻め切り 1 トライ返して 18-24 と再び 6 点差に詰め寄る。なんとか 1 トライ 1 ゴールで追いつける範囲に迫ったが、残り時間が 10 分少々。法政サイドに焦りが出始める。帝京大学は再び攻撃体勢に移り、法政陣内に入り込み、連続攻撃を仕掛けてきた。

時間が刻一刻と刻まれて行き、後半残りあとわずかの所で、帝京大学司令塔渡邊にまず PG 3 点を加算され 18-27。終盤に更にだめ押しのトライが帝京に生まれ、18-31 でノーサイド。決死の覚悟で挑んだ試合だったが、法政は赤い旋風の帝京大学の前に脆くも崩れ去り、二年連続で破れると言う返り撃ちで完敗した。

最後の試合となってしまった、早坂キャプテンは、涙を見せまいと、いち早くグラウンドに一礼し、俯きながら足早にロッカールームへと引き上げた。その後ろ姿が、悔しさを無言で物語っていた。この日の敗戦は昨年のロスタイムの逆転以上に、重く押し掛かる結果だったと思う。リベンジを誓って立ち向かった我々を、返り討ちにした帝京の戦いぶりは、見事と言うしかなかった。帝京の池澤・渡辺のハーフバック団とウイング清水の 3 年生トリオの活躍が光った試合だった。

最近帝京の集まりに呼んでもらった際に撮った写真 右から帝京スタンドオフ 10 番渡辺、対面ウイング 11 番の清水 筆者本木 左が帝京小澤（大工大高花園優勝メンバー）



【リーグ戦選抜チーム】

三年生も終わりの、昭和 60 年春（1985 年）前年度の公式戦ベストフィフティーンを中心に関東大学リーグ戦グループ代表が選出され、台湾遠征チームが関東協会から編成された。

59 年度、フル出場を果たした私は、運良く関東大学リーグ戦グループのベストフィフティーンにも選ばれており、この遠征に参加できる事になった。

法政、専修、日大、国士舘、拓殖、中央大学を中心とした、25 名の選手団は、ジャパンの本城さん、吉野さんを含む、オール早稲田と共に遠征し、台南の高雄のチームとまず対戦し、最後に台北の国立競技場にて、台湾代表チーム『光華隊』と対戦する。私にとっては、初のナショナルチームとの対戦になる。三月、もうすぐ春という時期に遠征は組まれていたが、その頃の台湾はもうすでに日本の真夏の気候であった。

今から四半世紀以上前の 1985 年のその遠征では、前年度の優勝監督、法政の石井監督が指揮をとり、コーチとして、国士舘の二ツ森監督が参加していた。

まずは、我々が降り立った台北空港で、真っ赤な横断幕で、台湾協会の方が歓迎してくれた。選抜チームの経験は、高校三年生のオール東京以来であったが、今回は海外遠征。期待を胸に、移動のバスに乗り込んだ。

まず、空港から台北市内ホテルまでのバス移動で驚かされた事。それはバイクの多さと、台北市民のその乗り方である。バイクに二人乗りは、当たり前。なんと三人乗り、四人乗り、私が見たなかでは、五人乗りまでを目撃したのだ！まるで無法地帯(笑)なんのおとがめもなく、悠々と公道を走る。しかもノーヘルで！なかなか信じがたいが、これが 33 年前の台湾だった。日本と比較すると 30 年近く遅れた印象である。

ホテルに着くと、各部屋に分かれ少し休んだ後、歓迎パーティーに向かう。オール早稲田とは、唯一この歓迎パーティーだけ、スケジュールが一緒だった。

この遠征では、実はもう一つチームが帯同していた。そのチームの名は、「世田谷レディース」日本の女子ラグビーの草分け的存在のチームである。

台湾には当時女子ラグビーチームは無く、女子サッカーチームが即席でチームを編成して、我々の試合の前座マッチとして、世田谷レディースと対戦する事になっていた。パーティーには、もちろん台湾の女子サッカーチームのメンバーたちも参加していた。

その歓迎パーティーでは、各チームが出し物を用意して、それぞれ披露するのであるが、我々リーグ戦代表チームは密かに練習してきた、台湾の国歌を石井監督の音頭で、台湾語で披露した。これは、現地の方々の気持ちをがっちり掴み、大喝采を浴びた。さすが国際感覚の豊かな石井監督のアイデアだった。

昭和 60 年 3 月 遠征先の台湾で練習をしながら、ついにナショナルチームとの対戦の日になった。

ウイングには、法政の 2 年生ウイングの伊東（樹海脱走事件の本人）と、中央大学の中野（3 年）が入り、私は 12 番センターを任されることになった。HB 陣は SH 畠山（日大 3 年ーリコー）で SO 村田（法政 3 年ーマツダ）つまり今で言うアンダー 21 で台湾ナショナルチームに挑む事になる。

試合会場は、台北にある国立競技場のようなスタジアムで、ナイターで行われた。3 月と言っても、日本の真夏並みの気温なので、その辺が考慮されての物だった。台湾代表はほとんどが社会人で、軍隊から来ているものも居るようだった。さすがに社会人で体は大きい。しかし、ラグビーでは遅れている国であるし、我々も勝ちに行くつもりで戦いに挑んだ。

我々の応援は、世田谷レディースのメンバーだけと言う、完全アウェーの状態、接戦を繰り広げて、リードで迎えた後半の終盤で、私の対面のセンターがゴール前のチャンスで縦突破を図ろうと勝負してきた。久しぶりのセンターだったが、ここで行かせたら逆転と言う場面だったので、こっちも必死でタックルに入り、相手を仰向けに倒すことが出来た。元住吉タックルスクールでの特訓が実った瞬間である。やはりラスト 1 本が掛かった時のあの気持ちを思い出すと、1 本のタックルにも魂がこもる。応援の世田谷レディースからも、『本木さ～ん！ナイスタックル～！』と地味なプレーに声援の声が掛かった。

最後のピンチを切り抜け、この試合見事に勝利を物にした我々リーグ戦グループ代表は、学生だけのチームでナショナルチームを倒す快挙を成し遂げた。これは、本城さん吉野さんなどサントリーのプレーヤーを含むオール早稲田より、評価の高い勝利だった。

この台湾遠征と一緒に遠征した、世田谷レディースとの合同練習？での一コマ。石井監督の指示で、

『リーグ戦代表メンバーのフォワードが、世田谷レディースのフォワードにスクラム練習の台になってやれ！』と言う話になって、スクラムをやることになった。

フロントローは、法政同期の林田（高鍋高校・高校 JAPAN）と法政 60 年度キャプテン西条（報徳・現報徳学園監督）だったが、スクラムを組んだ時に、林田からもれた言葉が周囲の笑いを誘った。

林田「ありゃー？ なんかええ匂いするのお〜！」

周囲は爆笑だ！ 普段汗臭い男としかスクラムを組んだことが無い彼らである。女性特有のシャンプーの香り。その匂いを嗅いでしまったら、力が入らず、スクラムも押されてしまうだろう。いや、それは冗談であるが、この時の林田の一言は、一生忘れられない思い出。相当な実感がこもっていた。

台北の大統領府前で、関東大学リーグ戦グループのメンバーで記念撮影



【法政大学ラグビー部に激震】

約 1 週間の台湾遠征から帰国すると、法政大学ラグビー部に激震が走った。

3 月末に行われた、OB 総会において大学選手権出場を、リーグ戦を制しながらも、二年連続で帝京に破れて逃した責任を問われ、石井監督が更迭されてしまったのである。バックスとして石井監督に鍛えられてきた私は、急に訪れた師の退陣に大きな衝撃を受けた。

変わって監督に就任したのが、早法時代の立役者の一人で、全日本の CTB、桜とシダの会メンバーの島崎文治先輩だった。島崎さんは、マツダ OB で、当時 40 才。まだ引退して数年しか経ってない、バリバリのラガーである。

島崎監督は、まず我々に説いたのは、勉学と部活の両立。今までの慣習だと留年した選手は、公式戦初出場から四年未満だったら、五年生、六年生でも出場させる場合もあったが、この年から一切の留年選手の出場をやめた。

また、石井監督とは違い、サラリーマン監督のため、仕事の関係で練習に来られない場合もあると言うことで、自主性を重んじた部の活動を推奨した。スパルタから、自主性へ。法政大学は大きな変革期を迎えたのだ。

【島崎新体制】

島崎新体制でスタートを切った、法政大学は豊富なコーチ陣を迎えスタートした。

島崎監督の後輩にあたる、武村秀夫バックスコーチ（早法時代の FB・四谷笹寺住職・1992 年法政大学監督）、中村コーチ（明治生命）など、バックス出身のコーチが多かった。

コーチは多いのだが、皆さん昼間自分の仕事を持っている。島崎監督は、会社から特別な許可をもらって、早めに退社して、仕事の都合がつけば、5 時からの練習に間に合うように出てきてくれていたが、出席率は 100%ではなかった。そういう場合は、他のコーチ陣が必ず出てくるような体制が連携されて取られていた。

島崎監督は、良くアタック・デフェンスの練習に自ら参加するなど、積極的に体を使って技術を教えるタイプのコーチングをしてくれていたが、さすが元ジャパン。島崎監督のハンドリングは超一流だった。なにより、手の大きさが身長割りに大きく、ラグビーボールを片手で持っても自由に扱える。ダミーパスなど、完全にボールが手から離れたと思ったのに、まだ持っていたとか、とにかく手にボールが吸い付いたような扱いが出来る。後は、法政伝統のハリーパス。目にも留まらぬ早さでパスを回す。我々は眼を見張ったものだ。そんな良い手本を目の前にして、我々バック陣も更なる技術向上を目指していった。

5 年目の選手は退部するという、部の新方針に従って、前年度キャプテンの早坂さん、時崎

さんの両 CTB は引退となり、新しいセンター陣を構築する必要があった。

島崎監督から、リーグ戦グループ代表でセンターを勤めた私に、今年度はセンターにもう一度戻って欲しいと言い渡されて、約1年半ぶりにセンタープレーヤー専門に戻るようになった。ボックスの立ち位置から、変則的なフォーメーションなどを、島崎さん独特の理論に基づいて叩き込まれ、自主性を重んじた、法政ラグビーがスタートした。

【YCAC JAPAN 7人制大会で金星】

春毎年行われる、YCAC の 7人制大会は、桜の咲く四月の月上旬に行われる。私も三年生の春から、出場するようになり、この年は二回目の出場となった。

何回戦か忘れたが、社会人の強豪、サントリーと当たり、見事に大金星をあげることが出来、記憶に残っている。

その時のひとこまが、下の写真。ラグビーマガジンの人が、撮ってくれて、大会後私にくれたものだ。背中に 14 番を見せられているのが、サントリーの本城さん。先の台湾遠征で、オール早稲田の 10 番を背負っていた、当時の大スターの一人である。



この瞬間は、センターをやっていた私が、本城さんを引き付けて、二年生ウイングの兵頭(ニコニコ堂 OB)に、ラストパスを送った所。このパスを受けた兵頭は、インゴールにそのまま飛び込んだ。

この試合では、スタンドオフの村田が、インゴールまで蹴りこんだボールに対し、私が最後までチェイスして、押さえたトライも生まれ、走り疲れたけど、若さで勝った試合だった。他には、全日本のスクラムハーフの小西さんもいて、そうそうたるメンバーのサントリーに勝てたことは、7人制ではあったけれど、自信に繋がった試合だった。

YCACの七人制は、社会人、学生が入り乱れて行う大会でもあり、お祭りのような物ではあったが、とても楽しい、和やかな雰囲気の中で人気も高い。お客さんにとっては、グラウンドの脇で、芝生のうえに足を伸ばしながら、迫力あるプレーをすぐ目の前で見ることができて、我々選手にとっても大満足の観戦であった。

【最終学年の春シーズン】

この年の法政大学は、センターでキャプテンだった早坂さん、時崎さんの両先輩が抜け、センターのレギュラー経験者が全く居なくなってしまった。ウイングの若手経験者は、兵頭と樹海逃走犯の伊東が居たので、島崎監督からはセンターをやるように言い渡された。センターは、同期の黒谷と一緒にやる事になったが、私も1本目でのセンターの経験が無かったので、一からのコンビネーションとなり、なかなか苦労した。やはり、2枚センターが抜けてしまうと、チームとしてなかなか厳しいものがある。島崎監督直伝のセンターの動きを学びながら、二人で模索する日々が続く。スタンドオフ村田も、フルバックへのコンバートなど、大改造が行われた。

春の練習試合の成績もあまりよくなく、あっという間に春シーズンが終わり、夏合宿での追い込みで、何とかチーム作りが見えてきたかなあ？という頃、私は足の指にヒビが入る怪我を、練習試合で起こしてしまい、今までせっかく構築しかかってきた、バックラインに穴を開けてしまうことになる。シーズン目前での出来事である。

親に丈夫な体に産んでもらった事もあると思うが、試合に出場出来ないほどの大けがは今まで経験したことが無かった。足の指の骨のヒビは大した怪我では無い。ヒビが入った指が右足の親指だったのがまずかった。利き足の親指は、走る時やステップを踏む時に最も重要な役割をする。その指の骨にヒビが入るとどうなるか？走るたびに1歩1歩激痛が走る感じである。手の小指の剥離骨折はしたことがあるが、その時は薬指を添え木にしてテーピングテープでぐるぐる巻きにして固定して、そのまま試合に出続けた。手の場合はそういった応急処置でもなんとかなるが、地面に常に着いた状態の足の親指を負傷してしまうと、そうはいかない。見た感じどこも悪くない様に見えるが、実は普通に走る事すら出来ない状態であった。

写真は、後列左端から島崎監督、本郷コーチ、森、本木、西条、浅見、濱田、境。中列左から鈴木、寺井、木村、内山、黒谷。前列左から松原、村田、小林、上林、林田。)



法政大学ラグビー部にとっては、全く経験の無い若手の登用を余儀なくされて、シーズン開幕当初よりギクシャクとしたスタートを切らざるを得なかった。法政大学ラグビー部の大低迷時代が、この時から始まった。

【リクルート活動】

4年生のもう一つの大事な活動の一つに、就職活動がある。島崎監督と相談しながらいろいろと4年生は進路を考えて行くのであるが、当時私の所に一つの誘いが入っていた。それは、あの世界のトヨタ自動車からの誘いであった。トヨタ自動車のラグビー部部長は、オールブラックスジュニアを破った時の全日本キャプテンで、桜とシダの会メンバーの尾崎正義先輩であった。尾崎先輩と島崎監督のジャパン繋がりもあり、怪我で別メニューのトレーニングをしていた私に声が掛かったのである。トヨタ自動車は中部地区の強豪で、チームの強化に乗り出しており、そのバックスの強化の一環で声を掛けて頂いた。非常に光栄な話である。春シーズンも終わりに近づいた7月。ラグビー部の春シーズン打ち上げのイベントがあるので、部の見学も兼ねて愛知の豊田市の本社工場にあるラグビー部に訪問する話が持ち上がった。

私は、新幹線に一人乗り込み、名古屋を目指した。名古屋に降り立つのはこれが初めての経験であり、お会いした事も無い尾崎大先輩にお目にかかるという事で、その緊張感もさるこ

とながら、あの世界のトヨタ自動車をこの目で見る事が出来るという事に、興奮は収まらなかった。名古屋につくと、大先輩尾崎さんが車で迎えに来てくれていた。

尾崎先輩『よく来てくれたね。法政のOBの尾崎です。よろしく。』

私『法政大学の本木です。宜しくお願ひ致します。』がっちり握手を交わした。

尾崎先輩は、想像していたより小柄な体格で、ジャパンでセンターを守っていたという感じでは無く、よくこの体格でオールブラックスジュニアのメンバーと渡り合ったな？と逆のサプライズがあった。しかし、その眼光は鋭く、ジャパンのキャプテンを張っていたという独特のオーラを感じた。

この時の訪問の日程は 1泊 2日の見学となった。まずはトヨタ自動車ラグビー部の春の納会である、紅白戦をグラウンドで見学し、練習終了後にホールにて納会にも参加するというスケジュールだった。その後はトヨタ市にある、尾崎先輩宅に宿泊させてもらう予定になっていた。今考えると、この見学会は、至れり尽くせりの物だったと思う。ラグビー部長自ら駅まで迎えに来てくれたり、家に宿泊させて頂いたり、そんな接遇を大学生相手にして貰えるような事はなかなかある事では無い。偉大な先輩にそこまでして頂けたことに、今更ながら感謝の気持ちでいっぱいである。緊張もしていたこともあり、細かな事まで記憶が定かではないが、忘れられないエピソードは、納会の様子であった。全部員が正装であるブレザーを着用し、一同に会した納会の席で、尾崎部長に全員の前で紹介された。

『法政大学のセンター・ウイングの本木選手が見学に来てくれました。みんな宜しく！』

トヨタのメンバー全員から拍手で迎えられる。そして、ビールが注がれ春シーズンの納会の乾杯が行われた。選手の顔を見渡すと、見覚えのある選手がちらほら居る。秩父宮で死闘を繰り返したあの帝京大学の面々である。田村選手、塚本選手はすぐに分かった。宴席が進むにつれ、会場も盛り上がり来て、塚本選手が一発芸をやると言う。手を使わずにコップに注がれたビールの一気飲みをやるというのである。

塚本選手『じゃ、行きます！』

どうするのかと注目していると、大きく開いた口で、コップを丸ごと啜りこみ、そのまま上を向いて中のビールを口の中に一気に流し込むという、離れ業をやったのけたのだ。社会人ともなるとこれくらいの一発芸は身に付けておかないとやっていけないのか？と酒がアレルギーの私自身、少々不安に思った事を覚えている。お開きとなった後、名古屋のバーに尾崎部長に連れて行って貰い、夜も 9 時頃にご自宅にお邪魔した。尾崎先輩のご自宅は豊田市郊外にある、一軒家であった。

応接間に通されて、奥様がコーヒーを入れてくれた。そして、現役時代の数々の思い出のアルバム等を見せて頂き、その中でもラグビーマガジン等によく掲載されて見ることがあった、桜とシダの会の整列写真の原本を拝見し、その中のレジェンドである尾崎先輩とこうしていろんなお話を聞かせてもらっている事に感激し、心を動かされた。

東京に帰り、今まで東京に生まれ東京で育って現在に至っていた自分自身に自問自答を繰り返していた。『トヨタ自動車と言う完全に独立した環境の所で、本当に自分一人でやっていけるのであろうか？』大先輩である尾崎部長は居たけれど、直近で一緒にプレーしたような先輩は居なかったのも、私の不安要素の一つでもあった。トヨタ自動車と言うロケーションもあり、法政大学からトヨタ自動車への入社は暫く無く、現役には一人も先輩は居なかったのである。それプラス帝京から行った面々の何人かが、存在感を示している環境に順応できるのか？帝京に二年連続で敗戦し、二戦目では返り討ちにあった経験がトラウマになっていた事もあるのだろう。その負け犬根性が、トヨタに行くことに前向きになれなかったもう一つの理由と言え理由になるが、事の詰まり、怪我で休んでいたその時の自分の置かれた状況では、それらの不安要素を打ち消すほどの自信が無く、結局は逃げてしまったのでは無いかと、振り返ればそう感じている。

この話を、トヨタに行った親友國定精豪（目黒高校梅木監督の次男で、国体オール東京の同期。青山学院・明治大学・全日本・トヨタ自動車）に最近になって話をしたら、こんな風に一蹴された。

國定『おまえあほやなあ。俺だって酒も全く飲めないし、先輩もほとんど居なかったし、本木と同じだぜ。もし来てたら、一緒にやれたのにな。』精豪の言う通り、全く慣れない環境で、やり通すだけの自信が自分に無かったのだと、この一言で思い知らされた。もし、尾崎さんに精豪が来ることを知らされて居たら、私はトヨタ自動車に入社し、私の人生は全く違うものになっていたと思う。

【リクルート活動②】

トヨタの尾崎部長には、お礼の手紙を書き、お誘いに対し返事は待っていただく事にし、自分として日本一を目指し、ラグビーが続けていけそうなチームはどこなのか、考えてみた。島崎監督からは、『マツダ自動車（広島）なら、俺が推薦してやるぞ。』と言われていた。島崎監督はつい数年前までマツダ自動車の選手であった。法政大学の監督として推薦する事は比較的簡単だったのだと思う。私は一緒にプレーした先輩ボックスの中で、先輩が行った就職先を洗い出した所、その中で在京のチームで日本一が狙えそうなチームはたった一つしかなかった。リコーである。リコーラグビー部には、その当時監督だった水谷眞先輩（ジャパンで島崎監督と同期の法政OB）と、私が1年生の時の4年生で、憧れの

存在だった岩谷信弘先輩が居た。リコーは、水谷先輩が現役時代、2度の日本一に輝いていた、和製オールブラックスの異名を持つ古豪であり、東日本リーグでは度々優勝していた強豪チームであった。

まずは、先輩訪問だという事で、自分が怪我をしている間に、岩谷信弘先輩（八戸西高・リコー・岩谷水産社長）を訪問する事にした。岩谷先輩は、鶯谷にある、台東病院に入院中と言う事で、病院にお見舞いがてら訪問した。

岩谷先輩『おーもっくん！元気か？』岩谷先輩は、オール法政でも一緒にプレーした事がある先輩で、1年の時は可愛がってくれた当時4年生の先輩だった。

私『はい。自分も今怪我人で、試合に出られない状態です。今日は相談があって来ました。』私は、リコーからは今の所全くお誘いはないが、リコーに入ってプレーをしたいと考えて居て、どうしたら道が開けるかの相談がしたかった。と単刀直入に伝えたところ、岩谷先輩の答えは明快だった。

『俺が紹介してやるから、水谷さんを訪ねて、お前の想いを伝えてみろ！』水谷監督とは直接の面識は無かったので、私が欲しかった回答は、まさにこれだった。

【リコー本社訪問】

岩谷先輩から頂いたリコー本社の電話番号に電話して、当時海外営業本部課長だった水谷監督に電話を入れた。

『はい、リコー海外営業本部です。』水谷監督がはきはきとした調子で電話に直接出た。私『法政大学ラグビー部の本木です。岩谷さんから紹介頂きましてお電話しました。』

『お一本木か！岩谷から聞いてるよ。飯でも食って話をしないか？明日の夜6時に青山の本社受付に来てくれ。』話は既に通じていた。岩谷さんの根回しはさすがだった。

翌日、リコーの当時の本社事業所のあった、青山一丁目のオフィスを訪問し、受付の女性に『法政大学の本木と申します。海外営業本部の水谷さんとお約束をしています。』と伝えたところ、

『伺っております。少しお掛けになってお待ちください。』とソファを促された。

少しして水谷監督（法政大学・リコーOB 日本一メンバー・全日本・日本ラグビー協会現副会長）が上層階の事務所から下りてきた。私とは1対1では初対面である。水谷監督はNHKのラグビー解説もやっていたので、私の出ているゲームの日に解説に当たった事もあり、知ってはくれていた。

『お一本木。よく来たな！』がっちりと握手を交わす。

私『お時間頂きありがとうございます。』

水谷監督『あ、澤谷さん、今からこいつと食事に行くのだけど、一緒にどう？』と今受付をしてくれた女性に声を掛けた。全くのアドリブの感じだった。バブルの時代の話である。

澤谷さん『良いのですか？わたしもご一緒して？』

水谷監督『もちろん。男だけだとむさ苦しいでしょう？』

リコーラグビー部監督と言え、リコーで知らぬ人は居ない存在。和製オールブラックスとして、日本一のメンバーだった水谷監督の人気も凄かった。その誘いを断る人はまず居ないであろう。

本社から近い、青山一丁目のタワービル内の焼肉レストランに 3 人で入った。

水谷監督『じゃ、改めて、法政のラグビー部の後輩の本木です。澤谷さんよろしくね。』

澤谷さん『こちらこそ宜しくお願いします。』

私 『本木です。宜しくお願いします。』

焼肉を食べ、歓談が一段落したところで、水谷さんに私の就職活動について、経緯をお話した。

その上で、自分自身としては、在京のリコーで、日本一を目指して頑張りたいと、まずは想いを水谷さんにぶつけてみた。水谷さんは、即座に私に明快な道筋を示してくれた。

水谷監督『そうか。トヨタの尾崎さんに誘われたのか。尾崎さんは俺にとっても大先輩だから、失礼の無いようにしないといけないけど、トヨタなんか行かないで、リコーでやってみないか？ 尾崎さんには、きちんと手紙を書いて、お断わりしないといけないが、俺からも連絡して事情を話しておくよ。』横で澤谷さんも大きく頷く。水谷監督の監督推薦と言う事で、リコーラグビー部入団への道がこの面談時に開けて、私の人生の行く末についても、社会人としての道筋がほぼ見えた、水谷監督との出会だった。

【リーグ戦の敗戦】

昭和 60 年度 関東大学リーグ戦グループの公式戦が、スタートした。法政大学は島崎新体制スタートの大事な年。しかしながら、昨年の優勝メンバーから、レギュラーがごっそり抜けたチームには、当時 9 チーム制だったリーグ戦を勝ち抜き、3 年連続の頂点に立つには、明らかな戦力ダウンは否めなかった。私自身島崎監督に託されたセンターポジションの責任を怪我で果たせず、その戦犯になってしまった事はとても残念であり、悔しい想いをした。この年は、大東文化が外国人戦力で躍進し 2 位。そして、我々が優勝した年に必ず敗戦してしまっていた日本大学が 1 位。そして、毎年優勝争いをしてきた専修大学が 3 位、国士舘が 4 位と言う順位で、ついに最終戦を迎えたのである。法政は既に交流戦対象外の順位だった。

【引退試合 VS 中央大学】

このシーズンは私自身怪我で完全に調整が遅れてしまい、チームのメンバー構成に支障をきたす迷惑を掛けてしまった。

足の指の怪我が治って、練習に参加するも、今度は太ももの肉離れでまともに走れずに、試合にも出られない状態。チームは島崎監督体制で、リーグ戦終盤を迎え、対抗戦グループとの交流試合にも出られない順位が確定してしまっていた。そして迎えた最終戦。対中央大学 秩父宮。なんとかその試合には調整が間に合い出場する事になった。

島崎監督は、交流戦出場枠外の順位がほぼ確定してしまった試合に、頑張ってきた 4 年生を中心にメンバーを組んでくれた。島崎体制初年度の 4 年生最後の試合になるという事で、今まで 1 本目の試合に出場した事のない選手も、4 年生は全員出場出来るようにメンバー構成がされたのである。

4 年間苦楽を共にしてきた、仲間の中に、主務として頑張ってきた、小林司（甲府西高・オール山梨）が居た。彼は主務をしてはいたが、一般入試で法政に入って、体育会ラグビー部に入部して、レギュラーを目指して最後のシーズンもずっと頑張っていた。そういう縁の下でチームを支えてきた 4 年生にとっては、秩父宮で出来る公式戦での引退試合は、嬉しかった事と思う。

そんな親友でもある彼と、同じグラウンドに立つ事が、学生最後のこの試合で実現したのだ。私もそのこと自体については、大変嬉しく思い、最後の週の練習でも、お互いに調整を怠らず、中央戦での勝利を目指した。

試合本番で小林は、少し緊張した感じはあったが、フルバックとして立派にチームをリードしてくれていた。ああ、これが最後なんだなあと言う想いと共に、枯れた芝生の匂いが秩父宮のグラウンドで漂ってくる。あの冷たい風とあの芝生の香り。あれは一生忘れる事の出来ない記憶として私の五感に刻まれているのだ。

今でも、冬の秩父宮に行くと、いろんなシーンが不思議と蘇ってくる。花園を決めた初の戦い、熱い体のぶつかり合いや、インゴールに駆け込んだトライシーン、相手を宙に浮かせた渾身のタックル。そして、ロスタイムに逆転で敗れ、グラウンドに崩れ落ち悔し涙した交流試合。全てが自分の体に刻み込まれた記憶なのだ。この日の試合は、中央のキャプテンでもあり、リーグ戦代表でコンビを組んでいた、WTB 中野賀郎の活躍もあり、法政は有終の美で終えることは出来ず、最終戦を終えて、3 勝 5 敗で 6 位。4 年間で最低の成績で終わる事になってしまった。

法政の再生は、島崎文治監督と後の後輩達に託す事になり、元住吉で先輩方が築き上げてきた、伝統の法政大学ラグビー部寮は、この年を持って閉鎖。61年の部の歴史上、初の大幅移転をする事になった。それが現在の八王子キャンパスでの活動の開始である。

■【第3部～和製オールブラックスでの挑戦】

昭和60年度の大学ラグビーは対抗戦グループの明治大学と慶応大学の決勝戦となり、前年度まで3連覇していた同志社是一次戦で早稲田に敗れ敗退。平尾選手などスター選手が抜けた後の戦力ダウンが大きかった。決勝はどうなったかと言うと、12-12のドローとなり、珍しい両校優勝。社会人王者との対戦となる、1月15日の日本選手権へは、抽選の結果、慶応大学が進む事になり、明治は残念ながら4年ぶりの単独優勝とは成らなかった。

私は4年次に卒業に必要な単位が30単位ほど残っていたので、必要単位を全て獲得すべく最後の試験に臨み、何とかクリアする事が出来、晴れて社会人となる事が決定。胸を撫で下ろした。それほど裕福な家庭では無かったので、4年で卒業出来なければ、後は自分で何とかしろと言われながら、1年から3年までコツコツ学校に通いながら、単位を取っていったのが、他の部員と比較して良かったのだと思う。同期20名の中で、我々の学年では、4年で卒業できたのは私を含め2名だけだった。そういう状況が、過去の先輩方が5年生・6年生になっても部に残り、試合に出続ける習慣を生んでしまっていたのであろう。島崎文治監督になった我々の学年から、その習慣は完全に断ち切られた。卒業試験とも言っていない4年後期のテストも無事終了し、こつこつと貯金してきたお金を使って、私はアメリカへと卒業旅行に出た。1ヶ月半に渡る、一人旅である。アメリカと言う大国に初めて足を踏み入れたこの旅行で、大きなカルチャーギャップを感じると共に、その後の人生において大きな影響を受けることになる。なんと言っても旅の終盤に訪れたニューヨークでの経験が大学生の私に大きな影響を与えた。エンパイヤースタートビルディングや、クライスラービル、ジョージワシントンブリッジなどの古い建造物を目の当たりにして、これが第二次世界大戦以前の自分の母親が生まれた頃の物である事を知り、驚愕したのを覚えている。こんな国と戦争するなんて無謀だったのだな。とその時は単純に思った物だ。また世界のビジネスの中心である、ニューヨークでいずれ働いてみたいと、この時は心の片隅で考えた物だった。

3月も終わりの31日。株式会社リコーの入社式が行われた。それに先駆けて、世田谷区砧にあるリコーラグビー部 砧寮に入寮する為の引越しの準備を進め、入社式前の3月30日ギリギリで入寮を済ませた。この年の大学ラグビーからの新入部員は4名。早稲田大学よ

り入部したプロップの尾形進。関東大学リーグ戦グループを 1985 年度制した日本大学からは、リーグ戦グループ代表で一緒だったスクラムハーフの畠山礼光。大学 2 年の時に対戦した、専修大学のウイング、佐藤龍。そして法政大学から私の 4 名が大卒ルーキーとして入部（入社）を果たした。大卒のルーキーと言えば、即戦力を求められる。当時東日本 1 部リーグで上位だったリコーの新人ともなれば、ラグビーマガジン等で期待の新人として取り上げられ、注目されての入社であった。

私は当時センター/ウイングとして入部したのであるが、当時のリコーの 1 本目は、センターに川本さんと言う日本選抜の選手、あとは専修大学 OB の吉田さんの二人が存在した。ウイングには、左に一つ上の中央大学で対面だった西さん。右ウイングには、私の法政の先輩である岩谷さんがいて、この 4 人が当時の TB 陣のレギュラーメンバーだった。ハーフバック陣には、明治大学のレジェンド、スタンドオフ砂村さん。スクラムハーフ窪田さんが居て、フルバックには関東学院大学 OB の桜井さんの布陣が 1 本目のメンバーだった。



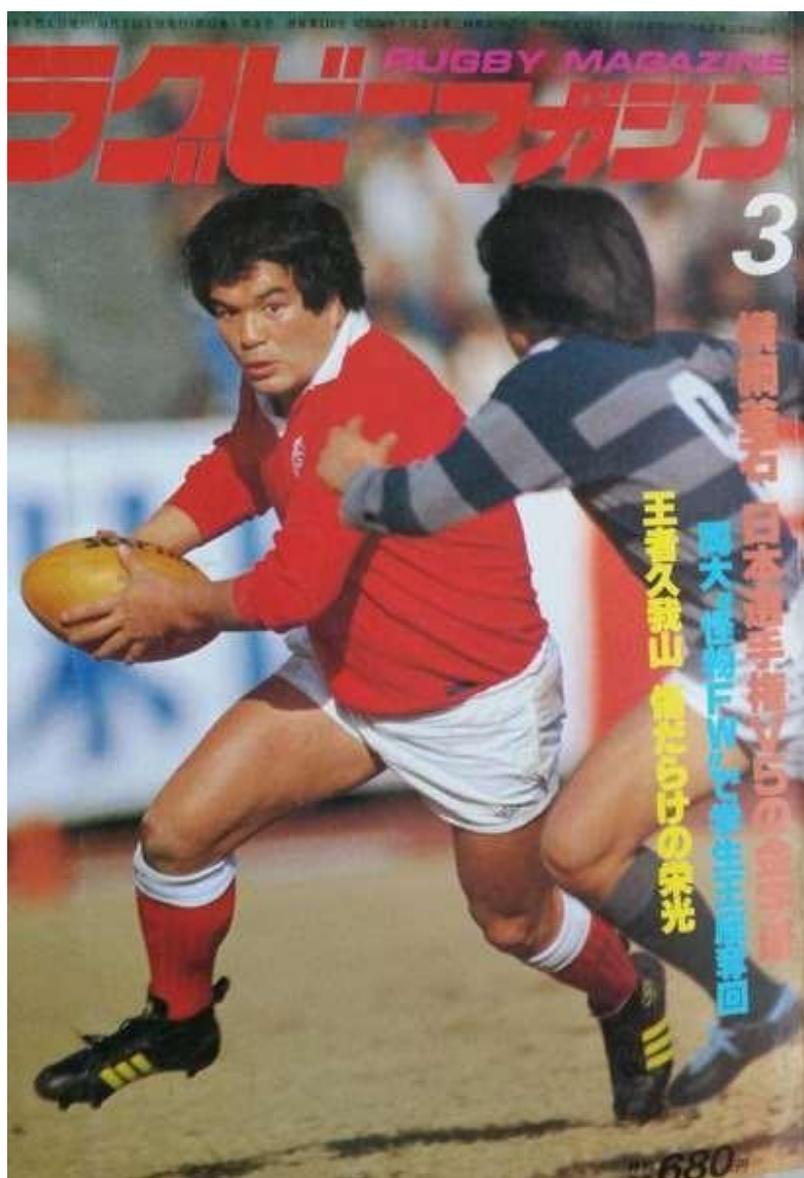
(当時のラグビーマガジン。左の写真でボールを持つ砂村光信氏とフォローする川本氏・吉田氏。右側の写真段柄ジャージが入社当時の私)

【春の東日本大会】

昭和 60 年度の社会人はと言うと、トヨタ自動車が優勝し、新日鉄釜石の時代が終わった。私が社会人になった時は、司令塔の松尾雄二氏は既に引退。センターの森重隆氏も引退し、新旧交代の時期を迎えていた。スタンドオフには明治大学から鳴物入りで入社した目黒高校出身の日本一請負人、小林日出夫氏が松尾さんに代わって司令塔を受け継いで居た。松尾さんからすれば、高校・大学も同じ直の後輩に託した形になる。

そんな新日鉄釜石と、大学時代の気仙沼の親善試合以来、直接対決する時が来た。当時行われていた春の東日本大会（トーナメント）の1回戦の話である。私は水谷監督に指名され、ウイングで先発する事になり、社会人でのデビュー戦を飾る事になった。

その試合で肌で感じた事は、V7時代の新日鉄釜石とは明らかに違うチームのような感覚であった。V7真っ只中の釜石には一種の輝きと、迫力が感じられたのだが、この時対戦した釜石にはそこまでの物は感じることは出来なかった。ベテラン選手が多く、それらの選手のパフォーマンスが2年前に対戦した時より明らかに落ちていた。



V5達成時の新日鉄釜石のプロップ洞口氏と同志社3連覇の立役者、同志社児玉耕樹氏プロップでV7の立役者の一人だった洞口さん（全日本）も試合に出場していたのだが、後半でボールを持ちこんだときにモール裏にいた私の所に洞口さんが突進してきた。後ろ

に誰も居ない状況で私の所で止めるしかない為、体格差は相当あるが足の低い位置に思い切ってタックルに入った所、上手くボールを殺しながら倒す事が出来た。プレーは続いたが、洞口さんは負傷したらしく立ち上がらない。足首をどうやら痛めてしまったようである。そのまま退場しリザーブの選手が投入された。洞口さんはその後、釜石をやめ、トヨタラグビー部選手兼指導者に転じるが、日本IBM監督在任中の1999年（平成11年）作務中に外出先で倒れ、病院に搬入され死去された。享年45歳。早すぎる釜石戦士の惜しまれる死だった。

突進力のある洞口さんである。V7当時の洞口さんであれば、容易に私などぶち飛ばして前進する事は出来たであろう。ところがこの日の洞口さんにはその迫力は無くなっていたように思う。試合は接戦の末リコーが勝利した。

私としては、この試合でディフェンス面は良かったのであるが、アタック面でミスをしてしまい、あまり良いデビュー戦にはならなかったと記憶している。試合後水谷監督にミスについて指摘され、次の試合では佐藤龍にポジションを変えられてしまった。

【リコーラグビー部の歴史】

ここでリコーラグビー部について、その歴史を振り返ってみたい。リコーラグビー部は1953年に同好会として創部し65年の歴史を誇る実業団クラブである。現在はリコーブラックラムズとチーム名を改め、トップリーグ創設当初からのチームとしてトップクラスで活躍している。過去の全日本のタイトルは、全国社会人ラグビーフットボール大会で3度優勝。日本選手権2回優勝。国体で1回優勝と、15人制では6回の全国レベルタイトルがあり、7人制の大会では、ジャパン・セブンスとYCAC JAPAN SEVENSでそれぞれ2回と3回の優勝を経験している。

日本選手権は昭和47年度（1972年）と昭和48年度（1973年）の2連覇があり、その時の中心選手には、水谷眞氏（現日本ラグビーフットボール協会副会長・法政OB・全日本）や、後川光夫氏（早稲田大学OB・全日本・元リコーラグビー部監督）井沢義明氏（早稲田OB・全日本）内田昌裕氏（中央大学OB・全日本）村田義弘氏（中央大学OB・全日本・元リコーFWコーチ・NHK解説者）伊藤忠幸氏（法政大学OB・全日本・現不惑クラブ会長）など、大卒の名だたる全日本メンバーを一気に揃え、その年代が20代後半の油の乗り切ったこの二年間にそのピークを迎え、日本選手権二連覇を達成している。この時に取った異名は『和製オールブラックス』ファーストジャージが当時からオールブラックスと同じ黒だったのと、当時その実力が伴った為についた呼び名である。その伝統が、現在のブラックラムズのチーム名にもしっかりと受け継がれているわけである。

この日本一世代の後にも、早稲田のフランカーとして、全日本のキャプテンも務めた石塚武生氏や、同じく早稲田のフランカーで全日本の伊藤隆氏（元リコーヘッドコーチ・現早稲田大学技術部長）など、錚々たるメンバーが在籍していた名門クラブであった。

【入部 1 年目の活動】

私がリコーを選んだ『在京チームで日本一が狙えるチーム』と言う一つ目の理由の他に、もう一つ重要な選択理由があった。それは、仕事もきっちりフルタイムで働いたうえで、世田谷の砧グラウンドで夜 7 時から練習を行うと言う点であった。なぜこのようなポイントが重要かと言うと、仕事もきちんと覚えられ、引退後も重要な仕事を任せてもらえるという、岩谷先輩のアドバイスがあったからである。そんな社会人ラグビーの一日はどんな感じだったかを振り返ってみる。

朝、6 時半頃に起床し、洗面を済ませてスーツへと着替え、寮の外に 7 時には出て、一緒に会社に行くメンバーと、会社の看板車に乗り込み世田谷の砧寮を出発。5 名定員のバンを使用しているの、ほぼ満員の状態で出発するのが常である。リコーの銀座事業所勤務の選手は 20 名ほど居るが、寮の者はその内 10 名程度。大体 2 台の看板車が銀座から来ているので、約束の朝の出発時間に遅れると、最後に出発するバンの荷台に乗るハメになる。

朝は、大体車の管理者である先輩が運転する事が多く、私は明治大学のレジェンド、砂村先輩の車に乗る事が多かった。入社の際の部門が一緒だったのである。

我々の居た部門は、東京支店大手営業部販売 1 課と 2 課であった。銀座のリコー三愛ビルの別館 6 階が、我々のオフィスであった。その時のメンバーは、砂村さんの他に、同じく明治大学 OB で、のちの全日本キャプテンになった相澤さん、センターの吉田さん（専修大学 OB）内田さん（中央大学 OB）仙石さん（専修大学 OB・1988 年度リコーキャプテン）それから同期の畠山（日本大学 OB）が所属していた。そしてもう一人、ロンドンの駐在から帰国したての大先輩。伝説のタックルマン石塚さんも同じ課で仕事をしていた。

リコーの銀座事業所には社員食堂があり、社員証さえあれば、食事をとる事も出来たが、朝食のメニューがあまり豊富な種類が無いのもあって、大体ラグビー部の者は朝食では朝食は取らない人がほとんどであった。でも何か腹に入れないと仕事どころでは無いと言うのも事実。その頃の習慣としては、石塚先輩の合図で朝一営業に出かけるふりをして、数寄屋橋の東芝ビルの地下一階にあった喫茶店でモーニングを一緒に食べて一日をスタートさせる事が習慣化されていた。会社を出るタイミングは、石塚主任（当時）がまず目配せで合図しいち早く出発。その 2 分後位に私とか畠山と言った若手が続いて出かけて行く

という流れである。新入社員には当時営業研修が課せられ、私と畠山は、千代田区丸の内の1丁目から3丁目を担当し、毎日50件以上の新規訪問を実施し、名刺50枚を毎日獲得してくる事が課せられていた。その間の行動は本人に任されていた事になる。

喫茶店につくと石塚先輩は既に到着。コーヒーを飲んでいる。『おう！もっくん、モーニングで良いよね？畠はまだか？』石塚さんは、我々新人に対しとても優しく、良い先輩だった。

さて、一日の流れに戻ると、喫茶店でモーニングを急いで食べた後は、数寄屋橋から仕事場である丸の内に徒歩で向かい、自分のテリトリーの雑居ビルを回り始める。50枚の名刺を獲得するのは結構忙しい。大体雑居ビルの最上階に登り、上から各階層をくまなく回って行くのである。

午前中にはおよそ20枚の名刺獲得。午後に残りの30枚を獲得するのが活動の目安である。その活動の中で稀に商談に繋がる事もあり、我々の半年間の研修期間でそのような商談獲得の目標は当時500万円とされていた。半年間の販売実習期間の自分の給料程度は、自分で稼げという数字である。500万を達成すれば、自分達の初任給、当時で19万8000円ほどはカバーできて営業利益も少しは残る計算になる。

当時のリコーは、P P Cと言う乾式複写機の新製品を発表したばかり、F T 5520と言う機種で、セールスポイントは紙の種類を5種類同時にカセットでセットできる点である。日本のマーケットは基本的にはA4サイズの紙を中心にビジネスで使われているが、その他にB5サイズとB4サイズ。それからA3サイズの4種類あればほとんどのドキュメントに対応できる。カセットが5種類刺せるようにしているのは、一番利用頻度の高いA4サイズをカセット2段分入れて置く事が出来るので、補充の手間が省けると言うわけだ。

お客さまを訪問すると、まずは受付に行くわけであるが、その段階から既に勝負が始まっている。大体受付の所で、セールスお断りとか張り紙が貼ってある所などもあり、そういう時は少し躊躇するが、とりあえず突入する。

『株式会社リコーの本木と申しますが、この地域を新しく担当する事になりまして、総務のご担当者の方にご挨拶に伺いました。ご担当者の方はご在社でしょうか？』

受付嬢『申し訳ございませんが、お約束の無い方のお取次ぎは致しかねるのですが。』

『左様でございますか？それでは、アポイントを取ってから伺いますので、ご担当者のお名前とご連絡先を教えてくださいませんか？』

こうやって、取り次いでもらえない場合、正当な手続きして面談のアポイントをとれるように、最低限の情報を得ないと帰れない。全体の 3 割位はこのパターンであるが、残りの 2 割が、既に取りのあるお客様でその場合はほぼ名刺交換までたどり着ける。残りの半分は担当者がでてきてくれるが、他社と取引しているので間に合っていると言うお客様がほとんどで、名刺交換を拒否するお客様がその 1 割程度存在する。つまり 5%程度のお客様は、面談しても名刺はくれない。50 枚獲得の道のりは結構険しいのである。そうやって夕方 5 時過ぎまで丸の内を回り続け、5 時半頃に銀座事業所に帰社し、課長にその日の成果を報告。6 時には、仕事が終わった者で申し合わせ、早く終わった者が回転式駐車場から車を出し、会社の裏通りで待機。メンバーが集合した所で砧へ向けて出発する。練習開始は 7 時である。練習は、火、水、金、土、日の週 5 回が全体練習日になっている。休みは月、木の 2 日間。砧グラウンドにはウェイトトレーニング場があるので、月木は個人で自主トレする選手も居る。リコーの練習はまずジョックのグラウンド 1 周で始まり、ストレッチ後、ウォームアップの軽いキックダッシュをし、FW・BKS 分かれてセットプレーの確認、FWはスクラム・ラインアウトなど、BKSはサインプレーなど、バックラインの攻撃の練習を行う。別れた練習の後、アタック・ディフェンスをFW・BKS揃って行い、最後に走り込みのランパスで追い込んで、ポジション練習でクールダウンして終了する。約 2 時間半の練習で 9 時半に終了。風呂に入って、10 時に夕食。洗濯等を済ませて就寝までが自由になる時間である。

当時携帯電話などまだ無い時代。寮には赤電話が一個玄関に設置してあり、彼女に電話する人の順番待ちが出来る。順番が回ってきそうもない場合、寮から 200m先の駒澤大学敷地に隣接した電話ボックスまで行くことになる。入社間もない者たちは、駒沢大学まで行くことが多い。寮では独身の先輩が結構いたので、致し方なかった。

【駒澤大学の電話ボックスで事件】

入社 2 年目の夏の雨上がり。駒沢大学電話ボックスに練習後電話をしに行った私は、電話をかけ始めて 1 分もしないうちに 4 人組の男に電話ボックスを叩かれ、あけるようにせかされた。一度ドアを開け静かにするように注意をした。それでも、傘でボックスを叩いて来るので、やむを得ず電話を切り上げ、電話ボックスを出たところ、私の周りを酔った 4 人が取り囲んできた。4 人の間を押し分けるように包囲網をこじ開けた所、後ろから持って居た傘の木の柄の部分で殴打して来たのだ。私も向こうがそう来たら、対抗する事は出来たのだが、その時 RICOH のロゴが入ったジャージを着用していた事もあり、こちらから手を出して相手に怪我を負わせるなどしたら、ラグビー部自体に出場停止処分などの迷惑が掛かってしまう事を恐れ、一切手を出さず傘の攻撃を防御するに留めていた。そうすると、何も反撃してこない相手を叩く事に快感でも覚えたのであろうか、4 人組は調子に乗って、攻撃

がエスカレーターしてきた。二人掛かりで羽交い絞めにして、手の自由を封じ、傘の殴打や蹴りを入れ始めた。頭は殴打で割れ、顔面に血が流れ始めた。腹を蹴られて前のめりになったところを、今度は顔面に蹴りを入れられた時に、前歯が折れた。

ここで私も我慢の限界になり、『おい、歯が折れたぞ！』と初めて腹から声を出した所。

『おい、やばいぞ。行こうぜ。』と誰かが促し、走って 4 人組は逃げて行った。

寮に顔面を血だらけにして帰ると、玄関の所で砂村さんが、電話を掛けていた。寮の管理人の勝木さんが私の顔を見て、

『本木君！どうした？バイクで事故ったか？』

それを聞いた電話中の砂村さんが、直ぐに電話を切って、声を掛けてきた。

砂村さん『どうした！本木？』

『はい、その電話ボックスで 4 人組の男に絡まれて、やられました。』

『なに～！！！！』

すると砂村さんが寮の管理人室のマイクを即座に取って、全館放送を入れた。

『本木が 4 人組の男にやられた！今からそいつらを探しに行くぞ！！』

血の気の多い先輩方が 7-8 人玄関にすぐさま降りてきた。その中には明治 OB の相澤さんもいた。そして近辺にまだ 4 人組が居ないか探すために勢いよく外に飛び出して行った。

結局、4 人組はその夜見つからず、警察に被害届を出したが、全く捜査するでも無く、調書を取って終わりと言う対応で、この事件はお蔵入りである。こういう時の団結力と言うかチームの結束は凄いなと感じた。他人の事はお構いなしと言う世の中の風潮が今のご時世だが、30 年前のラグビーチームと言う組織は、仲間の為には体を張る、独特の物があった。

翌日朝の車で砂村さんから言われた。『本木！なぜ、昨日傘で後ろから殴られたとき、直ぐに寮まで走って逃げなかったんだ？お前の足なら誰も追いつけないだろ？変に向き合っちゃったから、向こうも怖くなって攻撃し続けたんじゃないの？』

言われてみれば全くその通り。でもやられたらやり返すと言う小さい頃から染みついた習慣が邪魔して、振り返ってみたものの、リコーの看板を背負っている事にすぐ気づき、まるで壊れたロボットのような状態になってしまったのが良くなかった。『君子危うきには近寄らず！緊急時には韋駄天使って直ぐ逃げろ！』がこの『玉川大学電話ボックス殴打事件』の教訓となった。水谷監督や板垣マネージャーからは、一応、『よく我慢したな！』とは言われたものの、やはり『なぜ逃げなかったの？』と同じ事を言われ笑われてしまった。

一応頭皮も割れるほど、傘の柄で頭を叩かれた事と、右前歯を折られた事で、翌日、電話の相手て現在の妻の勧めもあり、順天堂大学病院での精密検査は受けた。結果『脳に異常無し』歯の方は板垣マネージャーからの紹介で、銀座事業所から歩いて行ける所にある、銀座1丁目の本山歯科医院を紹介してもらった。本山先生は、大東文化大学のOBで板垣さんの友人である。本山先生に歯形をとってもらい、差し歯を作ってもらった事にした。人生初の歯科治療であったが、歯を削るあの音はどれも好きになれるものじゃ無かった。その後、『ラグビーでもマウスピースはした方が良い！』と言う事になり、リコーラグビー部員は本山先生の所で、全員歯型をとり。マウスピースを作成した。当時としてかなり進んでいた方である。

【昭和 62 年度 (1987 年) ニュースター誕生】

ラグビーの名門秋田工業高校で、1年生から異例のレギュラーポジションを獲得し、日本一に輝いた選手が居る。吉田義人選手である。吉田選手は教員志望と言う事もあって、日本体育大学進学を希望していたが、明治大学のスカウト陣や当時の北島忠治監督が明治入りを切望し、日本体育大学の綿貫監督を拝み倒して獲得した逸材である。吉田選手は高校日本代表選手で、中学の時から注目される選手であった。その吉田選手は明治大学入学後も11番左ウイングとして1年からレギュラーポジションを張り、我々の代で言うと梅木精豪（現国定精豪）と同等以上の扱いを明治大学で受ける選手だった。

私が入社3年目の昭和63年度(1988年)に、吉田選手はなんと19歳で日本代表に招集された。オックスフォード大学戦で日本代表デビューを飾った。その吉田選手の居る明治大学とリコーが春シーズン練習マッチ組んだ。その試合、レギュラーの佐藤龍が怪我の為、私が14番に指名され先発。実はラグビー事情に疎い私は、この時吉田選手の存在すら全く知らなかった。知らぬは仏とは良く言ったものである。私はそんな日本ラグビー界のホープが対面だとは知る事も無く、変な緊張感を感じず、明大八幡山グラウンドでの試合に臨んだ。

開始と共にポジションニングすると、誰が自分の対面かはバックスの場合フォーメーションから直ぐに認識できる。その時の吉田選手の第一印象は、ずいぶん小さい対面だな。と言う印象だった。当時の明治は早稲田大学と並ぶ対抗戦グループのトップチームであったが、当時の社会人チームと大学生チームとでは、力の差は歴然であった。日本選手権の新日鉄釜石が危なげなく大学日本一のチームを破って来たのを見れば、その差は一目瞭然である。当然リコーも明治大学に負けるような事があっては、東日本社会人のトップチームの面目丸潰れになってしまう。

明治大学の強力FWに対しても、リコーのFW陣はしっかり自分たちのラグビーをして、良いボールをバックに供給してくれた。その時のセンターは川本さんと吉田さんだったが、ステップ鋭い川本さんが度々ゲインラインを突破し、良いタイミングでボールを私に通してくれた。第二センターを飛ばして、私へのダイレクトパスが川本さんから来た。私は対面の吉田選手が少し開き気味だったのを見て、その内側にカットインしながらボールを受け取り、吉田選手をスピードで交わすと、今度はスワープを切って明治のフルバックを外に振り切り、ゴール中央にトライを決めた。同じようなパターンがもう一度あり、私はこの日日本のトライを明治相手に決め、勝利に貢献できた。吉田選手には指一本触れられなかったし、結果ノートライに抑える事も出来たのだ。

試合終了後、見ていた明治 OB の砂村さんから『もっくん。今日絶好調だなあ！お前の対面ジャパンに選ばれた吉田だぜ。』こういわれて初めてそんな有名選手だったのだと知る事になったのだが、今思い起こすと、第一印象で自分の中で精神的優位に立てたからこそ、ノープレッシャーで活躍出来たと思う。この体験から、いかに人間の脳が、自分のパフォーマンスまで支配しているかが良く分かった体験だった。もし事前に吉田選手の事を詳しく知っていたら、恐らく普段しないようなミスでも連発していたのでは無いかと後で思った。言ってみれば心技体の要素のうち、この日は心と体で吉田選手に勝てたのであろう。その後の彼のトライゲッターとしての大活躍を見れば、技術的な物はやはりずば抜けた選手であったことは、ラグビーファンであれば周知のことである。

【石塚さんの去就】

話は少し戻り、石塚先輩の去就について書いておきたい。私が入社した当時の石塚さんは、年齢的には 34 歳で、イギリス駐在から戻ってきたばかりと言う事もあったのかもしれないが、国内の営業部では、ちょっとばかり異質な存在だったように思う。我々の上司からは、目をつけられていた。ちょうどバブル真っ盛りの時期と言う事もあり、手首に金のブレスレットなどをつけ、営業に相応しくないなどの評価をされていたのだ。しかし、そういった身なりとかを改めようと言う考えはあまり無く、自分の道を貫く人だった。

それともう一つ、イギリスでの駐在については、リコーの場合、全日本級の活躍をした選手にのみに与えられる言わば名誉職的な部分があり、コーチ研修を兼ねた駐在になっていた為、現地のラグビーチームに所属し、現地のコーチングを学ぶ目的もあった。ストイックな石塚さんは、現役に復帰するだけのフィジカルをキープして帰って来たので、チームに対し現役復帰を訴えていた。それが会社に受け入れられず、少し悶々とした日々を送っていたのも、上司の言う事を聞けない原因になっていたのではと、振り返ってそう思う。



写真は、岡本監督（本郷・日大・日本ラグビー協会理事）時代。石塚さん（右下）が現役で本社勤務。伊藤さん（右上）もこの時は現役。砂村さん（左）はまだ入社間もない頃。

石塚さんは、会社側との意見の相違により、昭和 62 年（1987 年）7 月にリコーを退職。その頃ラグビー部を強化し始めた伊勢丹に入社。監督兼現役選手として暫く活躍。選手として一線から退いた後は、前出の明治大学主将で全日本の吉田義人を勧誘するなどして、チームをさらに強化し、全国社会人ラグビーベストエイトまでチームを引き上げた。

伊勢丹がラグビー部を廃部したあとは、2001 年から 2006 年まで、日本ラグビー協会の強化コーチとして活躍。2005 年に私の息子のサッカーチームにタグラグビーを体験させるため、石塚さんをお招きし、サッカー少年達に指導をして頂いた。懐かしい話をして一緒に食事をした。2006 年からは茨城の常総学院のラグビー部監督に就任したが、2009 年 8 月 6 日に突然死症候群で他界された。57 歳。若すぎる死だった。とても残念な訃報であった。

【1986年から95年度までのラグビー勢力図と全国初タイトル奪取】

1986年度は、全国社会人大会の決勝は明治大学の國定精豪が入社したトヨタ自動車が、新日鉄釜石と対戦し、19-6と勝利し優勝。新日鉄は第二高炉・第一コークス炉休止となった前年度1985年に連覇が途切れ、復活を狙ったが、残念ながらトヨタ自動車に二連覇を許した。それを最後に2002年の最後の大会まで、決勝に進む事は無く衰退の一途をたどった。

1987年度は東芝府中とトヨタ自動車の決勝となり、東芝が13-6で勝利し初優勝。東芝のメンバーの中には、本郷高校の同期SHの池澤と後輩のプロップ反町が居た。

1988年（昭和63年）昭和の年号最後の年は、同志社大学の3連覇のメンバーを多くそろえた神戸製鋼が初優勝を飾り、そこから1994年（平成6年）まで優勝し続け、新日鉄釜石と同じ7連覇を達成した。1995年はその神戸製鋼も新旧交代の時期に差し掛かり、一度チャンピオンの座から退く。サントリーと三洋電気の決勝となり、27-27の大接戦となり、両チーム優勝。トライ数が多かったサントリーが日本選手権に進んだ。

私の居たりコーはと言うと、1990年度（平成2年）と1992年度（平成4年）にベスト4まで進出。初めての外国人選手2名をNZからサミュエル・カレタ（元全日本）とグレン・パターソン（コカ・コーラ・ウエスト・ジャパン元ヘッドコーチ）の二人を入部させ、ある程度の実績を残した。特に1992年度は王者神戸製鋼を追い詰めたが5点差で準決勝敗退。大きなチャンスを逃した。

私はリコーでは、ウイングとして控えの選手だった。同期の佐藤龍が14番、一つ上の中央大学OBの西浩一郎先輩が11番でレギュラーポジションを獲得していた。唯一の活躍の場としては、春のYCAC JAPAN SEVENSの大会だった。7人制の試合は、スピードはもちろんであるが、持久力も求められる為、私が選ばれる事が多かった。持久走では、世田谷区砧から大田区新丸子のキャノン本社往復約14kmの持久走でもいつもトップだったのと、短距離でもチーム上位の2-3番手の位置にいたので、出場させて貰った。この大会では、1971年にリコーは優勝している。水谷さんが現役の頃の話である。早稲田OBの後川光夫監督の平成3年度（1991年）に私がメンバーとして出場した時、それ以来20年ぶりの優勝を飾った。7人制ではあるが、全国レベルの大会で、リコーがタイトルを取ったのは、私が現役時代の時はこれが唯一のものであった。後川監督からその時のメンバーに優勝記念としてオールブラックスのジャージとチャンピオンと英語で刺繍されたリコージャージをプレゼントして頂いた。私にとって人生初の『日本一』のメンバーとしての勲章である。15人制とは重みが全く違うが、嬉しかったものだ。

15人制の試合は、怪我人などの状況によりセンター・ウイングのリザーブ選手としてベンチ入りする事は稀にあっても、当時は怪我人が出ない限り、交代できないルールであった為、出場機会はほとんど無かった。出場機会が無いと、やはり選手たる者モチベーションはどんどん落ちてしまう。引退後の身の振り方も考えなくてはいけなくなる。おのずと仕事にも力を入れて行かないと、会社に胸張って居られない状況になるのが嫌だったので、日中は仕事にも打ち込み、だんだんと良い仕事を取って来られるようになってきた。リコーでのラグビーキャリアの中で、ウイングとしてなかなか出場機会の無かった私を気遣ってか、一度、水谷監督・伊藤コーチにフランカーへの転向を勧められた事があったが、どうしてもバックで勝負したい気持ちが自分の中であって、お断りした。今振り返ると、もったいないオファーを断ってしまったと、若干の後悔も残る。当時 100mで 11 秒を切るフランカー選手は日本にあまり存在しなかった事を考えると、ポジション獲得のチャンスがあったのかもしれない。長年ラグビーを指導してきた指導者の目を信じて、新しい事に挑戦する選択肢を選ぶべきだったのかもしれないが、その結果については今や知る事は出来ない。

平成 5 年（1993 年）3 月に現役引退を決意し、同年 4 月には仕事で主任に昇格する事が出来、リコーでの本格的なキャリアを積んで行く第一ステップを踏む事ができた。平成 7 年（1995 年）係長に昇格後、1998 年にリコーラグビー部の営業マンとして、初のアメリカ駐在となり、カリフォルニア州 LA に赴任。平成 12 年（2000 年）1 月にはアメリカの本部であるニュージャージー州に異動し、NY の販売会社の国際営業部長を兼務するという経験に繋がり、現在の海外畑で働く自分の基盤が出来た。この経験が積めた時、最終的に私としてはリコーを選択して本当に正解だったと思う事が出来た。

【母校法政大学 ラグビー大学選手権初代王者復活への歩み】

法政大学は、昭和 61 年度（1986 年）に八王子移転後、必死の思いで島崎監督以下、選手達が、再生の道を歩んでくれた。徐々にリーグの成績も蘇り、本郷の後輩である園部と飯野の代では、リーグ戦で 2 位の位置まで復帰してくれた。交流試合でも、1986 年に早稲田、1987 年明治などと良い試合ができるようになって来た。但し、大学選手権への道は、1980 年に最後に出場して以来、閉ざされたままだった。その中で大東文化大学と言う新星の活躍の時代も 1986 年からの 3 年間で味わった。本郷高からは 85 年にセンターの永田、翌 1986 年には花園準優勝メンバーのロックの銅谷が入部。後輩が続いて入部して法政大学ラグビー部の再建に大いに貢献してくれた。

そして、島崎監督から、監督を平成 4 年（1992 年）に引き継いだ、四谷笹寺住職の武村秀夫新監督の下、その年にまず我々の時以来、8 年ぶりのリーグ戦の覇権を取戻し優勝。筑波大学との交流試合では、30-5 と圧勝し、大学選手権、正月の国立競技場での準決勝で明治大学を大差の 42-18 で下し、21 年ぶりの大学選手権決勝に進出復活に大手をかけた。

決勝では第一回から第 4 回までの同一カードとして早法時代と呼ばれていた、昭和 39 年度（1964 年）から昭和 42 年度（1967 年）までの時以来の早稲田との対決となった。

決勝戦は城北高校出身の全日本増保選手を中心とした早稲田バックス陣対、法政の 1 年生ルーキーHB陣、苑田・中瀬のコンビとの対決も楽しみにしていたが、予想通りの熱戦となり、シーソーゲームの様相を呈してきた。法政が先行する展開だったが、ゲームの終盤で早稲田増保に逆転トライを許した直後の後半 38 分頃、勝利を確信した、早稲田の応援団から校歌の合唱が始まった。ちょうどその時法政にとってラストチャンスとも言える、敵陣ゴール前 5 m 付近でのマイボールラインアウトを法政が得たのだ。フッカー坂田がラインアウトを投げ入れると、長身の 1 年生ロック藤原がタップボールをうまくキャッチし、そのままゴール目がけて猛突進。長い右手を最大に伸ばしてゴールライン真上に二人掛かりのタックルの上からボールをタッチダウン。白煙が舞い上がった。一瞬の静寂が国立競技場を覆ったが、次の瞬間にはその静寂が法政応援団からの勝利の雄叫びに変わり、劇的な逆転劇で、日本一に返り咲いてくれたのである。実に私の夢だった日本一の座に、あのどん底だった我々の代の 6 位の位置から、7 年掛けて、階段を一段一段登って勝ち取った、法政大学 3 回目の大学日本一の栄冠だった。早稲田、明治の両校を撃破しての優勝は、ほとんど過去に聞いたことが無い。国立競技場でその活躍を目の当たりに見られた事で、私の中の燻っていた物が一気に解けだして、スタンドで感激の涙となって溢れ出た。初代大学選手権王者のメンバーから、二人の二世選手をこの試合に送り込んだ先輩が二人居る。昭和 39 年度（1964 年）第一回大学選手権時 4 年生の竹部肇氏（リコーOB）と当時 1 年生で出場した、島崎文治氏（マツダ OB/ 法大元監督）である。お二人にとっても感慨深い勝利だったであろう。法政大学の大学王者の伝統が、親子 2 代に渡って引き継がれた瞬間だった。

竹部先輩とは、仕事上での繋がりがあり、竹部先輩が山口リコーの社長をされて居た時、私の仕事関係の出張でお世話になった。協和発酵の宇部工場に現地調査に行った際、初めて直接お会いする事が出来、食事をご一緒させて頂いた。それ以来のお付き合いで、最近インターネットの時代が来てからは、ソーシャルネットワークでの繋がりで、連絡を取らせて頂いて居る。今はお孫さんが高校ラグビーになっているので、先日是非 3 代での日本一を目指して欲しいとお願いしたところである。

（※令和 3 年 2 月追記）

令和 2 年（2020 年）竹部力（リキ）選手は、法政大学に進学し、1 年生ながら秋のリーグ戦でレギュラーポジションを獲得し、先発出場メンバーに名を連ねた。そして、1992 年の優勝メンバー伊藤剛臣もコーチに加わった。さあこれからの三年間。大学日本一の DNA がリーグ戦グループで躍動する事を期待したい。※

第一回 ラグビー大学選手権優勝記念写真 秩父宮ラグビー場



写真提供 竹部肇氏 竹部氏は前列左から 3 人目 後列左から 3 人目が島崎文治元監督。
その右隣りが水谷眞元日本ラグビー協会副会長 前列右から二人目が当時の石井徳昌監督

怪我の荒川淳主将を盛り立てた、ハーフバック苑田右二（神戸製鋼、全日本）、スタンドオフ中瀬真広（日本選抜）、ロック藤原和也の 1 年生トリオや、センターの島崎大地（トヨタ）、俊足ウイングの秋山公二（東芝）、キャプテン代行としてチームを引っ張ったウイングの星野荘司、強烈なタックルで、明治のキャプテン元木由記雄を撃墜した佐藤康樹・内田剛の両フランカー、軽快なステップでビッグゲインを連発したナンバーエイトの伊藤剛臣（神戸製鋼・全日本・釜石シーウェーブス）ら後輩たちの大活躍によって、私が高校・大学・社会人を通じ、念願だった日本一を奪回してくれた事で、私自身ラグビー選手として達成できなかったチャレンジにも、ようやく終止符を打つ決心が出来たと思っている。

私がラグビーと共に過ごしてきた、14 年間のキャリアの中で、法政大学ラグビー部の再建に向け、尽力して下さった先輩方、監督・コーチ陣、その時の現役のメンバーに対し、本当に『感謝』の一言に尽きる。そして、素晴らしい出会いと、何事にも挑戦し続ける気持ちの大切さを私に教えてくれたラグビーに、心から『ありがとう！』と今は言いたい。

平成 30 年(2018 年)1 月 15 日

令和 3 年(2021 年) 2 月 25 日改定

本木 毅

~あとがき~

平成 4 年度（1992 年）のヒーロー達を紹介したい。この中に本郷高校の後輩小野木が居た事も、私にとっては非常に感慨深い事であった。本郷高校からの第一号生として、途中で辞める事無く、後輩に繋ぐ事が出来き、私のその責任は果たせたと言う想いである。

法大ラグビー部 平成 4 年度（1992 年） 大学選手権 3 度目の優勝メンバー

主将 荒川 淳 （九州電力 OB）

1 番 下間 貴廣 （秋田工業出身）

2 番 坂田 正彰 （サントリーOB 元全日本・NHK 現ラグビー解説者）

3 番 中島 貴司 （クボタ OB）

4 番 藤原 和也 （東北電力 OB）

5 番 竹部 太郎 （九州電力 OB 父肇氏が第一回大学選手権優勝メンバー）

6 番 内田 剛 （ハードタックラーとして大活躍 92 年度大学ラグビーMVP）

7 番 佐藤 康樹 （準決勝の明治戦で内田選手と元木キャプテンを封じたフランカー）

8 番 伊藤 剛臣 （神戸製鋼 OB・釜石シーウェーブス 元全日本・令和 2 年法大コーチ）

9 番 苑田 右二 （神戸製鋼・元全日本・神戸製鋼元ヘッドコーチ・現法大ヘッドコーチ）

10 番 中瀬 真弘 （2002 年アジア大会日本選抜主将 U20 日本代表コーチ）

11 番 秋山 公二 （東芝府中 OB）

12 番 江田 憲仁 （NTT 東日本 OB）

13 番 島崎 大地 （トヨタ/父文治氏が第一回大学選手権優勝メンバーで、法大元監督）

14 番 星野 荘司 （主将代行・副主将 明治生命 OB）

15 番 斉藤 政美 （セコム OB 元セコムBKコーチ）

16 番 井村 拓也 （保善高校 OB）

17 番 東山 浩一 （クボタ OB）

18 番 島津 久志 （1993 年度主将 2017 年度～2019 年度 法政大学ラグビー部監督）

19 番 前田 芳人

20 番 小野木 修 （本郷高校 OB 法政大学職員・法大元監督）

21 番 小清水 一雄 （1992 年度副主将）

島崎文治元監督 武村秀夫元監督が故石井徳昌監督から引き継いで、日本一に復活させた時の様に、この 1992 年度のメンバー達によって、法政大学ラグビー部の二度目の復活を期待してやまない。是非いつの日か再び大学選手権決勝で躍動する法大フィフティーンをこの目で見たいと願っている。1992 年の優勝メンバーから、監督、ヘッドコーチが選出され

た今、2016 年度入れ替え戦の憂き目からリーグ戦 4 位とポジションを盛り返した。1992 年次と同じように、復活へのカウントダウンが確実にスタートした。

ロック藤原の再逆転トライのシーン。二人掛かりのタックルの上から手を伸ばす。



この優勝から早 25 年以上経過。2024 年の創部 100 周年までには是非復活してほしい。



写真提供 竹部肇氏（法大第一回大学選手権優勝メンバー）